精神病への理解

# 精神分析

★第7卷・第9號★昭和14年・9月★

自由戰爭時代ドイツ人の描けるナポレオンの戯畫

—「精神病者の繪畫彫刻」三五頁參照—

東京精神分析學研究所
出版部・・・・發行

昭和十三年六月十日第三種郵便物認可・昭和十四年八月廿五日印刷納本・昭和十四年九月一日發行・毎月一回發行

好評・三版出來！

大槻憲二著

菊版三百三十頁。灰色主調白文字高雅。挿圖數葉。布裝函入美本

（定價金二圓八十錢。送料十二錢）

**杉田直樹博士　東京朝日新聞紙上に　本書を評して曰く——**

性慾問題を眞面目に科學的に取扱はうといふ氣運が起らない限り、社會の陰慘な人事は何時の世迄もその暗い影で浮世の生活をじめじめさせることを止めないであらう。私共は宗教よりも倫理學よりも此の性慾心理學一篇の知識の方が遙に端的に且人道的に世人の苦惱を除去し、社會風俗の秩序を醇化する基本的の力となることと信ずる。大槻氏は夙に雜誌『精神分析』を主宰し又フロイドの全著作を譯纂し、精神分析學の上に多くの貢献をなしつゝある篤學者で、その熱心な態度は、多くの道學者が態と避けて見まいとする性慾心理のあらゆる課題を捉へ來つて、少しのいや味もなく又少しの卑しさもなく、極めて平易にのび〳〵と、しかも學問的の尊嚴並に正確を失ふこともなく、述べ去り說き來つて凡ての男女を首肯せしめるに足る。其文筆の力は敬服に値する程で、種々趣味ある圖版を多數收める所にも著者の關心の該博と、親切な人間味とが視はれる。私にとつては少くも多年の待望が本書によつて充たされたやうな氣がして誠に快い。

### 本書の五大特色

一、戀愛性慾の心理が種別的にも年齡的にも、全般的に、且組織的に說いてあること。
二、一般人に面白く、專門家にも啓發的なること。
三、實例は大部分日本的材料にして、著者自身の實驗觀察に基くこと。
四、斯學先哲の意見を尊重しつゝ、然も獨創的見解と發見とに富めること。
五、圖版を多く挿入して趣味豐かなること。

本鄕區動坂町三二七（振替）東京七八八一七番

**東京精神分析學研究所出版部**

# 精神病への理解・内容目次

# 『精神分析』第七巻・第九號

## 精神分析』第七巻第九號 巻頭言

### ★精神病者斷種法は豫防法か

精神病者の斷種を醫者が先立ちになつて騷ぎ立てると云ふのは、考へて見るとをかしなものではないか。醫者には精神病者が澤山出來る方が商賣にもなるし、研究材料も豊富になつて一擧兩得である筈だ。併しこんなことを公言する事は、醫者の品性を疑はれるので、滅多に云ふ人はないが、考へて見れは本當ではないだらうか。併しあんまり多過ぎても、醫者は何をしてゐるかと云はれる心配があるので、これまた困りものである。で、まづ何とか治癒しなくてはならないが、その治療にはあまり自信がないと云ふ場合には、照れかくしにでも何でも、とにかく何かの方法で（それが醫學的であらうとなからうと）これを絶滅することを考へねばならない。現在醫學界で問題になつてゐる（世間は割合に冷淡なのだが）斷種法と云ふものも、意地の惡い見方をすると、さう云ふ照れかくしとしての一面が（全面とは云はぬが）嚴存することを否定出來ない。本來醫者は、病氣になつた人を病氣でなくしてやつたり、病氣になりさうな人を病氣にならないやうにしてやるのが任務であつて、病氣になる人間を作らせないと云ふのは、一種の死刑の執行吏の仕事である。たゞ普通の死刑執行吏は特別の技術を要さないが、斷種法には醫學的な技術を要するだけである。併し、その故にこれを醫療だと思ふならば、大きな錯覺であつて、それは禁酒運動を醫療の內だと思つてゐる錯覺と同じ種類の錯覺であらう。

神經症や精神病が種々な心理裝置間の葛藤から生ずるものであることは、今や分析學の研究によつて明らかになつてゐるのだ。從つて葛藤を取除くやうにしてやれば精神病や神經症の豫防になることも、疑ひの餘地がないのだ。勿論我々とても現在の分析法の萬能を重唱はせぬが、せめて弊害の多い斷種法に注ぐ關心の十分の一でも分析學の方に注いで見ることは醫家の名譽でなからうか。

# 精神病に對するインシュリン・ショック並びにカルヂアゾール痙攣療法

## ——その精神分析學的側面觀——

山村道雄

近時精神病治療學的領域ではインシュリン・ショック及びカルヂアゾール痙攣療法に就いて喧しく論議されてゐる。インシュリン・ショック療法は次の如く施行される。卽ち患者の空腹時（朝食前）を選んでインシュリン（國產品としてはミニグリン、インゼリン、サノスリン等）を大量注射すると暫くして發汗、流涎が起こり、次いで患者は嗜眠狀態に、更に之に引續いて昏睡狀態に陷るのである。この昏睡はインシュリン注射によつて惹起される低血糖狀態の結果であつて、この昏睡を通例は約一時間位繼續せしめ、然る後糖給與卽ち胃消息子で砂糖水を胃內に注入するか、葡萄糖を靜脈內に注射するかによつて低血糖狀態を除去し昏睡から覺醒せしめるのである。かゝる昏睡を一日一回起こさせ、合計四十回前後反覆する。カルヂアゾール痙攣療法とは通常は强心劑として使用せらるゝカルヂアゾールの大量を出來る限りの急速度で靜脈內に注射する時起こる癲癇樣發作を疾病の治療に應用するのである。

インシュリン・ショック及びカルヂアゾール痙攣療法は共に最も屢々精神分裂症（早發性痴呆症）に施行されてゐるが、又憂鬱性或は不安性氣分を鎭靜せしむる事にも有効であると云はれてゐる。

抑も三大精神病の一であり、精神病患者の四十%を占めてゐる精神分裂症は多くの熱心なる學者の研究、卽ち病理組織學的、血淸學的、遺傳學的、心理學的、精神病理學的等多くの研究分野に於ける探索も現在依然として徒勞に近く、精神分裂症の本態は容易に把握し得ない有樣であり、從而本病の根本的治療は仲々に望み得なかつたのである。本病にも時として自然治癒を見る事は出來たのであるが、大體には殆んど不治と見做されてゐた精神分裂症もインシュリン・ショック及びカルヂブゾール痙

攣療法によつて發病後時日の餘り經過してゐないもの、例へば發病後半年未滿のものには甚だ良い寛解率を見、病氣が陳舊になればなる程効果が薄らいではくるが、大體五十%前後は寛解すると考へても差支へなくなつてきたと云ふ事は精神病治療學の一大進步であり、他方之ら療法の精神病研究に寄與する功績たるや甚だ大なるものと言はなければならない。かやうな譯であるから本病の本態も今後次第に解明されて最後の解決がつく日も來るではあらうが、然し前途は未だ程遠いものと考へざるを得ないのである。

フロイドによつて精神分析學が創められて以來、この精神分裂症なる疾患は自己愛性精神神經症に屬するものであり、患者がリビドーを對象備給（纒綿）から撤回する爲に早期幼兒期の第一次性自己愛の再現として第二次性自己愛と見るべき自我の擴大が齎らされて居り、更に自己愛的傾向が顯著である結果として精神分裂症に於ては感情轉移（轉嫁）の傾向は存在しないか或は存在するとしてもごく微弱であると云はれてゐる。

私は東北帝大醫學部精神科に於て患者がインシュリン・ショック及びカルヂアゾール痙攣療法から如何なる影響をうけるものであるかを觀察したのであるが、この際私に得られたる經驗を其礎として之ら療法の奏効機轉を精神分析學的に檢索してみようと考へるのである。

## （一） インシュリン・ショック療法

インシュリン・ショック療法に於て患者が如何なる心的活動を示すか、又インシュリン・ショック療法によつて患者の精神活動が如何樣に變化して行くかを知るのに便宜上本療法を昏睡に入る前、昏睡最中及び昏睡から覺醒した後との三段階に分ち觀察すると夫々の段階で次の如き興味ある問題に遭遇する。

### （イ） 昏睡に入る前の心理狀態

ショックを起こすに要するインシュリンの量、卽ちショック量には各人各樣の差異があり、更に治療繼續中初めの必要量より少量のインシュリンでショックを起こす事が出來たり、或は反對に次々とショック量を增加しなければ所期の目的卽ちショックが惹起されなくなつたりするのであつて、かゝる現象は一般にはインシュリンに對する身體的抵抗力の個人差によつて生ずるものであると考へられてゐるのである。然し乍ら次の如き症例を取扱ふに至つて、ショック量の寡多は必しもインシュリンに對する身體的抵抗力の差異と云ふ事のみに片附けられなくなる。

第一例　智能低下は殆んど認められなかつたが、人嫌ひの傾向を主訴とし、他人に接近すると他人が自分の噂をすると考へ、その噂は如何なる内容であらうかと常に懐疑的不安感に襲はれてゐた一破瓜病患者は本療法開始當時、「先生がいくら眠むらせようとしても眠て了ふと如何なるか心配で堪まらないから自分は眠むらないでみせる」と意氣込み、非常に大量のミニグリン注射も無効であつた。そこで一應患者の考へ違ひを諭してみたが自己愛的傾向の強い患者に說得が馬耳東風的で全然効果がなかつた事は當然の歸結で、患者は依然心よく治療をうけようとの意思表示をしなかつたのである。次いで治療中には母が患者の傍を離れないで附添つてゐるとの條件を患者に示した所患者はそれならば安心して治療をうける事が出來ると云ふに至つたのである。かゝる心境を持つに至つてからは患者はミニグリンによつて深き昏睡に陷り、その結果完全寛解の域に達し喜んで退院した。

第二例　一躁病患者も前例と同樣に昏睡に入る事を恐怖し、眠むくて堪まらなくなつてゐるにも不拘眠むつて了ふとそのまゝ死んで了ふのではないかと考へると恐ろしくて仕方がないと云ひ、嗜眠狀態に迄至つて居り乍ら容易に昏睡に入らなかつた。

第三例　非常に自己愛的な一神經質患者は醫師に對し少しも信頼をおかず、治療に疑心を抱いてゐたが、ショック療法に於ても昏睡に陷る事に頑强に抵抗を試みた。

以上三例共に患者は昏睡に入る事を恐れ、昏睡に入る事に精神的に抵抗してゐる事を認める事が出來たのであつて、このインシュリンに對する精神的抵抗は患者の精神狀態殊に無意識的精神過程に由來するものであつたのである。然し乍ら上記の如き傾向を患者が發言しなかつた場合には精神的抵抗が働いてゐるか否かは全く不明ではないかとの反駁が向けられる可能性は甚だ大きいやうに思はれるが、本法を施行し殊に大量のインシュリンを必要とした症例の殆んど凡てに拒絕症殊に積極性拒絕症の傾向が多分に存してゐたのである。尤もインシュリンに對する精神的抵抗なる問題は輕々しく判斷せらるべきものではなく、充分なる注意の下に今後多數の症例に於ける觀察を重ねた上に論議を進むべきものと考へる。

（ロ）　昏睡最中の精神過程

昏睡はイジシュリン・ショック療法の精神過程に及ぼす作用中最も重要なる役割を演ずるものと考へられて居るが、一面に於て昏睡中の患者の心的活動狀況を知る事は最も困難な事である。尙ほ昏睡のこの療法の奏効機轉に對して有する意義を說明する事も今日に於ては殆んど不可能であり、高々假說的說明が許されるに過ぎない現狀である。

先づ患者の昏睡に入る直前の心理狀態を觀察し、この所見を昏睡最中のそれの考察の參考としようと思ふのである。完全寛

解を來たした一患者卽ち（イ）項の第一例の患者の語る所によると昏睡に入る前頃になると患者の主症狀たる人嫌ひの傾向や關係妄想に關聯を有する過去の思ひ出、特に小兒早期の思ひ出までが陸續として腦裡を往來し始めたとの事である。本患者は數年前に精神分析療法をうけたがその際に自由聯想上に齎らされた聯想內容は至つて表面的のものに過ぎず、精神分析療法を中斷するの止むなきに至つたものである。然らば分析療法施行中には自由聯想が充分に行はれなかつた本患者が昏睡に入る前にかくもいろ〳〵の追想がなされたのは何故であらうか。これに就ては勿論種々の動因を擧げ得るのであるが、私は先づ之が昏睡と如何なる關係を保つものであるかについて考へて行かうと思ふのである。

從來精神分裂症に甚だ屢々持續睡眠療法が施行された。抑も持續睡眠療法の目的たるや一定の精神病の興奮狀態に在る患者にトリオナール、ズルフォナール等の藥物を連續的に投與し、以て患者を持續的に睡眠狀態におき、患者の興奮を頓挫させ、或は興奮時期を睡眠中に經過させ、又は之によつて原病の病症過程に迄好影響を及ぼさせようとする所にある。而して本法の奏効機轉については學者の立場によつて夫々異なつた見解が採られてゐるが之を次の如く三大別する事が出來るのである。卽ち第一の部類に屬する見解とは身體的過程に根據を求めて說明せんとするものであり、第二のものは本療法を契機として行はれる精神療法的影響を重要視し、第三のものは兩者の中間的態度を持してゐるものである。本療法を推奬する學者は本療法によつて精神分裂症に五六十%の寛解を望み得ると云つてゐるが、東北帝大精神科の成績では本療法が躁病の頓挫療法としては一定の意義があるが精神分裂症の治療法としてはさ程大して顯著な治効を現はしてはゐないのである。持續睡眠療法が精神分裂症に對して著効を示さない事に關し考へ得べき理由は次の如くであらう。卽ち一般に睡眠中のリビドー配置は原始的で完全なる自己愛の狀態、換言すればリビドーと自我の興味とが未だ區別されず分化せられず兩者が合致して自己愛的自我に住せる狀態であると考へられるのであり、一方精神分裂症患者のリビドーは自己愛階梯に退行して居つて睡眠中のリビドー配置と類似の關係を示してゐるのであるから精神分裂症患者に睡眠を持續せしめたからと云つてそれに大なる期待をかける譯には行かないのである。インシュリン・ショック療法に見る患者の昏睡が睡眠と如何なる關係を持つかは容易に斷ずる事困難であるが少くとも外面に現はれた現象から云ふならば昏睡と睡眠とは一定度迄よく似たものであり、患者のリビドーが自我に向つて撤收されて居ると云ふ點に於ては共にその軌を一にしてゐるやうに思はれる。かく持續睡眠及びインシュリン・ショック療法は共に同じく患者を睡眠或は之に近い狀態におくものであるに不拘兩者の寛解率には非常な相違が認められるのは何故であらうか。この場合に於て吾人は睡眠それ自體を問題にとり上げても解釋はつけられないのであり、寧ろ睡眠に陷る過程を問題にせねば

ならぬのではあるまいか、卽ち持續睡眠療法に於ては睡眠が甚だ緩除に行はれるに反し、インシュリン・ショック療法に於ては昏睡への入り方並に覺醒のし方が甚だ急激に行はれる事に注目すべきではなからうか。而もインシュリン・ショック療法の昏睡狀態には更に他の特殊性が發見されるのである。昏睡中に患者は種々特異な身體症狀を呈するのである。その中特に頻繁に認められるものは所謂原始性ロ運動である。こゝに云ふ原始性ロ運動とは口を開く運動、口附近を歪めたりする運動、作嘴痙攣樣運動、吸引運動、咀嚼運動、齒ぎりをかむ運動を指すのである。その他種々の原始的反射運動も起る。一般神經病學者或は精神病學者は之らの神經學的に云ふ原始的運動又は反射運動は何れも乳兒に見られる症狀であるから、昏睡中にかゝる症狀が現はれると云ふ事は昏睡中に患者の中樞神經系の機能が高度に崩壞したものと解釋してゐるのである。然し之らの原始的運動は必しも中樞神經系の機能の崩壞を意味するものではないと信ずるのである。何となれば分析療法に於て患者の精神活動に早期幼兒期的傾向が蘇活し來る際には常に之らの原始的運動が發現してくるからである。從而かゝる原始的運動を呈するからと云つて之を以て直ちに中樞神經系機能の崩壞の現はれと見るべきではなく、昏睡中の患者に急激に幼少期への一層深い退行が惹起されるものと考へるのが至當であらう。この作用の急激なる事及びリビドー退行の起る發達階段の深さの異る點に持續睡眠療法及びインシュリン・ショック療法の神精分裂症に對する夫々の關係の相違が認め得るのではあるまいかと考へられる。インシュリン・ショック療法に於ける退行現象の起こり方の急激なる事及びその深度の深い事は前述の一患者に於て昏睡に入る前に小兒早期の追想が次々と腦裡に泛んできた事の原因が一定度迄よく理解し得るであらう。

レーヴィーが、內科的疾患に惱める患者にモルヒネを連用してゐる中に患者が妄想樣念慮を抱くに至つた事を經驗し、之に關し次の如き推定を行つたのである。卽ち、モルヒネによつて自我裝置の痲痺を生ずる、この結果として、疾病に伴ひエス裝置內に發生したる不快感の自我裝置への道が之迄とは異なつた道におき換へられるのであらうと。今もしこの報告に類推を求めて說明を試みるならば、昏睡に陷る際の暴風雨的な退行と覺醒後の現實生活への復歸の反覆によつて、謂はゞ、患者の個性(Persönlichkeit)の分裂と合成が引き起こされる結果となり、かくして之迄「難攻不落」の自己愛的城廓も外界からの刺戟に影響され易くなる理由が考へられるのではあるまいか。

昏睡中の心的過程の變化を考察するに好都合なる手掛りを提供してくれるものに次の如き問題がある。本療法は幻覺及び妄想ある症例に對して卓効があると云はれてゐる。實際に本療法によつて幻覺、妄想が餘りに早く又餘りに簡單に消失する事は一驚に値する位である。幻覺及び妄想の消失に對して患者のとる態度を見ると「自分は幻覺又は妄想を持つてゐた」と簡單に

自覺する場合、「もうそんな事は考へない事にした」と云ふ場合及び「先生は私に幻覺があつたと云はれるが幻覺又は妄想があつたなんて嘘です」と否定する場合等がある。然らばショック療法の幻覺、妄想に及ぼす影響は如何と云ふに、精神分析學的見地からすると次の如く云ふ事が出來るであらう。卽ち精神分裂症に於てはリビドーは均して自己愛階梯に退行せりとは云へ、この自己愛的リビドーは破瓜病型にありてはこの階梯に固着靜止して外界に向はんとする傾向微弱なるに反し、幻覺妄想等はこの退行性自己愛的リビドーが再び進行し現實の外界を備給せんとして果たさゞる結果の生產物なりと考へらるゝが故にショック療法はこの治癒への努力に拍車の役割をなすものと見做し得るのであつて、この際にも前述の如く病的自我の改革が行はれるものと考へられるのである。

（八） 昏睡から覺醒した時の精神狀態

昏睡から覺醒した患者の態度に關しビーショースキーは次の如く云つてゐる。卽ち「患者は昏睡から醒めた當座醫師や看護者に依囑的（anlehnend）の態度をとるが時間の經過——糖給與——と共に再び拒否的（ablehnend）の態度に變はつたり、再び緘默症を呈するに至る」と。かくの如き狀態の變化は本療法に携はる誰もが經驗する所である。前述の一患者は半覺醒の時期に恰も酒に銘酊せる如き態度にて看護手に喧嘩を賣りつけるが如き態度をとつた、又ショックによつて幻聽が突然に消失した一患者はショック療法中止後間もなく再び幻聽を持つに至り、而も「先生は私に幻聽があると云ひふらして困る」と醫師に抗議してきたのである。かゝる事實は前述した如く退行的自己愛的リビドーが再び外界を備給せんとしてゐる事を明らかにしてゐると共に、ビーショースキーの云ふ如く「ショックによつて患者の陽性感情轉移の傾向（Positive Übertragungstendenz）が强められてゐる」事を物語つてゐるのである。かゝる傾向の增强と云ふ事に就てビーショースキーは「昏睡中に患者の中樞神經系機能の崩壞（中樞神經系機能の崩壞については前述せり）によつて病的自我が弱められ、かくて外界から病的自我に影響を及ぼし得るに至り、拒絕症換言すれば現實に對する抵抗が除去せらるゝ結果である」と見做し、更に「ショックをくり返す事によつてこの傾向は益々增加するものである」と考へてゐる。前項に於て述べたる如く精神分裂症患者の自我とエスとは謂はゞ融合（Verschmelzung）せる狀態を呈してゐるのである。かく自我とエスとの融合を認め得る時には分析の治療的効果は望めないし、又効果を擧げ得るにしても非常な困難を伴ふのである。分析療法が奏効する爲には患者の自我がどこ迄もエスの代理者たるに止まつてゐてはならないのであつて、他方エス衝動に批判的である事を必要とする。換言すれば、自我が一方には triebbesetzt（對衝動備給）であると共に他方 abwehrbesetzt（對防衞備給）である事を必要とするのである。昏睡——退行を

くり返す間に自我の改革が行はれ、かくて自我の病的傾向は失はれて行くのであるが、自我の病的傾向の減少と反比例して患者の自我にはエス慾求を小兒期よりの精神發達途上に得たる經驗に徴してその捌け口を外界に求めんとする傾向が增强されてくるのである。この結果患者の自我はエス慾求を分析者への對象備給、卽ち感情轉移の形に於て充足せしめる事になる譯である。この感情轉移能力の增加こそインシュリン・ショック療法の重要問題である。更にこの感情轉移能力の增加と云ふ事から本療法による疾患の豫後の問題も說明し得られるのである。昭和十二年度に本療法を施行せられたる患者のその後の經過を調査したが、その結果の詳細をこゝに述べる事は省略するとして、只次の如き推察だけを下しておきたいと思ふ。卽ち「インシュリン・ショック療法の有效性の持續はショック療法を契機として社會的水準に復歸し、之によつて再現せる對象結合の强弱及び之を回復せるリビドー量の多少に係はるものであらう」と。

以上私は私の治驗例を基礎としてインシュリン・ショック療法に關する種々の問題を取扱ひ、本療法による精神活動の變化を精神分析學的に考察し、治療中に患者の自我とエスとの關係には如何なる變動が齎らされるかに就て述べたのである。然し以上を以て私の使命が完全に終了したとは決して云へないのであつて、將來に涉つてなすべき仕事が山積してゐるのであるから、その完成は勿論後日に俟つ所甚だ多いのである。

## (二) カルヂアゾール痙攣療法

本療法の施行法については本稿の冒頭に簡單に述べておいたが、今それを少しく詳細に說明してみる事とする。カルヂアゾールを靜脉内に注射してから 10—15—20 秒前後にして癲癇の大發作と全く相似の痙攣發作が起こる。この痙攣發作の起こる直前に前兆(アウラ)が發現する事も、癲癇の場合と同樣である。患者の云ふ所によると、このアウラは眼花閃發である事が多いやうであつて、眼前に火花がとんだと思ふ間もなく患者は非常な不安感を感ずると云ふ事であり、又客觀的に患者の態度から患者が不安感に襲はれてゐる事が推察できるのであつて、カルヂアゾールによる痙攣發作に於てはこの不安性前兆がその一の特徵であると見做し得るのではないかと考へられる。(尤も、以前に何回も注射をうけた事のある患者が注射前既に不安念慮に襲はれてゐる場合がある。之は恰も癲癇發作時の前驅症狀の如くに見えるが、實は以前の注射後に經驗した不快感に對する豫期恐怖的狀態である。この豫期恐怖的狀態も後述するが如く、不安性前兆と大體同義の役割を演ずるのかもしれない。)

不安性前兆に引續いて全身に强直性の、次いで間代性の大痙攣が起こつてくるのであつて、この大痙攣は通例一分前後で終了する。痙攣終了後、患者は甚だ深い睡眠に入り、ある者は雷の如き鼾聲を發したりする。この深い睡眠を經て全く清澄なる意識をとり戻す迄には、大凡六七分乃至十分位かゝる。本療法はかくの如く痙攣發作を起こさせる事を主眼としてゐるが、本療法を施行するに當り「必しも大發作を必要としないやうに思へる」との意見を抱く學者もあるが、私の經驗からすると不安性前兆のみが起こつて痙攣が引續いて起こらなかつた時とか、痙攣が定型的に起こらなかつた時とかには本療法の効果は減少するか或はそればかりではなく却つて患者を興奮させるのではないかとの印象をうけてゐるのであるから、私は本療法に於ては不安性前兆と痙攣發作とが常に必要であり、而も兩者の間に存する相互關係が重大でこの相互關係が好都合に成立し或は解決された場合に本療法が患者の精神活動に有利に作用するのではないかと考へるのが最も妥當であると思ふのである。而も私は不安性前兆と痙攣發作との間に存する相互關係をリビドー學說によつて次の如く說明し得られるのではなからうかと考へてゐる。

カルヂアゾールによる痙攣の本態と癲癇發作との關係は全く不明ではあるが、今假りにカルヂアゾールによる痙攣を癲癇の場合に類推を求めて說明する事は、今日の知見に於ては先づ許され得る所であらう。カルヂアゾールによる痙攣を精神分析學的に說明する前に、一應癇癲發作の精神分析學的說明に目を轉ずる事は決して無駄ではないと思ふ。癲癇發作に關する精神分析學的說明は未だ完成されてゐないが、以下簡單に述べる事とする。

フロイドは癲癇發作は本能の遊離（Triebentmischung）の現はれであり、換言すればエロスとの融合狀態より再び解離せる死の本能が自分勝手に振舞つてゐる狀態であるとなし、シルダーは癇癲發作を再誕生、癲癇性朦朧狀態を母胎空想又は生誕空想と同義に見做し、ステーケルは癲癇發作の原因として死の不安、慘酷性、骨肉慾、同性愛その他を擧げてゐる。ステーケルが云ふ如きかく澤山の因子を擧げ得る事は、他方之等が眞因でないのではないかとさへ思はれる。ホワイトは「無意識（Bewusstlosigkeit）への逃避」を以て說明せんとしてゐる。ライヒは癲癇樣發作を目して第一に性的並に動的サディスムス的傾向の充足であり、第二に發作によつて死の不安を體驗し得るとなし、第三に癲癇は性器外筋肉的色情亢進(exragenito musculäre Orgasmus)であるとなし、更に癲癇患者の多くが有するサディスムス的性格は二次的のものであらうと述べてゐる。扨てこゝで私の問題に立戻らうと思ふ。

カルヂアゾール痙攣療法の一特徵と見做し得るかの不安性前兆の發生機制も不明ではあるが、この不安性前兆に於ける不

安をリビドー鬱積の結果の現はれであらうとの推測も亦無理ではあるまい。一般に鬱積せるリビドーは何とかしてその捌け口を求めんと努めるのであつて、リビドー興奮が性器的色情亢進（genitale Orgasmus）を以て放散されるのが正常的と考へられてゐるが、不安性前兆に於ては鬱積せるリビドーが痙攣にその捌け口を見出す、換言すれば性器外筋肉的に放散される事によつて目的が達せられるものであるとの假定を設ける事が出來るのである。然りとすれば、本療法が精神分裂症に對し如何なる作用を及ぼすのであるかの理解も手近くなつてくる。精神分裂症患者のリビドー活動の狀況を再考してみると、內向性或は引込み思案の性格等を以て特徵づけられてゐる精神分裂症——殊に破瓜病型——のリビドー生活は對象リビドーの動きが寡くて表面的には甚だ平靜に見えるのである。抑も精神病並に神經症の何れもがさうであるが、精神分裂症の發病原因として常に抑壓作用が働いてゐるのを見るのであつて、小兒慾求がいつ迄も充足されてゐないのである。この抑壓作用の結果はリビドー活動の表面的平靜さを作り出して居る譯であり、又患者のリビドーの自己愛階梯への退行を引起してゐるのである。患者は一方どこ迄も抑壓を完うせんとし、他方抑壓されたものは抑壓せんとする力に抗して意識界に躍り上らんとする、この二つの力の絕えざる鬪爭の結果として患者のリビドー生活は內面的には甚だ不穩な狀態に置かれるものと考へられる。而してかゝる狀態にある患者は外界との關聯が遮斷されてゐる一方、患者は常に對象不足に惱んでゐるのであるから、今痙攣が惹起された時にこの痙攣を契機としてリビドー鬱積が痙攣卽ち性器外筋肉的にその捌け口を見出し得れば、リビトー鬱積の解消と同時に患者の人格の革新、個體の轉調が招來せられ、患者の自我をして外界卽ち現實との結合を容易ならしめる事になり、而もこの結合が強固になればなる程、本療法の目的は達成せらるゝに至るものと考へる次第である。

本療法の場合にもインシュリン・ショック療法の場合と同樣に痙攣後に存する患者の無力さ、賴り無さ等の狀態が醫師への感情轉移及び救助慾求の傾向を起こさせる拍車となる事も奏効機轉の一要素たる事は否定し得ないのではあるまいかと思ふのである。

最後に、本療法に於ける痙攣後の深い睡眠が如何なる意義を有するか、インシュリン・ショック療法の昏睡と同樣に自我とエスとの關係に變革を齎らすか否か、の問題が殘こされてあるが、之に關しては未だ充分なる參考資料を持ち合はさないので省略する事とする。（以上）

# 精神病者の心理の分析的觀察

大槻憲二

## 一、再建及び交流の心理過程

リビドーの發展には種々の段階があり、その發展したリビドーが退行するときにはそれ等諸々の段階を逆行して來るものであると云ふこと、また症候には防禦機制としての意味が含まれてゐるものであるから、患者は症候を放棄することを容易に肯ぜず、分析に抵抗的態度を示すものであると云ふこと。これ等二つの命題は既にフロイドがこれを道破したところであつた。精神病者はリビドーの退行したものであり、防禦機制としての症候の頑強なものであるから、これを精神分析學的見地から研究して見ることが甚だ意義あるものであることは申すまでもない。ところが、精神病者はリビドーを對象から引上げてしまつてゐるやうに見えるかも知れないが、必ずしもさうではなく、一見引上げられたやうに見えるリビドーは、さきの對象を空想裡に再建することに用ゐられてゐるのである。この「再建」(reconstruction)の問題を論じた分析學者の名を擧げておくならば、タウスク(Tausk)、アブラハム(Abraham)、ヌーンベルク(Nunberg)その他がある。右の內アブラハムは、一旦心の中に取込まれた對象が外界に投出せられるのは性心理發展の或る段階に於いてゞあると論じてゐる。一體、再建と云ふ過程はリビドー纏綿の發展的段階に於いてなされるかどうかは疑問であると、フロイドは云つてゐる。恐らくは退行的段階に於いてなされるのであらうとの意であらうが、一九二六年にオットー・フェニヘル(Otto Fenichel)は、リビドー發展の早期段階が再現するのは退行のためではなく、退行を回避するための發展的過程としてゞはなからうかと暗示してゐる。即ち、自我から對象纏綿への過程としてゞあるが、その對象纏綿はその目的を果さず途中で停つてしまつたものである。例へば、ナルチスムスから對象戀愛への道程に於いて、その發展は丁度同性愛のところで引懸つてしまふ如きである。

我々はリビドー發展の諸段階の間に相互の抗爭を發見するのみならず、再建の機制に於いてもその發展した時のものと早期

のものとの間には抗爭があると云ふことを知る。例へば、ヘルマン (Hermann) の如きは、投出として聽覺的並びに視覺的錯覺の現れるのは再建が首尾よく行はれた場合のことであつて、これはつまり知覺の方の再建力が弱いためにその方の再建材料が錯覺の力に克服せられてゐることを意味するのであると云つてゐる。知覺の方の再建材料となるのは、嗅覺作用によるものと體溫覺作用によるものとである。これ等が投出機制發生の心理學的原型である。こゝで我々が論ぜんとするのは體溫覺作用の問題である。これは自我と對象との間にリビドー纒綿が交換せられる仕方の原型である。自我に接觸する或る對象がそれ自身の有する定量の熱を失ひ冷却すると、自我の方がその溫度を帶びて來る。このやうにして自我と對象との間の種々の性質が交換せられ、相互の間の「交流」(Ueberfliessen) が生ずる。或る特殊な形式の思考作用には體溫覺の作用が關聯してゐるものであるが、その體溫覺作用は交流の物質を帶びてゐるのである。

交流は同一化作用發生に於いて重要な役割を果す。集團的同一化はそれ以前に經驗せられてゐる「集合型」(Kollektivschema) に基いてゐるものであつて、この型には、本來、家族の各員が含まれてあり、またこの「集合型」はやがて家族生活に於いて一つの現實となるのである。俗に云へば「家風」の如きものであらう。さう云ふ家族生活に於いては個々の對象に對する孤立的纒綿はなくて、一單位としての家族全體の共通纒綿(「交流」作用による)があるのみである。この段階に於いては我々はこれを同一化と云ふことは出來ない。寧ろそれ以前の段階、卽ち交流と呼ぶべきである。交流に反對の傾向は孤立又は局限であらう。精神分裂症に於ける自我の分裂と奇異な態度や樣子を見ると、彼等が集團概念の中へ交流するために如何に莫大な努力を拂はねばならないものであるかゞ分る。それ故に吾人は、精神分裂症がその早期の自我段階に退行してゐる間に、右のやうな形式の作用や思考をなすものであらうと云ふことは期待出來る。

## 二、或る精神病者の交流と集合型

右に述べて來たところを實例に就いて具體的に說明して見るならば、或る患者は次のやうに嘆いた。——「私の頭と顏は燃えてゐます。それで、私は變な氣持がします。私の頭の中から何かブツ〳〵云ふものがあります。私は他の人々の思想を表現してゐます。私の頭は開けつぱなしになつてゐます。暗示と關係がありまして、私の考へてゐることは、誰か他の人が理解してゐます。誰か他の人の考へてゐることを私は理解します。我々が互に隣接して座してゐる時は、それほど惡くはないと云ふ事は分ります。それ等は私の中へ差込まれた思想です。」彼は自分の頭に穴があいて思想が漏れ出し、それを纒めておくこと

が出來ないと感ずるのである。後になつて彼の云ふところに依ると、彼の病氣の始まつたのは、彼の友達が他の市に行き、彼が一人ぽつちになり、友達から仲間はづれになつた時に始まつたのであると。彼がその友達を訪れた時に、友達は彼に對して冷淡となり、友達同志はくつついてゐた。

この患者に於ける他力的現象は交流の明かな證據である。彼の頭と顔に不斷に熱つぽいやうな感じのあるのは、そこにナルチスス的な纏綿があるためであつて、このナルチスス的纏綿のために彼の頭は自他の思想に出入し得るのである。彼が誰か他人に近く座するのは、さうすればそれだけ取込みが具體的になつたことになるので、かくてこれ等の熱つぽい感じから免れようと試みてゞある。或る別の精神病者は自分の家族の各員が並んでゐるところを繰返し空想するのであるが、この空想は右の患者の行動と關係がある。患者の四肢五體は別々のものとして考へられ、それ〴〵が自分の內に取込まれたる彼の家族の各員を代表すると考へられる。集合型の生成と肉體型との間には何等かの關係があると考へることが出來る。患者の近親たちの居なくなつたこと、近親仲間の離散したことは、自己の肉體型の缺陷がそれを象徵すると考へられる。近親仲間が一つになつてゐると云ふことは、「我々は互の考へをよく理解してゐる」と云ふ形でこれを表現することが出來るのであるが、これは必然的に集合型に退行し、交流の性質を帶びなければならない。この時彼は孤獨の內にあつてよく仲間の思想の反響を聞くことが出來る。ゲーテが次のやうに歌つてゐるのは同じ意味である。

親しきやからは散り〴〵となりて
初めの彥ばえは、あゝ、消えて聞えず。

## 三、或る妄覺者の退行的同一化

また別の或る患者は內部の電氣と外部の電氣とが自分の身體に於いて接合し、その影響を受けて困ると嘆くのである。我が身を破滅させるやうな毒物が瓦斯となり、尿道を通じて發散することがある。重いガス、輕いガス、腺の移植、などの方法を使つて、或る見知らぬ者の手が自分に影響を及ぼしてゐると。この型の妄覺が生ずるところを見ると明かに、肉體的自我限界の持續性は解消し、一種の浸透性の生じてゐることが分るのである。交流作用の觀察のあることは、そこに溫熱の力が働いてゐるとの考へのあることを思はせる。意志が働きかけて來るとの妄覺のあることは、超自我が退行的に解消して（そこに交流が伴つて）集團概念となつて行き始めつゝあることを示すものである。この退行的同一化はあらゆる種類の妄覺（影響を受け

るとの妄覺、催眠術にかゝるとの妄覺など）の中に見出すことが出來ると思ふ。私は解消し始めるかゝると云つたが、それはこの妄覺が完全に發展するまでには種々な段階を經て行くからである。例へば或る患者は妄覺の起き始めには、宛も暗示が彼の上に與へられたやうに感じ、自分自身の思想を發見することが出來ず、彼はそれを尋ね廻らねばならず、後に至つて他の人々が遠隔の都市に於いて彼の思想を知つてゐたと云ふ始末である。シュナイダーに依れば、退行的同一化の窮極的なものは宇宙との同一化であつて、これは只今の我々の表現方法で云ふならば、交流である。この現象は或る急性の精神分裂症者の神祕的な觀念の中や、睡眠中又は覺醒中の自我限界の動搖の中に、觀察することが出來る。インシュリン・ショックは云はゞ、人工的に作り出されたる退行狀態であるが、このショックからの覺醒を或る患者は次のやうに描寫した。――「私は一切のものが一種霧のやうなものになつて私と密接に聯關してゐるやうに感じ、且つ私の覺醒せる自我と私の環境とは時計の機械の中の齒車のやうに互に動き始めたやうに感じた。」と。

## 四、或る誇大妄想者の溫熱的思考

最後に私は或る知力喪症失症者の誇大妄想體系の或る要素を描寫して見ようと思ふ。彼が神的役割を果すべく高御座に就いてゐる。彼は何億年歳の長老者である。それほどの年月の經過を人類は知つてゐない。何となれば彼等の大部分は或は死し、或は凍えてしまつたからである。身の内に幾多の太陽を持ち、從つて死者を蘇らせ、新しき太陽系を創造し、凍えついた太陽系を融かし生かすのは彼のみである。彼を不斷に妨げてゐる宇宙を改造して了つた時には、宇宙の運行に應じて飛行機又は船に乘つて「太陽を與へる」のが彼の任務となるであらう。現在に於いても力は彼の掌中にある。光も太陽も溫熱も掌中にある。一切の分界は彼の力に依つて統合せられ、不可分離であり、破壞することは出來ない。人々は彼を幾萬回となく殺さうと試みたが、併し彼が死の床に橫はつてゐると、一切のものが凍えついて了ふ。それ故に彼は再びそれ等一切を融かしてやらねばならない。彼の出現が光明と生命と溫熱とを意味する。彼が宇宙を飛廻つてゐる時には、人々は彼の事を氣付かない。何となれば彼等は各々の場所に於いて凍えついてゐるからである。彼の仕事は、彼の身邊から發散する高壓の滋力に依つてなされる。彼は全宇宙を再建しなければならない。何となれば、もしさうしないと、「太陽を與へる」ことが出來ないからである。彼は生長し行く地球のために太陽の一部分を分離せしめたが、併しそれのみでは十分でなかつた。移り行くことが必要であつた。それ故に彼は彼自身の複寫、型の中へと飛込んで行く。彼は無數の複寫として存在する。で、何處かで彼が必要になつた

ならば、「主要心理群」がその複寫に飛込んで行く。分靈の如きものである。分解は二重の力の形式では彼自身の内に於いてのみならず、時間及び空間に於いても、不斷に行はれつゝある。彼は己れの神的な役割の歴史を次のやうに述べてゐる。――「我生れて後、物心つきたる時、我は自他に光明と溫熱とを施與するの力あるを發見せり。宇宙愈々大となれば、愈々太陽を與ふこと力強くなれり。我は陽光を發せり。我生れると共に陽光を發し、同時にアトムと光明と溫熱とをも發せり。太初に宇宙は丸木舟の如くにて、唯我獨りその中に鎭座せり。これ最初の構造物なりき。薄膜は丸木舟なりき、而してこれまた最初の宇宙にてありき。」と。

この患者は失はれたる外部世界を再建せんとしてゐるのであることが分る。一切のものは凍えつき、又しても破壞せられるので、彼は「太陽を與へる」ことによつてそれを融解せしめるのである。彼は不斷に旅行を續け、中間の驛に、永續の宿舍に「わが身にぴつたりした」家に到着せんと試みてゐるのである。その家とは、アトムであり、丸木舟であり、また薄膜でもあつたのだ。もし一切のものが融解し、溫熱が至るところに發散し來るならば、その時彼の仕事は終りを告げるのであらう。併し彼の悲劇的な力に依つて、宇宙の統一體系は破壞すべからざるものとなつてゐる。全宇宙は彼と生死を共にする。宇宙を自分の道づれにすまいと思つて彼は努力するが、及ばない。彼が第一人者であるので、その點で既に彼の模寫に過ぎないものとは違つてゐる。一切のものは解體するが、併しまた相互に交流する。凍えついた世間を融解しようとの、再建への英雄的試みは永遠の失敗の定めにある。リビドーは純粹にナルチスティッシュな狀態に於いては、對象を再造することは出來ない。發動せられるリビドー量が增加すると、對象界が變形して自我內に入り込んで來ることも增大する。それは問題のリビドーがナルチスティッシュな性質のものだからである。外界には彼の寫し、似たもの、自我の外觀の投出せられたものが充滿してゐる。彼は彼自身に似たものゝ中へと過渡し行く。自我と外界とは、如何に骨を折つて見ても、どうしても一つにならずにはおかぬ。ナルチスムスが放射せられたるこの段階に於いては、外界からの辨別は自我內に分裂（卽ち解體）の生ずることに依つてなされ得る。それ故に解體は、交流せんとするナルチスムス的リビドーの目的とは正反對の傾向であると考へることが出來る。この段階に於ける統合的交流の性質は注意すべきものがある。自我の發達が未熟でそれがエスからまだ十分に分離してゐない段階に於いては、その早期的自我はまだ對象からも分離してゐない。自我がエスと再結合しようとの傾向、さうしてエスとの統一を保持しようとの傾向は、決して已む時はない。このやうにして自我とエスとのを分離撥無しようとの願望は絕えて熄まず、またさう云ふ風の心理裝置の働きのあることは、そのやうな願望の企てに外ならないのである。こゝに於いてか問題は起る、

と云ふことである。總てこれ等の現象は、退行的なやり方で、歴史的眞實の或る要素を表はしてゐるのだと假定して見ようと思ふが、如何であらうか。

## 五、出産に於ける體溫喪失の心理的意義

恐らく吾人は、早期嬰兒時代の心理生理過程から何事かを知り來ることが出來るであらうと思ふ。胎内生活と早期嬰兒時代とは、出産と云ふ間の狂言を狭んではゐるが、そこには我々の想像以上に大きな聯關の存することを、フロイドとフェレンチーとは假定してゐる。それにも拘らず、精神分析者たちは、オットー・ランクやアーネスト・ジョーンズは別として、出産外傷と云ふことにあまり十分な注意を拂はなかつた。出産により母體から分離した瞬間に於いて、とにかく體溫は著しく低下する。胎兒は母體よりも體溫は高いものであることは、周知の通りである。分娩せられることは、胎兒にとつては大變な災難である。大袈裟な云ひ表はし方をするならば、胎兒は今や凍死の危険にさらされてゐるわけである。出産と共に赤子の體溫は急速に降下し、出産後六時間にして一度半又は二度半の降下を見るのである。それ故に種々環境的外傷もあるであらうが、殊に甚だしいのは溫度の激變であつて、これに對して嬰兒は全く無防禦である。このやうに嬰兒の體溫は環境の溫度に依憑せざるを得ない。體溫調節に於いてまだ外界から分離してゐない。環境の溫度の中に沒入する傾向を有してゐる。動物が保護色や保護形態をもつて環境と同一化することとは、人間が心理的に同一化することとの系統發生的遠祖であるとラドー（Rado）は云つてゐるが、我々としてはそのやうな環境への同一化の實體發生的起源は早期幼兒時代の溫熱交流に見出されると云ふことを附言しておかねばならぬ。生れたての赤ん坊のやうな有機體としての各機能のまだ分化してゐない者に於いて、その主要な衝動の一つは、失はれたる體溫を復活しようと云ふことでなければならない。胎内生活への復歸願望は主として以前の溫度へ、自分の溫度と同じ溫度のところへの復歸願望である。榮養を調整することも平均溫度に達するに助けとなる。憂鬱症に於いて榮養と溫度との關係あることは嘗てラドーの强調したところであつた。嬰兒は神經支配力で血管と溫度を調節することは十分に出來ないが、併し溫度に對する知覺力は非常に高度に發達してゐる。カネストリニ（Canestrini）及びエラスムス・ダーウィン（Erasmus Darwin）の調査、殊にパイパー（Peiper）の實驗によると、嬰兒は溫度の變化に對して不快を感ずるらしい反應を生々として示すのである。それ故に、我々は體溫と外界と交流と自己愛（ナルチスムス）擴充とは同じやうなものであると見

ることが出來る。これ等諸概念の同一性を考へることが出來るかも知れないが、なほ併しその前に一考せねばならないことがある。自己愛（ナルチスムス）とは自我が自我リビドーを以て充滿してゐる狀態を意味する。フロイドの說く通り、初めにはリビドーは自己保存器關の上に基いてゐる。これを出發點として考へて行くと、「表皮的・體溫的リビドー」の假定を純粹に理論的な根據の上に置くことが可能であつたらう。ところがフロイドは、御存知の通り、表皮は著しい發情帶域であると云つてゐる。また彼が自我リビドーと對象リビドーとの區別、並びにそれ等兩者が交互に變轉する激しさを記述して、一方が「他方に吸收せられること甚しければ、愈々一方は貧困となつて來る」と述べてゐるのは、少し大膽かも知れぬが、殊に體溫の事を云つてゐるのだと認めることは出來ないだらうか。この最初のリビドー狀態の內容と目的とは溫度であり、その對象は別にどれでなくてはならないと云ふわけはないのだ。この形態のリビドーは自己保存器關としての皮膚に基礎を置くものであり、從つて抱きかゝえられて溫めて貰ひたいと云ふ受働的な、ナルチスムス的、リビドー目的を有するものであると云ふことを强調せねばならない。

## 六、皮膚への偏好の問題

今や我々は、自我限界の轉位し得べきことを、それが擴がりに於いて變化し得べきことを、明かに理解することが出來る。唾眠中に於けると覺醒中に於けると自我限界の轉位することは、唾眠中には心理の退行のために「表皮的・體溫的リビドー」の經濟に變動が生じたことによつて說明がつくであらう。これ以外に別に考慮に入れるべき要項はないであらう。かゝる命題からして如何なる心理が發見され得るかは、それをなし得るものゝ才覺に依るが、我等としてはたゞ、出產後に於ける體溫の低下に去勢コムプレクスの原型を見ることが出來るやうに思はれると云ふことを一言しておきたい。何となれば、嬰兒が自分の身體から溫度を喪失すると感じる事が、母體から分離したと同時だからである。即ち去勢コムプレクスがたゞ出產外傷の起源からのみ說明し難く見える時にも、體溫としてのリビドーの喪失と云ふ契機がそこに入ると、思考の懸橋が緊密になるであらう。

これに對して反對を唱へる向きがあるかも知れない。以上は皮膚の役割をあまりに重大視して把握衝動や口唇リビドーを等閑視してゐると。一應尤な意見ではあるが、我等はこれに對して、やはり皮膚が如何に重要な役割を果すものであるかを一層明確にすることによつて答辯しようと思ふ。シルダー（P. Schilder）とウェクスラー（Wechsler）とはその共著論文『幼兒はそ

の肉體內部に就いて何事を知れりや』（『イマゴー』一九三四年）の中でかう論じてゐる。皮膚は我等の自己（セルフ）の外殼に過ぎないのであるが、幼兒にとつては恐らく唯一の私有財產であらう。何となれば、幼童等はその皮膚の內部に何か重要なものが藏せられてあると云ふことは想像出來ず、たゞ外部から口唇を通じて內部に挿入せられたもののみがその時內部に存することを知るのみであらう、と。吾人は右の說に對してなほかう附言することが出來るであらう、胎內生活時代に於いてはリビドーは內部機關に纒綿してゐて、たゞ出產後にそれが外部に、卽ち皮膚に擴充せられるものであらう、と。このやうに皮膚の意義は漸次增大して行く傾向にあるのである。殊に顏面の皮膚は內部機關の表皮的投出として、自己全體を代表するものであるから、ナルチスティシュな人間が顏面に拘泥することは自然である。また或る種の精神病者は自分の肉體が空洞であつて、食物を攝り入れても直ぐに體外に漏れてしまふと云ふ妄想を抱くものであるが、かゝる妄想が如何にして起るかと云ふに、それはリビドーが內部から外部に轉位せられ、皮膚のみがリビドー纒綿對象となつた時代に心理が退行してゐるからである。このやうな纒綿狀態をヘルマン（Hermann）は「皮膚への偏好」（Randbevorzugung）と呼んでゐるが、これを吾人は「皮膚的・體溫的リビドー纒綿」と改名してもよいわけである。この「皮膚への偏好」からじて手、脚、口、その他性器前期的の諸々の帶域がそれぞ\〵の性的意義を捕へ來つて、漸次に重大なものとなつて行くのである。フロイドは自我リビドーから對象リビドーへの發達過程を記述して「對象リビドーが示し得る最高の發展形式は惚れ込み狀態に於いて見られる、その時本人は對象纒綿のために全肉全靈を捧げるやうである」と說いてゐるが、果してさうであつて見れば、體溫的リビドーがやがて對象愛となつて窮極の目的に達することが知られるのである。

## 七、神話に現れたる溫熱と分離の問題

最後に、我等は始めに述べて來た精神病患者の心理に戾つて考察せねばならない。その患者が失はれたる愛の對象への繫りを種々な形式の射光や放熱（Radiation）に依つて確保しようとしてゐる事を再び問題にせねばならぬ。神話傳說にはこれに類した機制の窺はれるものがある。十四世紀の印刷家フロベニウスはエヂプトの神話に現れたる最初の父母の話を引用してゐる。卽ち天と地とが結合しつゝあつた時にシウ（Shu）は天を擧げて兩者を引離した。ニウジイランドのマオリに於ける類似傳說に於いては、天なる男神ランギは地なる女神パパの上に橫はつてゐると、その子供等は永久の闇の內に閉されてゐる。子供達はそこで反逆を企て、力神タネの助言に依つて兩親を引離さうとするが、駄目であつた。タネは遂に自ら出馬して兩親の

抗言には耳を借さず頭と脚とに力をこめて兩者を引離した。そこで光明がさし來り、天地は分れて生命は誕生したと云ふのであるが、これは夜と曉との天界現象をエディポス的に解釋した所謂說明神話であらうが、わが國の手力雄命の神事も右の神話の一變形と見なし得べき一面を具へてゐることは何人にも氣付くところである。ギリシアの同形傳說に於いては、ウナノスとクロノスとを引離す話は遂に男神の去勢によつて完成してゐるのであるから、そのエディポス的性格は愈々露骨なものとなつてゐる。このやうに神話傳說はエディポス性格を表面に露出させてゐるが、その內面には光明が二體分離の瞬間に生じたと云ふエディポス前期の、卽ち出產時の印象を包含してゐることは否定出來ないであらう。從つてまた、光明を撥無した幽暗の世界に於ける體溫の發散と交流とは分離したものゝ結合を意味すると考へられることは、無意識的に極めて自然でなければならない。

以上は、ブタペストの分析者ロベルト・バーク（Robert Bak）の所說『精神分裂症に於ける自我及びリビドーの退行』（英文國際分析雜誌本年度第一册所載）を紹介しつゝ、多少の私見を附加したものである。（完）

# 精神病者の繪畫彫刻（エルンスト・クリース）

竹崎節夫譯

**はしがき**――左の論文は『イマゴー誌』一九三六年度第三冊に掲げてある Ernst Kris: Bemerkungen zur Bildnerei der Geisteskranken を殆ど完譯したものである。枝葉の問題でやゝくどいところは削除したが、なるべく忠實を期した。併しまだ年少の身で努力の割合に効果が上らなかつたが、幸にして、大槻先生の懇切なる御加筆を得たことをこゝに深く感謝する。

## 一、緒論・精神病者の藝術と正常者の藝術

精神病者の藝術は、非常に廣汎な主題であつて、精神病學から美學にまで及ぶ。それは美學に屬してゐると言ふ人々もあるのである。そのやうに範圍は廣いが、此處には二三の斷片を摘出するに止める。これらの斷片は、問題がこれほど多種多様であるにしては、あまり隨意勝手に一部分を選擇した様に思はれるかも知れないが、併しそれは精神分析的考究の助けに依つて一層闡明され得てゐるものだといふ點に特徴があるのである。が、これから述べる問題の中では、あらゆる角度から十分に觀察すると云ふことやはり斷念されねばならぬ。たゞ精神分析から見て如何なる點が解釋せられ、また如何なる見解が成立するかと云ふことが問題なのである。何となれば、この見解が如何に重要であり、又如何に闡明的であると認めるかは、その人がこの主題をどの程度に重要視してゐるかどうかの根本的な態度に懸つてゐるからである。が、次なる拙論の結果如何は！――それが果して成功してゐるか又は失敗してゐるかは――かゝる見解の重要性を決定する所以とはならない。なぜならば、此處に於いて試みる精神分析的觀點の應用は、精神病者の繪畫の問題に精神分析が寄與し得るものを組織的に示さうとの意圖の下になされたものではないからである。それどころか、反つて私はこの問題を任意的に取上げてゐることを告白しなければならぬ

とは云へ、そのやうに一方的であるにせよ、最近數年間――フロイドの『禁判と徴候と不安』以來――非常な價値ある補足を精神分析上の從前の見解に齎した自我心理學的傾向に特に觸れてゐることが、私の念頭を離れない。此の試みをすべての問題に實施しても、同一結果を擧げ得ないことは分つてゐる。此の試みに依り、精神病者の繪畫に對して精神分析的觀察法が如何に有效であるかを、また精神分析に對しては精神病者の繪畫が如何に新たな研究部面であるかゞ證明せられることであらう。

さう云ふ次第であるから、精神病者の繪畫に關して、これまで最も重要なる問題とされて來た事を考慮に入れてをらぬことは別に驚くに當らぬ。私はそれ等諸問題の二三について述べるのみである。何等かの意味に於て臨床的問題と關係ある事柄は省略せねばならぬ。と云ふのは、私にはその點に觸れる權能が缺けてゐるからだ。以下私の說が臨床的精神病學の硏究の成果並びに觀察に關係してゐるところでは、些細な個々の問題には觸れずに、廣汎な文獻からの能ふ限りの公平なる印象を根據として述べてゐるものである。それ故、一般に精神病者の繪畫として現象の全體如何を描寫することは、この論文ではやつてゐないのである。この問題を最近取扱つてゐる多くの人々とは反對に、私の思ふところでは、現象を如何に描寫して見ても既知の臨床的繪畫の範圍を出づるものではない。卽ち、兩者は密接に結合してゐて、たゞそれ以上に出でんとする有效な硏究の前提として役立つに過ぎないのである。私のやうにたゞそれを利用しようと云ふだけのものは、そんなに現象全體を描寫し大觀すると云ふやうな權利はないわけである。

狹義にせよ、廣義にせよ、臨床上の問題以外に、藝術一般の根本問題もこゝでは取上げないことにする。その根本問題は二つあるが、その一つは人間の繪畫的衝動の一般的原理の硏究に關するものであり、もう一つは精神病者の繪畫と子供卽ち幼稚なる者の繪畫との比較を問題とする、所謂發達心理學に關するものであるが、今はそれ等に觸れない。次の硏究が依據する材料は一部分は藝術學的文獻から、大部分は臨床精神病學的文獻より取つたものである。此等の文獻は徒らに廣範圍に亙つてゐて、私の知つてゐる限りでは、まだ組織的に纏められたことはない。フランスに於て十九世紀の中頃に始まつて、精神病者の繪畫に就いての此の問題はロンブロゾーの出現に依り一般の視聽を集めたのである。その問題の見方には、精神病學的或ひは心理學的の根本的見解の變化しつゝある形勢が明瞭に反映してゐる。それ故に人々はこの中から、一種小型の精神發達史を摘出することが出來るのである。

比較的近年の文獻から、私は二つの有望な傾向を擧げる。それ等の傾向は成程その時きりになつてゐたが、併し其後の完成が可能の樣に思へる。その一つは本質的には診斷上の問題に關して試みられたモール（Mohr）の硏究であり、又もう一つは

個々の繪畫的作品の實質的解明を得んと努力する、ベルトシンゲル、プィスター・ロールシャハ(Bertschinger, Pfister, Rorschach)たちに依る研究である。この後者の研究は精神分析を根據としてゐるが、これ等の研究の結果はこゝでは再び取上げないことにする。

最近、一九二二年に於て、プリンツホルンが出した『精神病者の造形藝術』といふ書物に依つて、この方面の研究は決定的な刺戟力を受けたのである。彼は創始者として、莫大なる、又それ以來不可缺な材料を蒐集しておいてくれてゐる。併しプリンツホルンの見解と私達の見解とには相違がある。彼はルードウィヒ・クラーゲス(Ludwig Klages)の表現説に準據してゐる。その表現説といふのは、彼自分の言葉に依れば、「心理學的説明を與へるものではなくて本質を直觀させるものだ」とのことである。この態度はプリンツホルンの著作全體を貫いてゐて、實に複製せられてゐる材料の選擇にまで及んでゐる。そして又それは時には心理學的問題よりも寧ろ美學上の或る説――藝術は表現であるとの説――を是認せんと努力することに非常に役立つてゐる。それ故に我々は既に、問題の考へ方に於てプリンツホルンとは違つてゐる。その考へ方の根據を確立するためには、精神病者の繪畫的創造に關する既知の事實を想起することがまづ缺くべからざることである。

## 二、精神病者及び未習練者の造形的活動

精神病患者の造形的創造の現象の核心として、多くの精神病者はその心理的過程の或る段階に於て造形的傾向を示すやうになるといふことが認められるのである。その上特別の條件として、造形的活動は單に偶然的になされるのではなくて、患者の生活中相當の役割を演じるものだといふことを附加へておかねばならぬ。種々の品物を材料乃至は道具として利用することとの造形的衝動は明に表はれる。あらゆる紙片、壁、床でさへ畫板となり、あらゆる種類の棒片が畫筆として用ひられる。パン屑で何かを揑造し、どんな木片からでも何かゞ彫刻せられ、ガラス屑さへその際、鑿の代用となる。

精神病者で造形美術家的徴候を示すものは統計上では稀にしか現れてゐない。極めて呑氣な評價に依ると、精神病院患者として數へられる造形美術家の數は二パーセント以下である。彼等は相互に何等の共通特徴を示さぬ。プリンツホルンの示してゐるところに依ると、それ等の特徴はせい〴〵或る病氣の形式に屬してゐることとの中に見出され得るに過ぎぬとの事である。精神病患者の造形美術家の七十五パーセントは精神分裂症患者である。(この場合、患者の多數に於ては、ブロイラー的な廣義の標準ではなくて、クレーペリン的の狹い標準の早發性痴呆症が診斷の根據になつてゐる樣に見える。)八パーセントは躁

病患者だとしてあり、殘りは種々の臨床的樣相に屬するものであると云ふ。
造形的衝動が病氣過程の如何なる個所に現はれるかは不定である。初期の段階に現はれるとの考へを優勢に確證することは出來ぬ。その後、時の經過する中に把握された過程の變化が新しい活動の中に見られることも屢々である。その新活動に於て後年の活動の一つが出てゐることもあり得る。
文獻がそれについて報じてゐる限り、造形美術的衝動の出現と、個性の他の特徴の出現との間には確乎たる關係が存在しない。その衝動は言語及び文字の完全なる合成に際して現はれることがあるが、又言葉の上の表現に廣範圍の障害の起きた際にも現はれることがある。大概、造形は言語や文字と共にそれと同價値の、或は容易に選ばれる表現方法である。造形は言語や文字と結合することが屢々である。
私は此のやゝ任意的な大觀をこゝらでやめて、次にたゞ一つの事實を擧げておく。その事實はこれから述べる思考過程に對して特に重要である。卽ち、精神病以前の知識と以後の能力との間に確かな關係を證明することは出來ない。特に、精神病患者の美術家が罹病以前に旣に或る意味に於て畫家若しくは彫刻家として活動してゐたといふ習練的要因は「造形美術家となること」の前提とは見做されないのである。とは云へ、天賦の才の事は自ら別問題である。天賦の才は何とも評價し難く、心理學的にもまだ何とも片づかない。が併し、精神病者の造形美術現象から天賦の才と云ふ要因を看過することは出來ない。以上を綜合すると、精神病患者にして造形美術を作るものは別にその方の習練があるわけではないといふことは典型的場合として認められるといふことになるのである。
精神病的造形美術家が別に習練をしたわけではないと云ふ事實は、私達にとつては重要である。その事實は精神病者の造形についての總ての問題を新しい光の中におくからである。といふのは、精神病患者の造形的活動の特種性を論ずる前に、彼等の無習練の中から如何なる作品上の特徴特質が了解されるかといふことを調べるべきだからである。個々の場合に就いて見ると、全體の統一が極端に走るといふことが分る。そのことは精神病者並びに健康者の習練なき漫然たる描きなぐりに就いて云へる。特に彼等の好んで作る幾何學的及び裝飾的な描きなぐり畫にも亦適用される。(第一圖參照)
常人的無習練者の描きなぐり畫と精神病的無習練者の描きなぐり畫とに於ける區別は、まづたゞ、その畫が如何なる役割を果すかと云ふ點に存する樣である。精神病者に於てはその役割は患者の生活領域中大なる部分を占め、常人にあつてかゝる畫は附隨的に見られるのみである。

方法的根據からして、我々は次の事を問題にしなければならぬ義務を感ずる、卽ち、習練のない事を前提とする時、如何に廣くこの相似性が、精神病患者と常人との表現方法中の他の部面に適用され得るかといふことである。併しこの問題は先づ私達の經驗外の事に屬する。何等適當な比較材料が存在しないからである。こゝに紹介出來る少しばかりの觀察では充分ではない。本質的にはそれはたゞ、無習練の成人の造形的能力と子供、原始人及び民衆藝術の造形能力との比較を根據とする類推的結論の上に立つてゐるが如き觀がある。類推的結論に依る判斷は、此の場合餘程用心をしなくてはならないのである。

此のことを了解する爲めにもう一度問題の性質をよく考へてみる。造形は一つの表現機能であつて、それは總ての人が同一程度に持つてゐるものではない。我々は才能あるものと才能なきものとに區別する。併し成人は習練あるものでなければ造形美術家にはならないが、精神病者の中からは習練なくして造形的活動をなすものが出る。併し文字の方面でも類似の現象があるもので、精神病になる以前に少しもその方面の習練がないのに、急に詩を書き出したり、神學論を書き出したりするものがある。併し萬人は言語機能を有するが、萬人は造形機能を有するわけでない。此れに依つて精神析分析的說明の最切の一部を述べるべく一層確實な立場が得られたわけである。その說明は、如何にして造形美術的衝動が發作して來たか、今迄習練したことのない表現機能が如何にして發動して來るやうになつたか、と云ふ問題と關係をもつてくる。精神分析から見れば、これは以前に滿足を得なかつた何らかのコムプレクスが、こゝで回復を得ようと試みてゐるのだとの解釋を下すことは容易でなければならない。但し我々はこゝでこの說明に制限を付しておく。この說明はたゞ多くの場合――或はまづ第一に――精神分裂症者の心理的過程に關してゐるものであると云ふことである。

此の病狀に伴ふ精神的經濟狀態の障碍は、自我と外界との關係に關するものである。フロイドの云ふところに依ると、この障碍のために、外界に對する關係が貧困を來し、罹病の最終狀態に於ては全然無關心になつてしまふものである。その直前の段階に於ては、外界に對する關係の弛緩はこの關係を元に戻さうとするわざとらしき試みで覆はれてゐる。このやうな試みの一つとして、本人の生產力が上昇して來るのだと考へられる。卽ち一方では幾何學的な畫を多量に描くやうになり、他方に於ては、その心理過程の第一期に於て創作衝動が急に上昇して來るやうになる。例へば、詩人ヘルデルリーンの如きがそれで、彼の壯大な詩文はさう云ふ事情で創作せられたものだ。正常者の場合に於ても、これと似たやうな現象は見られるものだ。アナ・フロイドは多くの思春期の人々の態度は精神分裂症者に於ける「回復」過程と比較出來ると說いた。私はこれに附加して次の如く云はう。思春期の人も亦增加した製產――藝術的創作――に依つて、彼が昔から受けて來た障碍から脫出しようと屢

々試みるのであると。

## 三、二人の精神病藝術家の創作に於ける様式の變化

精神病者の造形的衝動に於て「回復」的試みを見ることが出來るとの提議に依つて、これからの研究の方向が定まつた。回復的試みには一定の特徴がある。此の特徴を精神的患者の造形に求めんとするのが私の次の目的となる。

扨て私はもう一度出發點にさかのぼつて考へねばならぬ。習練なき精神病者の作と、習練なき健康者の作との間の比較は、當面の材料に根據を置いては、出來ないこと。又習練なき者に於て造形的衝動の出現することが病氣の現象に歸屬し得るといふこと。などを述べた。それ故に、問題は否定的部面から明かにして行つたことになる。その上我等の困つたことは、精神病患者の造形的製作物に於て何が病原となつたかを判定する爲めの尺度がないと云ふことであつた。併し、もし迂路を辿れば、此の問題に近づくことの望みがないではない。即ち習練なき健康者の作ではなく、習練ある病者の作を調べて見ることとである。つまり言葉を換へてもつと正確に云ふならば、造形的習練のある者がその能力を利用して回復過程に役立たせてゐる場合を研究して見ることとである。

と云ふと如何にも單純な要求のやうだが、なか／＼厄介な問題なのである。つまり問題は、造形的表現能力が精神病的過程に依つて如何に變化せしめられてゐるかと云ふことである。で、私は公式の體裁で四つの可能性を區別し度い。

(1) その能力が完全に殘つてゐて、實例に就いて證明出來る場合。

(2) その活動が完全に中絶してゐる場合。これは美術家に於て起ることは稀でない。私は、マクス・アイティンゴンがある彫刻家の場合に就いての臨床的經驗のお蔭でこのことを知つたのであるが、その彫刻家は非常に重い精神病的期間にはあらゆる藝術的活動を中止し、その期間が過ぎて後、再びその仕事に着手し、前にやめてゐたところからまた製作を繼續せんとしたのである。

第三及び第四の可能性は共通的であつて、病氣と關係して仕事の變化が現はれるのである。二者の相違は只變化の種類に存する。第三の場合に於ては、様式の變化に障碍が現はれてゐるが、併し此の様式の變化は本人及びその時代の藝術的傾向と關係があるのである。その人の多くの作品の全般を大觀すると、その仕事の本然の姿を云々することが出來る。それがまづ、一般の意見に從へば、ヴン・ゴーグの場合及びメッサーシュミットの作品の場合に於て然りである。前者に於ては精神分裂症的

過程は問題でないやうに察せられる。後者の作品については私はかつて論議したことかあるが、これにあつては一部分の障碍が問題となつてゐる。たゞ或る一群の作品は精神錯亂的病氣と關聯して出來てゐる。樣式の變化は併し――此處ではたゞ此れだけを問題にするのだが――全く歴史的事情に順應して生じ得るものである。

第四の場合は、明かに病氣の關係から容易に理解し得る樣式變化を示してゐるものである。これが私達の目的上利用し得るためには、此の事實が完全に明白なものにならなければならぬ。診斷と樣式變化とは充分に確められねばならぬ。此の條件に順應する樣に思はれる二つの場合を、次に摘出する。

その第一はプァイファー及びヴァイガント (Pfeifer und Weygandt) の報告してゐる婦人患者で、彼女は工藝家として素描家として活動したのである。羅病の直前に彼女は童話の挿繪を作成した。その一つ（第二圖參照）を此處に紹介しておく。この繪は婦人患者の精神病者の樣式を表はしてゐると云へるであらう。箇々の點が特別の注意に値する。少女の傍の小籠の中に一匹の蛇が見える。これは大概の觀察者の見落すところである。この患者が既に病氣になつてから、或る人がこの作品を呈示したら、彼女自身が第一にこの蛇を指示した。蛇は患者の妄想の中で恐怖の動物である。蛇は云はゞ、繪の重大價値を傷つけずに、この繪の中に忍び込んだ樣なものである。自我は孤立的な、妄想的要素に對して己れを固守してゐる。患者の繪には亦別の性格も出てゐる。（第三圖參照）最初この繪を見ると、人々は習作畫であるやうに思ひ勝ちである。併しこれはさうではない。何となれば、こゝには何もないからである。此處で見られるすべては、みなそのちやんとした意義を有つてゐる。口角の星、帽子の上の植物、上部の二つの頭等。併し、私達にはその意味が分らない。それは判じ繪であつて、それを解く鍵は我等の手にはない。

第二の場合は豐富な面白い藝術的現象、スエーデンの畫家エルンスト・ヨーゼフゾンのことである。多方面な天才者なる彼は一八八八年、三十七歳にして精神病に羅つたが、羅病中でも彼は畫家としての活動を續けた。後は年少の頃スエーデンの青年藝術家黨の間の黨長であつた。卽ち、ストックホルムの官學的美術家に反抗する爭鬪の指導者であつた。一八八〇年の初めにパリーに於てもあらゆる方面から稱讃を博したが、その後幾多の失望の重壓下に益々妄想狀態に陷つて行つた。彼は又、文士及詩人としても活動したが、その才能の廣さについては、遺憾ながら、十分な觀念を讀者に傳へることは出來ない。彼の作品と人物とを何等かの點に於て結びつけることも斷念せねばならぬ。といふのは、スウェーデン語に私は通じてゐないのに、彼の文獻はスウェーデン語で書かれてあるから私には手が出せないのである。而も此の場合に於ては、病氣を繪畫的に表現す

ることは甚だ成功の見込がある。特にヨーゼフゾンの癩病期間中——彼は一九〇六年に死んだが—彼の様式が如何なる經過及び變化を閲したかについて、更に詳細なることを繪畫に依つて表はすに成功するやうならば……。

私は大ざつぱな比較對照をすることだけに止めておく。彼がいろ〳〵な別の形で描いた或る繪は、癩病以前の彼の樣式を代表してゐる（第四圖參照。）その繪は確乎たる發達史的地位を占め、八〇年代に支配的であつた一定の藝術的把握に從つてゐるものである。我々はそれに對して、癩病の頭初に出來た畫を擧げる（第五圖參照。）此の畫についても別に分析は行はぬ。たゞ大體の特色を枚擧するに止めておく。誰でも直ぐに氣付く事だが、如何に多くのものがそこに喪はれてをり、如何に構成が硬化して緊密さがなくなり、又如何にその表現から我々の感得するものが少くなつてゐるであらう。イスラエル王ダビデの手にあつて、絲に依つて彼の口と結びついてゐるコイル狀の投石器が何を意味してゐるかを誰が知り得るか、私達は不可解を連發してゐるものではない。唯一つの點、ゴリアテの額に注意を向けよう。それには三つの眼が在る。その一つは眞中にあつて、巨人三つ目小僧の額の眼に相當するものである。此の觀念が如何に廣く廣まつてゐるものであるかを了解するためには、ホメロスのオディシイのポリフェームのことを想起せねばならぬ。他の二つの眼も亦特異性を示してゐる。その一つは閉ぢられてゐる。如何に幾多の考へがこゝにゴタ〳〵と這入り込んでゐるかを我々は判知しようと試みることが出來る。聖書に曰くダビデの石ゴリアテの額を貫きたりと。それ以來幾世代の間、人々はこの文句に依つて、ゴリアテは眼を貫かれたのだと理解して來た。巨人の失明と殺害の觀念はお互に交錯してゐる。それで一つの眼は閉ぢられたのである。何となれば、三つの眼では多過ぎるし、又同時にダビデが斯うして勝利を得たのだと云ふ未來の出來事を示唆するためであるのだ。

併し、斯くの如き思考は此處で述べようと思つてゐる事柄の單なる影の如き暗示にすぎない。何となれば、ゴリアテの膝、臍、生殖器のところに脛あて的假面のあることを更に見るならば、患者の作品から彼の觀念世界を知ることの如何にのぞみうすいかを今更に知るであらう。

右の二人の患者に就いて何が共通的であるかを纒めて考へて見よう。我々は退行と云ふ現象を見て居るのである。更に適切に云ふならば、生物學上で機能喪失と名づけてゐる變化の現象に直面してゐるのだ。その機能喪失の二つの特色を例示するならば、まづこの繪畫は「不可解」なものとなつた。我々にも何とか理解の出來る表現の代りに、そこには種々の要素が相互に融合し交錯して、或る部分は判然と象徴的性格を示してゐるが、併しその象徴が如何に結びついてゐるかは我々の理解を超えてゐる。第三圖の口角の星、及びゴリアテの三つ眼の如きがその例である。第二の特徴としては、人間の容姿を表はしてゐる

一般的特徴について示唆したに過ぎぬ。さて次に、それ等の特徴に眼を向けてみる。

いかを十分に承知してゐる。それどころか、その中で習練ある精神病患者の造形作品と習練なき者のそれとが一致する二三の

我々は以上で最も特徴的な性格を擧げてしまつたとは思つてゐない。引例せる繪畫の本質に透徹することからなほ如何に遠

點に關して云ふならば、すべて特別に硬直してをり、不自然な感じを與へることとである。

## 四、精神病患者の藝術に於ける「形態的遊戯」

出發點として、我々はベルトシンガーの扱つた或る婦人患者の二つの素描を選ぶ。その素描の内容的意義は彼女の説明に依つて我々に分つてゐるのである。

第六圖（下半）に就いてその女畫家はかう述べてゐる。「この牡山羊は彼がその一部分であるところの人間の考へを表はしてゐる。二人の男は青年時代の戀人である」と。そこで我々は、牡山羊が男性の象徴となつてゐることを知る。即ち男性器象徴たる點では一人の男の手に持てる蛇と同じである。またこの患者の病歴回想中の告白によると、牡山羊の硬直せる男根を子供時代に見て非常に強い印象を受けた。その後彼女はまた或る加虐的な場面を見ての印象が或る山羊髯の男に結びついたので、再び山羊がそこに結付くことになつた。第二番の圖（第六圖上半）でこの患者は告白してゐる。この男は自己の內なる豚を馴らさうとしてゐる、否、彼自身が動物であるのだ、と。

此の素描の中にヒステリー的幻想の繪畫化を見ることが出來る。患者の説明に依つてその繪の持つ意義を我々は理解する。此の理解は聯想が夢の影像に伴ふ時にその夢を理解するのと正に一致するものである。

また此の繪は、無意識現象に從つて描かれてゐるのである。それが何を意味すべきかをすぐ思出すやうに出來てゐるのである。我々は夢の中に現はれてゐる部分に依つて主として無意識を知るのであるが、その部分の中には幼年時代の言語以前的念慮の遺物が保たれてゐるのである。

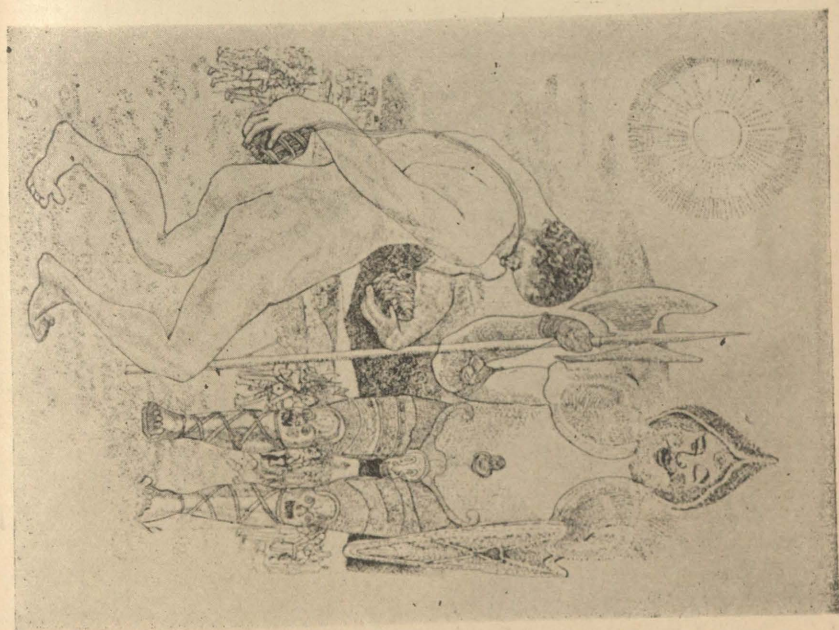
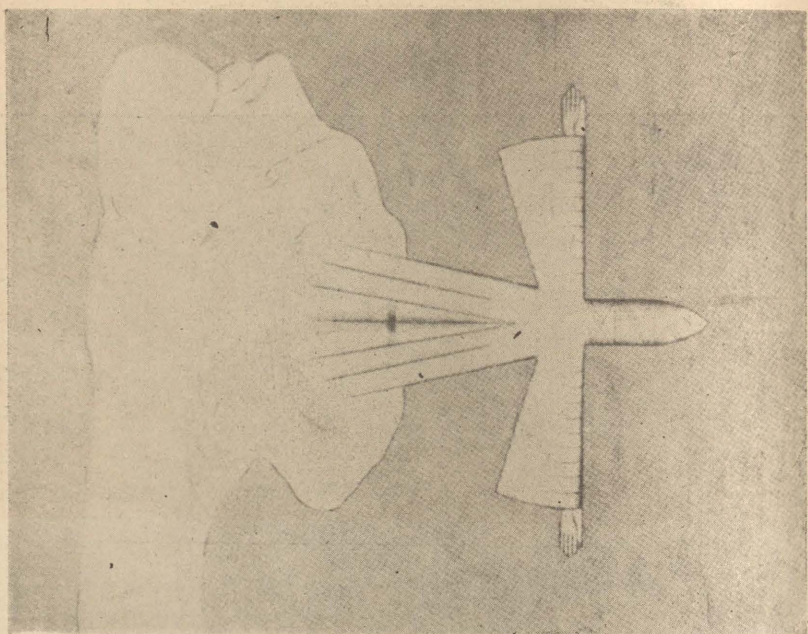
素描畫第六圖は無意識過程の作用の仕方、即ち凝縮と象徴化（これは間接表現の一種と見做される）の明瞭な實例であるに過ぎぬ。併しこれ等の畫の性格は精神分裂症の典型的の造形的操作とはなほ明瞭に區別される。或る一面から見てのとの性格を明かにするために、我等はプリンツホルンの擧げてゐる材料から二三の例を摘出する。

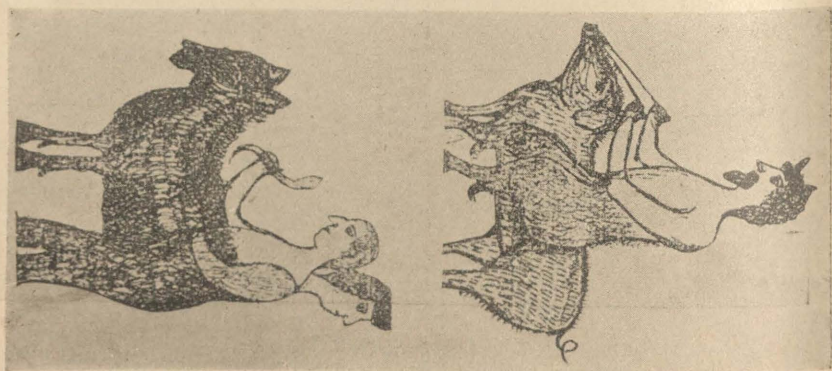
第七圖は機械工たる作者に依つて「反キリスト教者」と名づけられた作品である。この作者の他の報告によると、「神の心靈なる聖トーマスは假りそめの豫言者の姿となりて、雲の上より罪深き人類の上に下される最後の審判につきて救世主に告ぐ

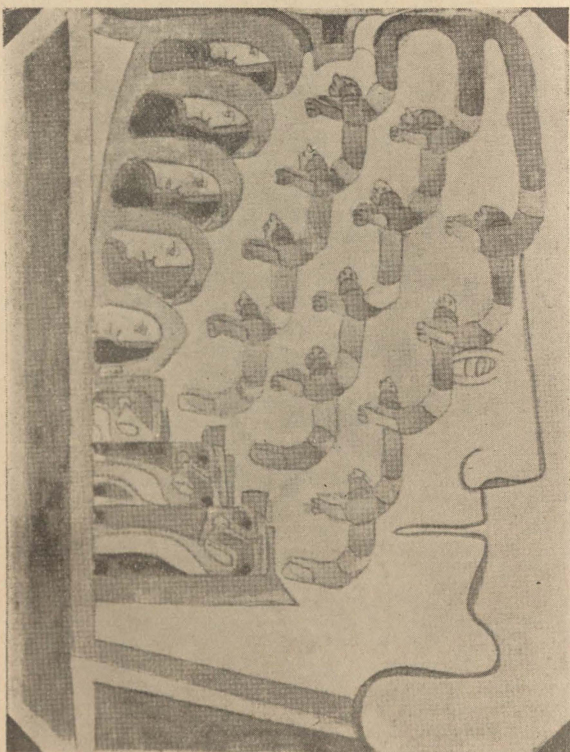
（第一圖）落畫き

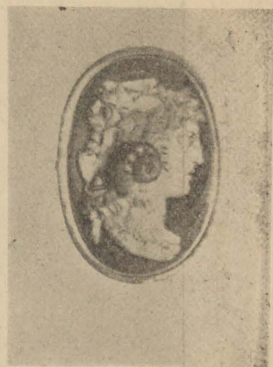
（第二圖）童話の挿畫

（第三圖）肖像

（第四圖）水の精

（第五圖）ダビデとゴリアテ

（第六圖）ヒステリー患者の妄想畫

（第七圖）反キリスト

（第八圖）不思議な牧人

（第九圖）六　つ　の　顔

（第十圖）蟲　の　穴

（第十三圖）ウイルヘルム
一世・二世

（第十一圖）四頭結合

（第十二圖）ヒンデンブルグ

るところありたり」と。此のやうに説明して貰つても、繪に現はれてゐる雲が頭の形を有するといふことが一體何を意味してゐるのか、その關係は不明で、その問題に解答を與へることは未だ出來ぬ。併しこの畫の類似的な個所は患者の別の報告により一部分了解し得るやうになる。

「私はこの未知の心靈に不信の靈トーマスといふ名前を與へた。そのわけは、彼の形態が三點から組合はされ得る一種のT字形に等しいためである。頭は四十二種の柘榴で出來てをり、その柘榴はやがてローマ法王冠となり、最後には立派な藁の堆積と變ずるのである」と。此處に於て、我々は、一定の形象が二重の意義を帶びて現はれてゐることを知るのである。頭は法王の冠であり、又柘榴でもある。藁の山が存在する場所を見つけるには苦勞する。下半身が刈穗束と見做されるのだと私は思ふ。

此處で我々が直面してゐる現象は、心理學的説明を要するものである。我々が夢の言葉、卽ち無意識過程が最も有効に働く領域に再び眼を向けるならば、その説明は極めて容易に得られる。夢の中では言語と事物が混同し、音響聯想が事物聯想の代用をなす樣な現象が屡々生ずる。換言すれば、夢の中では言語に於ける二重意義が精神分裂症患者の素描畫に於ける二重形態と同樣に、いろ〳〵に利用されるものである。これと類似した現象は、凡そ無意識過程の働いてゐる所ならどこでも、よく出會すものである。このやうな現象で最もよく知られてゐるのは精神分裂症患者が話をする場合である。卽ち、彼等が言葉で回復（取戻し）の試みをする時である。彼等が絕たれたる外界への關係を回復し、失つた對象を再獲得せんと試みる際には、その對象それ自身やその特性にまでは達せずしてその途中のところで中絕すると云ふことを、フロイドは極めて詳細に描寫してゐる。たゞ言葉だけが把握し得るものとなり、而も彼はそれを事物として取扱ふのである。言語觀念は、フロイドの表現に從へば、事物觀念を代表し、無意識過程としての意味を果すやうになるのである。精神病者の用語に於ける言葉の遊戲や言葉の流用を理解せんとのこの試みは、精神病者の造形的創作の多くの特徵にも擴充して見ることが出來る。現に次の實例について見ると、それがよく分る。

第八圖。作者はこの畫の成立を非常に明白に叙述してゐる故に、諸々の形態の組合せ、交錯の具合が殆ど眼前に彷彿して現はれて來る。

描寫は先づ或る細部から出發してゐる。——「先づ空中にコブラ（蛇）が立つてゐるのである。青く斑らな色をして、それから脚がくる。（それは蛇に添つてたつ。）それからいま一つの脚がそれに附着する。（それには足指までも見える。描寫は續いて左端の隅に戻る）第二の脚は蕪菁（リウベ）で出來てゐる。（それには次の樣な思ひ付きがある。「山神（リウベッアール）は悔悟を拂ふ」と。續いて右の端に戻る。此の第二

の脚には私の男の顔が見えた。（引用を短縮する。素描に現はれてゐる次の個所は蛇の體の水平的になつた部分に關係してゐる。）やがてそこから樹木が生えた。樹木の皮は前が破れて、その裂け目がその顔の中の口になつた。（さて次はインド土人の羽根飾の様な風に見える頭の部分のことになる。）毛髮は木の枝のやうな形をしてゐる。それから脚と足との間に女性器が見えた。それは男性の足を破つた。これは罪惡は女性を通じて來り男性を陷れるといふことを意味する。第一の脚は空に向つて突張つてゐる。それは地獄への轉落を意味してゐる。」と。

患者が自作の説明の紹介はこれくらゐにしておく。何となれば、その説明はこの畫の他の部分、中央の牧者の事に懸つてゐるからである。私に關する限りこれは新しい事ではない。私はこの畫の秘密の意味を內容的に理解しようと思ふものではないからだ。私の意圖は形態の二重意義を吟味するにあるのだ。畫家自身の告白はその二重意義の交錯を跡付けしめるに役立つ。種々の事物がその意味を交錯してゐる。外面的の相似が懸橋となつて一つの觀念が他の觀念へと通ずる。類似の事はまた言語の方面に就いても云へるので、言語遊戲と形態遊戲とは類似現象として認められる。

なほ付加へて云ふならば、類似は單に以上に止まらない。何となれば、言葉の遊戲と形態の遊戲とは精神分裂症者の言語的及び圖樣的表現機能の內に於いて特別の場合であるからである。何れの場合に就いても、我々は月並形式への類似の態度を見るのである。精神分裂症者の語るところは、如何にも不可解のやうであるけれども、文法上では非常に正確な場合が多いのである。正確であるところにその効果の大部分が原因してゐるらしい。精神分裂症の繪畫に就いても同樣なことが見られる。一定の常套的形式を墨守するのがそれである。併し我々の知つてゐる限りでは、時々さうでない場合がある。今まで論じて來た諸作品は少くともさう云ふ一般的な月並形式を保有してゐるもの丶やうに思はれる。

斯のやうな考察はこれくらゐにしておいて、前の問題に戻らう。我々の問題は今まで述べて來た諸々の現象の心理的意義が精神分析的な方法で一層鋭く把握することが出來るかどうかと云ふことである。その出發點として大ざつぱな對照を立て、精神病患者の造形作品と常人の造形作品とに於て外部的には相似してゐるが根本的には相違してゐるものを比較することが適當である。プリンツホルンの擧げてゐる素描家は私達に特徴ある二つの繪畫を提供してゐる。その一つは（第九圖參照）六つの頭の結合を示してゐる。これは一種特別な紛亂である。何となれば、大概の線が直接的な「二重意義」を有し、且つ同時及種々の頭に屬してゐるからである。同じ畫家の畫いた頭（第九圖）は全く鋭い横顏を示してゐる。然るに內面の方には相互に並んだ首、又は鎖狀の指形があり、その一方は一種の蟲の口で終つてゐる。

これ等二つの繪と對照する例を次に選んでみる。先づ六つの頭の結合に對しては一つの加工せる石（第十一圖）－四つの頭の

融合せるもの—を擧げる。左にはサティール（半人半山羊の森の神）の假面、右には女の横顏、上部には鬚のある神の顏、下部には山羊の顏が示してある。この例は非常に廣く行亙つてゐるもので、十八世紀に由來してゐる。それはローマ時代の刻石の信ずべき模寫である。此の種の浮彫石や浮彫玉石は、ローマ藝術に於てグリルス（Gryllus）と呼ばれ、純粹に形の遊戲と認められ、特殊な內容的意義に關しては一切不明である。昔の人はそれを滑稽なものと思つた。そのことはその名前に表はれてゐる。ルネサンス（文藝復興）に於ては「珍らし」「い滑稽な」發明をグリッシュ（Gryllisch）と呼んだのである。Grylliの語根はずつと昔に遡る。古代ペルシヤやイランの藝術領域にあるものと推察する。併し其の地でずつと以前に神と牡山羊との頭部が結合してゐたならば、石像に於ける合一は眞の同一性を、卽ち神と動物とが同一であり、一體であるとの思想を表してゐるのだと察することが出來よう。今我等の畫を問題にするとき、斯くの如き魔術的同一性が表現の根本になつてゐると云ふことは出來ない。此處では純粹に遊戲的滿足が支配してゐるのである。此の形態的遊戲は殆ど變化せず、數世紀間存續し、十六世紀以來廣範圍に亙つて確認せられ、大抵は一定の關係に於て、卽ち諷刺的肖像として現はれた。そしてやがて形態遊戲はこきおろしの役に立つた。

　多くの實例の中の一つとして、自由戰爭の末期にドイツに於て普及したナポレオンの肖像畫を擧げて見る。（表紙圖參照）その肖像は、皇帝の帽子のところにはプロシアの大鷲を、その肩のところには蜘蛛の巢を引裂いてゐる神の手が肩章として描いてある。その蜘蛛の巢はフランス十字勳章の代りにしてあるのだ。此の要素の中に屬性的偶意と同時に嘲笑的諷刺を見ることが出來るならば、私達が、ナポレオンの顏の形が如何に畫かれてゐるかを見るとき、絕望的に悶えてゐる人體から完全なるこきおろしを明瞭に見ることが出來る。で、この畫はこれを見るものに「本來この大帝は人間殺虐者である」と告げてゐるのである。

　我々が無意識過程の機制として知つた暗示と凝縮とはこゝで何を意味してゐるか。こゝではその傾向が非常に明瞭であつて自我が無意識過程に依つて克服されたことについて述べることは自ら明に禁ぜられてゐるのである!!　此處でもう一つ、他の事實が擧げてある。無意識過程は自我に奉仕した。自我は無意識過程を使役する、と。

「機智」に於てもこれと類似的の條件が妥當することを斷つておかねばならぬ。フロイドの觀察に從へば、機智は當人がある一瞬間その前意識的觀念をして無意識の加工に一任するところに生ずるのであると。自我は一瞬間、その權利を斷念する。自我が時々、豫定の場所に於て、豫定の目的のために、エスの働き方を大目に見て容認することは自我の力と見なすことが出來

る。が、精神分裂症患者が言葉や畫を描く場合は事情が違ふ。そのやうな時、自我は第二次仕上げや現實把握から逸脫して、言葉や形態の遊戲に向ふ。精神分裂症患者が偶然的に何らかの頓智的印象をなすことがあるといふことは周知の事實であり、又屢々論ぜられても來た。私は同樣のことを造形藝術についても主張したい。即ちこの二つの場合に於て屢々現象は似てゐてもその意味は同じではないのだ。

この點を明瞭にするために、我等は精神病者の二つの彫刻を紹介しよう。それ等はプリンツホルンの著書に出てゐるものである。患者はその一つを「ヒンデンブルグ」と名付けてゐる。（第十二圖）この彫刻を戲畫として說明することをお許し願ひたい。組んだ兩手を腹の上にあてゝ退屈さうにしてゐる肥えた案山子、軍人らしいところは下半身を被つてゐる甲冑だけに暗示されてゐる。それに加へて巨大な耳と獅子鼻……併し、これ等の敍述はたゞ暗示だけしてゐるのが良いのである。作者は元來このやうに見せようとしたゞけであるが、併し爾々に見せようとするのに從つて行く多くの人々はそこに「戲畫的」なものを見せるやうになり勝ちである。さて態度を變へてその彫刻を見直すならば、元來これは戰爭中偶像として作られたものだが、成程と思へて來る。軍司令官の權力と偉大さとを表現しようとしたものである。空想的な頭の飾りは王冠のつもりなのだ。「ウィルヘルム王が退位するときでもこの像はこの王冠をつけてゐる。」頸飾りと組んだ手とはヒンデンブルクを宗教的父祖として表示してゐる。彼は兵士等と共に、牧師として祈禱する。耳の巨大なるは特別な理由を有してゐる。それはすべてのことを聽くことを表現してゐるやうである。作者の意見に從へば、この作品は魔術的精神に依つて貫かれ、魔術的思想に根をおろしてゐる、と。

ヒンデンブルグの彫刻に於て、作者が精神病者であるために、顧慮（即ち抑壓）の可能性がすべての人には明かではなく、即ち漫畫化の效果を狙つたらしい可能性が殆ど明かでないとするならば、この彫刻家の第二の作品は更によく私達の要求に應じてくれる。（第十三圖參照）この作は彼の陳述に依れば、ウィルヘルム一世と二世とを同時に表現し、兩支配者の鬚が合一されてゐる。それは又「ベルリンのレーマン氏」として知られてゐるが、この名前は世間の人々が付けたらしく思はれる。かう云ふ名前をつけたところを見ると、世間は確に我々すべての第一印象を適確に握んだ樣に見えるその傲然たる口鬚や、やゝ出つ齒の口に依つて如何にも野蠻で酋長にもなさまほしき人物であることが察せられる。此の事例に依つて我等は一つの事實を確認する。即ち、或る造形作品に無意識過程が働きかけてゐる時、それの外的意義だけで見るわけに行かないと云ふことである。精神病患者の話の中に出て來る言葉の遊戲は機智としての效果を持つことがあるし、又彼等の造形的作品の内には漫畫

として見られるものもある。何となれば形式的特色は出身の所に依つて共通的であるからだ。無意識過程に依る色付けがあると言葉や造形は、精神生活に於けるそれ等の位置並びにその内容的意義に從つて全く相違せる造形に、同樣な外見、統一的な樣相を與へる。さう云ふ色付けは精神的なもの、形態的原則である。即ち「エス」(無意識)に屬し總ての「原始的」精神的造形を多かれ少かれ結合さすところの形態的原則である。私達が氣付いてゐる對照はその强調を、一致の點へよりも相違の點へ置くべきであつた。即ち、無意識が効果を表はすことの證明を意圖するよりも、種々の精神的機構の内に於て無意識が効果を現はし得るものであることを指示する方が目的であるべきであつた。無意識が自我に奉仕する場合(機智や漫畫、漫像の場合)と自我が無意識に埋沒する場合(夢や精神病の場合)とを大雜束に對立させ、この圖式に依つて我々の只今の問題を考へて見ると、健康者の形態遊戲と病者の形態遊戲との間の相似と相違は判然として來る。更にまた別の對立として、子供の藝術と野蠻人のそれとを考へて見る。そこに非常に大きな相似のあることは看過出來ないが、そこには研究の立場と云ふものがあつてその立場に於て共通點の强調よりも相違點の强調の方が重視せられるのである。即ちこのやうにして研究對象の特質が把握せられるのである。

このやうにして、自我を主とする普通の學問は相違點を强調することが出來るが、無意識(エス)を主とする分析學では共通點を强調することが當然許されねばならぬ。併し無意識と自我(意識)とは截然獨立させて考へらるべきものでないのであるから、この兩者の相關作用を構成的に考へるのが、例へばフロイドが『禁制と症候と不安』の中でとつてゐる態度である。さうして我等が本論に於てとつてゐる態度もこれである。(次號完結)

# 精神病者を描いた文學

高橋　鐵

「多くの文學的作物は素朴な白日夢の原型から遙かに離れたものであることは我々も決して認めないのではないが、併し極度に變化したものでこの原型を不斷の過渡的連續に依つて關係せしめ得るものであることを推論せざるを得ないのである。

フロイドは「詩人と空想」（精神分析學全集「分析藝術論」一五四頁）に於てさう云つてゐる。

白日夢とは「空想の空中樓閣的創造」であり「願望の充足」である。（同、一五一頁―一五二頁）

その故に、文學作品の中には、夢の中の登場者にも似た人物が往々現れる。――勿論、アルバート・モーデルが「文學に於ける性愛動機」で結語してゐるとほり「文學は一個の現實である」から、意識的創造による性格描寫も加はつてゐる。が、不朽の作といはれるものは、當然、讀者が多大にコムプレクスを滿足させたものであり、從つて大抵コムプレクス的な人物がさかんに描かれる。假令、ファウスト、ハムレット、マクベス夫人、ラスコールニコフ、ドン・キホーテ、カルメン、サロメ、ドリアングレー、ナナ、光源氏、かぐや姬、伏姬、世之介……と思ひつくまゝに並べると、いづれも、精神鑑定を要するほどコムプレクスの塊り（異常性格）ではないか。

そして、性格異常者が、文學作品の題材にふさはしいと同樣な意味で、いや、それ以上に「文學的」だといふ意味で、近代文學には、精神病者を描いたものが現れてきた。

假令、チェホフ「六號室」、E・A・ポー「タル博士とフザー教授の療法」、モオパッサン「エルメ夫人」、ガルシン「紅い花」、如是閑「奇妙な精神病者」、亂步「鏡地獄」、不如丘「學用患者の手記」、寛「順番」、「屋上の狂人」、杉山平助「猫間先生毆らる」、木々高太郎「網膜脈視症」、「妄想の原理」、「就眠儀式」、吉井勇「髑髏舞」、佐藤春夫「更生記」、芥川「河童」「齒車」、不木「二重人格」――そんな諸作がある。

勿論、昔の文學にも、オフィーリアの如く、お三輪・お夏・保名の如く、發狂の場面で名高いものもあつたが、いづれも、その病因にしろ症狀にしろ、狂者とはかういふものだといつた風な概念的、類型的な描寫表現をとつている。

いや、近代文學にしても、所謂新派悲劇などにはさういふのなら、すくなくはないらしい。

そこで、私はこの二年間、まるで狂人症とでも稱すべきやうに、精神病者を描いた小説を發表してきた。しかも、所謂大衆文學としてゞある。

「蕃女の涙石」、「空に臥る女」、「人生レイアウト」、「氷人創生記」、「瀧夜叉憑靈」、「浦島になつた男」（水底妄想）、「去腦人間」「交靈鬼懺悔」その他にもモノマニアを扱つた「怪船人魚號」、夢遊病者を描いた「明笛魔笛」、强迫觀念症を綾にした「輪切りの人」、總計十一もある。（「オール讀物」「新青年」「モダン日本」「廣告界」等各誌所載）

實を云ふと、私としては、いろ〳〵な理由（意圖）の下に始めた仕事だつた。何故左樣なことを意圖したか？――私は、精神病者を描いた文學を考察するに當つて精神分析學徒諸賢に、分析的な「打明け話」をきいて頂かう。

精神病の症候は、幼兒心理、原始人心理、神話傳説、夢等と甚だ多くの共通點をもつてゐる。畢竟、無意識的心理的な世界とも云ふべきものだからである。私は、まづ此の分析理論から出發した。

元來、大衆作家の內には講談・浪花節のたぐひを粉本としてゐる人が多い。實際に私が諸作家からきいたことである。講談浪花節のシテュエーションを現代化すれば、それで立派に、大衆のコムプレクスに觸れる「現代小説」が出來、又それを再轉すれば「時代小説」にもなるらしい。

そこで、私は。神話傳説を近代化しようと考へた。これならば、講談・浪花節の類よりもズット根元的であらう。民衆心理學にも深遠な無意識面の活躍（白日夢）がある。神話傳説を自然科學と社會科學の觀點から分析し直し、近代的なストリーを創らう。それには、勢ひ、精神病者を登場させると、合理的になる。――これが最初到達したところである。

次に、私は、フロイドの「トーテムとタブー」中から左記のやうな啓示を受けた。

「ノイローゼの非社會性は、發生的には、不滿足な現實から、快樂の多い幻想世界へ逃避せんとする根元的傾向から生じる。精神病者が避けんとするこの現實世界の中では、人の團體と彼等によつて共同に創られた制度とが支配してゐる。故に現實から遠ざかる事は、同時に、人間の共同生活から踏み出る事である。」

つまり、個體が環境適應に失敗したとき、發狂への機轉をとるといふ分析解釋から精神病者を觀察してみる。すると、社會性にも眼隱ししない文學がうみ出されるであらう。そしてバーナード・ハートが「狂氣の心理學」に於て分析的に斷定してゐるやうに、

「狂氣或ひは狂氣の一部分は、その個人の固有な欠陥によるよりも、より多く、彼が住まねばならぬ其の社會の諸狀態によつて生じるといふことが證明されるであらう。そして將來は、除去されねばならぬものは、個人ではなく、その社會の諸狀勢こそ革新されねばならぬものであることを決定するかも知れない。」

といふ社會主義的な、科學的な「勸善懲惡」小說にもなるに相違ない。

これが意圖を成立させた思考の二である。その形式として、私は所謂探偵小說乃至怪奇小說をとつた。(さういふものを、一時濫讀したことがあつたところへ、長谷川誠也先生が、探偵小說はそれ自身人生的で面白いと喝破して下さつたので、決心がついたのである。)——全く、探偵小說のプロット、スリル、サスペンス等は、どんな文學にもとり入れるべきだらう。試みにユーゴー、ドストエフスキー、モオパッサン、ゾラ、ウェルズといふやうな巨匠の普及された作品には探偵小說的な技巧が多い。

併し、探偵小說にしても、名探偵が奇怪な犯罪に飛込んで、逆に眞犯人をとらへるといふスタイルは行詰つてゐるし、第一文學としての描寫も求められぬほど遊戲的である。

そこで、私は、精神分析學の恩惠を判り易く大衆へ知らしめる爲にも、斯學(對象としての無意識心理を、分析的方法で攻究して行く科學)を應用した探偵小說を書かうと考えた。そして犯罪を「探偵」するよりも、精神病(主として精神神經症—ヒステリー、强迫神經症、精神乖離症、パラノイア、メランコリア等)の病因を分析「探偵」する心理小說を書いてみたい。

これならば、一般大衆のコムプレクスにもアピールすること疑ひなしといふ結論に達したのである。(尤も精神分析學應用の探偵小說は、既に前記、佐藤春夫、木々高太郎兩氏が手掛けてゐるし、淸澤洌、水上呂理の二氏も二三作發表してゐるが、淸澤・水上氏のなどは公式的に鵜呑みしたやうな作品だつた。——本誌第三卷五號拙稿「分析的探偵小說四つについて」中に詳記してある。) 以上が私の「合理化」である。

(1)神話傳說の近代化(自然科學及社會科學を驅使した、ヂャーナリストの所謂幻奇小說。假說が多いときには精神病者の世界へ逃げ込む。)

(2)精神分析的探偵小說(これならば、私自身のコムプレクスと思想と現代大衆のコムプレクスと思想とに合致するであらう)

さて、私は、さういふ意圖の下に、精神病者を描いた文學を勉强した。そして、この方面の考祭からも、次のやうなことを主張し得るに至つた。卽ち——

精神分析學は、中毒性精神病・自家中毒性精神病・腦疾患及腦外傷による精神障碍・老耄性精神病・傳染病性精神病・痲痺性痴呆・疲憊性精神病等のやうな、腦髓に解剖學的病變があるものや、精神乖離症のやうな自己籠居狀態には直接に治療的效果を認められぬかも知れないが、それらの症狀に個人差がある以上、さういふ妄想妄覺等の個人差は研究對象とすべきではないか。ましてや、文學作品の對象としては、さういふ個人差も大いに活かすべきではないか。(これこそは、從來の精神病學が放りッぱなしにしてゐたもので、精神分析學のみが扱ひ得るものであらう。) 實例を二三分析解釋してみよう。

ガルシン作「紅い花」の主人公は、妄覺妄想が激しい。「畏くも天の下しろしめす皇帝ピョートル一世陛下の御名代として余は本院の査閲を宣す!」といふ振込みで入院して來た患者である。中酒性精神病か痲痺性痴呆の中期かとも診斷し得るが、兎に角、彼は、その精神病院の庭に咲いた「紅い花」(ケシの花)を、全くシムボリックに呪ひ初め、「さも内氣さうな無邪氣さうなフリを裝ふ暗黑神(アリマン)で」、「世界のありとある惡が集つてゐた」と恐れ、「蛇に似た何本もの長いうねうねして流れをなして……まきつけ、しめつけ、搾りあげ、滲みこませる。」などと考える。果は、その花を全部むしりとるのが自分の大使命だと確信して、看護人と亂鬪をやつたりしながら、又、夜半星に向つて「お傍へ參ります」と涙を流して告げた後、最後の一本の花をむしりとつたまゝ死んで行く。

全篇、紅い花に對する象徵的な瞑想であつて、その形容がそのまゝ、女性に對する愛憎心理を如實に綴つてゐるのだ。(本誌第六卷第一號拙稿「象徵構成の無意識心理機制」參照)

江戶川亂步氏の「鏡地獄」も象徵的な空想から發狂へ移行した男の物語である。兩親とも喪つて莫大な財產を受繼いだ靑年がレンズ狂になつてゐる。お祖父さんか曾祖父さんが秘藏した昔の望遠鏡やギヤマンの器物を珍重してゐる中に、中學で物理學の時間に凹面鏡をみせられる。すると他の友達たちは「何だか性慾的な事實に關係してゐる樣な氣がして、恥しくて仕樣」がないニキビが月の表面の樣に擴大されるので不氣味がる。が、主人公はその後、大小樣々な凹面鏡をつくつたり、潜望鏡で小間使の私室を覗いたり、顯微鏡で悶死する蟲をみたり……段々狂的になつて、自分の顏を實物幻燈で擴大したり鏡の部屋でひとり裸體で暮したりしだす。唯一人、十八の小間使を愛するが「あの子のたつた一つの取柄は、身體中に數限りもなく、非

常に深い濃やかな陰影があることだ。」と口癖のやうに云つてゐる。しかも、部屋全體を、凹面鏡・凸面鏡・波型鏡筒型鏡などにしその中で素裸になつて踊り狂ふ。そして最後に、玉乘りの玉より大きな鏡の玉に入つたまゝ、發狂して了ふのだ。「どちらかと云へば、神經質に引締つた顏で一寸見ると怖はい程でしたのが、今はまるで死人の相好の樣に顏面の凡ての筋がたるんで了ひ「ゲラ〳〵笑つてゐる」――凹面鏡が全身を包んだときの自分自身の影像の恐怖から發狂したのかと結んである。

――これこそ精神乖離症に相違ない。ナルチスムス的ノイローゼ。兩親も兄妹もない孤獨な彼が、いろいろな別自我を可視的に創造して愛撫する。唯一人、リビドーを向けた異性は「身體中に數限りもなく、非常に深い濃い陰影がある」女であつた。そして、巨人空想（一寸法師空想の反動形成）を滿足させる影像、しかも別自我（ドッペル・ゲンゲル）の影像に抱かれて、球體の中で發狂する。陰影＝球體＝胎內復歸であり、この發狂はナルチストのおちいる精神乖離症そのものの象徵でさへある。

今度は、非常に現實的な小說を例示しよう。

モオパッサンは「エルメ夫人」の書出しを如何にも分析的に書いてゐる。

「不思議に私は狂人たちに心惹かれる。數々の怪しい夢を孕んだ神秘の國に、端睨すべからざる錯亂の雲霧に、平然と住してゐる彼等狂人達にとつて、以前彼等が正氣の社會で見たこと、なしたこと、愛したことなどのすべてが、事物を規範とするあらゆる法則や、人間の思考を支配するすべての範疇から拔出て、幻想的な存在のうちに再びまた繰返されてゐるのです。……お伽噺めいたことも恒常事となり、超自然事も日常時となつてゐるのです。論理といふ古びた垣根も、理性といふ古臭い障壁も、常識といふ陳腐な思考の欄干も、すべてが毀たれ、頽たれ、傾いて、幻想の無邊際な國に放たれて、野放圖もなく跳びはねてとどまるところを知りません。……たゞ幻覺的な氣の迷ひで、心一つで王子になつたり皇帝になつたり、人生のあらゆる甘美な歡樂を私することが出來、いつもすこやかに、いつも美しく、いつも若く、いつも人から愛されてゐるやうに、氣の持ち樣一つで思へるのです。本當に狂人の彼等だけがこの地上では幸福なのです。それといふのも彼等にとつては、現實はもう存在しないのですから。……何處から來り、また何處へ逝くとも知らない未知の急流の白く泡立つ深潭の底をぢつと見詰める樣な氣がします。……が、狂人の心に思ひをこらしても結局なんにもなりません。といふのは狂人の變梃極まる考へといつたつて、つまるところ、考へは考へなのですが、それが途徹もなく變梃なのは、既に理性に支配されてゐないが爲に他ならぬからです。……その迸り出る出所がわれわれに見えないからです。」

このやうに憧憬したモオパッサン自身も最後には發狂し、しかも、「暗い〳〵」と叫びながら自殺を遂げたといふから皮肉

である。しかし乍ら、彼はどんな精神病者を描いたらうか――。

エルメ夫人は「まだ美しい四十年配の女」で、精神病院の一室に、ヴェールに顏を包み、手鏡で自分をみてゐる。おできが顏中に出來てゐるといふ妄想があるのだ。

彼女は未亡人だつた。十五歳の一人息子ジョルジュをずいぶん可愛がつてきたが、その子が天然痘に罹ると、極度に恐れ、自分の部屋中を消毒し、息子の部屋も見舞はない。ジョルジュは母に逢ひたがるが、醫師が待女を引張つて行つて逢はせようとしても戸口にかぢりついて、遂に行つてやらなかつた。息子は死期を知り、バルコニーを傳はつてガラスの窓越しに母の顏をみせてくれるやうに哀願するが、エルメ夫人は、二三歩で逃げ歸つて泣きわめいた。息子は到頭死んだ。その翌日彼女は發狂し、精神病醫に訴えてゐる。

「先生、坊やを看病してゐる間に、わたしはかうした怖ろしい病氣に取りつかれてしまつたのです。坊やの生命は救ひましたが、わたしは、こんな見るも恥かしい顏になつてしまひました。可哀相な坊やに、わたしの美貌をすつかりやつてしまひました。けれど、盡すべきところは、ちやんと盡したのですから、わたしの良心は至極おだやかなんでございますの。よしんばわたしが苦に病んでゐるにせよ、それをご存じなのはたゞ神樣だけですわ」と。

勿論、エルメ夫人には、なんにも出來てはゐないのだ。――彼女こそ明らかに苦悶ヒステリー（恐怖症）である、おッぽり放しで愛兒を死なした罪償感が贖罪願望となり、息子は死なずに、自分が天然痘を引受けたといふ妄想で、超自我と妥協をしたのである。

次に、長谷川如是閑氏の「奇妙な精神病者の話」に登場する老患者を分析しよう。

その老紳士は一見したところ、恰好も態度も立派で、全然精神病者とは思へないが、「總ての事實の確實性を絕對に疑ひ」「たゞ理智によつてそれを證據立てやうとして、常に果ない論理の糸車を廻してゐる「奇妙な病氣に罹つた人だ。」「デカルト以上だ」といふ。名刺をみても、

「私にはそんな風に見えてゐます。然し誰が私にそれがさうだといふことを證據立てて吳れます？」といふ。菓子を食はしても「そんな感じがしてゐます」といふのである。

この老紳士が發狂したのは、自分の全く關知しない行爲を詐欺橫領で告訴され、裁判の結果は確かに原告側の辯護士が說き伏せるとほりになつて了ふ。彼は未決監に入れられ、漸く保釋で出てくる。保釋中に、友人の自殺事件で檢事局へ證人として

喚ばれた。友人は毒藥自殺を企て、臨終の床で「死にたくない」と呟いたのだ。老紳士はそれをきいたのだ。又、彼宛に自殺者が土曜日に遊びに行くといふ端書を書いてゐる。（投函はしなかつたが、確かに遺書を認めた後に書いたものだつた。）

そのとき、老紳士は檢事へ陳述を拒み、

「あなたは、私の見たり聞いたりしたことを根據にして何か判斷しようとしてゐるでせう。それが危險だから私は申しませんのです」といふ。

檢事は怒り「――あなたは有りのまゝの事をいふ義務があるのです」

「そんな義務は私にはありません。それなら私は嘘をつく義務もあるのです。」

それから、遺書をかいた人間が死にたくはないといつたのは矛盾してると檢事が云へば、

「遺書を書いたつて、死にたくないものは死にたくないでせう。そんな矛盾は澤山ある。」

「まだ、あなたの知つてゐる矛盾が外にもあるのですか。」と檢事が乘出すと、

「矛盾ばかりしか知りません」と答へる。

そして、自殺者が遊びに行くといふハガキをかいてるのはおかしいと檢事が云へば、

「そんなことがあるものですか。毒を飮んだ人間だつて端書は出せます。」

「死んでしまつた翌々日に、君の所へ遊びに行けますか。」

「行けやうが行けまいが、行かうと思ふ分には少しも差支ありません。出來ないことを爲やうと思ふことはあなた方にでもあるでせう。」

さういふ不思議な問答をする。

又、彼は（社長だつたが）時計の下にゐる社員に、「時計は今何時だ」ときく。「三時十分です」と社員が答えると、「いつがだ？」、「今がです」とさう返事されると「君は前の瞬間に三時十分と答へたぢやないか、それから今又同じ時刻だと云ふ。訝しいぢやないか、一つ時間が二つの時間の間に續いてゐる譯かい？」――「エ、それでは十分五十秒です。」「今が五十秒か」「エ、今がです」――「君は何をいつてゐる！」

彼は怒つて、自分の時計の下へ行き、自分の時計と上の時計とを見上げ見下ししてゐる。どうしても二つの時計は精確に合はないといふのである。――かうして老紳士は患者となつたのだ。

この「善良」な老人は、拘禁性精神病といふよりは寧ろ、拘禁中に强迫神經症を誘發したものではないか。懷疑から生じた破壞衝動が、事物の否定や疑間を强迫的に思考させる。斯くして、漸く無意識面の滿足を得たのであらう。

以上、僅かな例によつても「精神病者を描いた文學」は、充分讀者を滿足させるのみでなく、われら分析學徒が、その症候に分析解釋を下す時は、實に切實な、精神衞生上の參考となる。文學者の心血をそゝいだ描寫表現も充分報いられるであらう。

私は、今後も一層かうした文學創作を續けて行きたいと思ふ。願はくば、淺學なる學徒に御高敎と御鞭達を賜りたいものである。

——一九三九・八・八——

——「通俗醫學」誌上の批評——

## 冷感症とその治療

ヒツチマン博士・ベルクラー博士 原著
大槻憲二、高水力太郎 共譯

文明の進歩が一極點に達した時代に、女性の冷感症と男性の不能症とが增加する事實は歴史の上に徵しても明白であつて、ギリシヤ末期のレスボス婦人の同性愛の如きもその一例と云ふべく、享樂を求むる餘り社會秩序の紊亂を來すのみならず、人間本來の自然の生命力を發揮せずして遂に國民力萎縮の結果を見るに至るものである。乃ち出産率低下の問題も、一部民族學者の説く『上層階級に於ける産兒調節の氾濫』にも在らうが冷感と不能の事實を正しく觀察して其の對策を樹つる事もまた喫緊の事である。

婦人の冷感症に對する療法として決定的な治療法はなかつた。藥物も治療機も何らの効果を示さないが、近年フロイドの提唱せる精神分析療法が卓驗を示す唯一のものと云へよう。ドレスデンのケエラア敎授の説に依ると、冷感症は實質的に病源なきに不拘子宮筋腫の如き婦人科疾患や不姙症を惹起し得ると云ふ。果して然りとせば其の豫防と治療の探究は愼重になさるべきであり、性知識の正當な敎導が肝要である。

大槻、高水兩氏共譯の本書は、一九三四年キーン出版のもので冷感症の種類、眞因の詳細なる考察とその分析治療を論じた良心的な學術書である、好學の士に一見を勸めると共に、敎養あり眞摯なる青年子女の婚前、新婚のレクチュアとしても良き書物であらうと思ふ。附錄としてベルグラーの「處女性の問題に就いて」がある。

（大型菊判一三〇頁、定價一圓八十錢、送料十錢）

# 芭蕉の無意識象徴

宮田戊子

## 所謂象徴詩の迷妄

芭蕉とその性愛とは前號に述べたが、本稿ではそれを承けて、彼の象徴を通して、どのやうにその無意識の心理が動いて行つたかを見て行かうとするのである。したがつて本稿は前號所掲の拙稿と相關聯するところ少くなく、相互に論旨が波及することをまづ述べておきたい。

芭蕉の俳句が象徴的であることは、旣に多くの研究家に云はれてゐることである。こゝに云はれる象徴がシムボルの譯語であり、したがつてそれは日本に象徴詩の作品や理論が輸入されてから、多くはそれの影響をうけた人々によつて再發見され指摘されたのである。然し今こゝにとりあげようとしてゐる芭蕉の象徴は、それとは全然別個のもので、前者が主として象徴の技術に關するものであるに反し、後者はそれの表象を以て芭蕉を檢討する資料たらしめようとするものであつて、前者がそれによつて芭蕉の藝術の優秀性の認識ぐらゐに重點がおかれるに反し、後者は廣く人間の一切の行動が何によつて動くか、またその性格が如何にして規制されてゆくかを見ようとするものである。

まづ最初に、いはゆる象徴詩の運動を概觀し、その象徴が如何なる種類のものであるか、またそれら象徴詩家によつて指摘された芭蕉の句の象徴なるものがどのやうなものであるかを辨別しておくのが順當であらう。

日本において Symbol を象徴と譯したのは、『維氏美學』の中江兆民であるさうであるが、これが一般化されたのは明治三十年ごろに至つて上田敏、蒲原有明などがこれを唱へてからである。そこでその象徴といふのはどんなものか、これをその提唱者に聞かう。明治三十八年十月刊行された上田敏の『海潮音』の序で、彼はその象徴を解義して左のやうに云つてゐる。

――象徴の用は、之が助を藉りて詩人の觀想に類似したる一の心狀を讀者に與ふるに在りて、必ずしも同一の概念を

傳へむと勉むるにあらず。されば靜かに象徴詩を味ふ者は、自己の感興に應じて、詩人も未だ說き及ぼさゞる言語道斷の妙趣を翫賞し得可し。――

又彼はステファンヌ・マラルメの所說を譯して

――物象を靜觀して、これが喚起したる幻想の裡自ら心象の飛揚する時は『歌』成る。――それ物象を明示するは詩興四分の三を沒却するものなり。讀詩の妙は漸々遲々たる推度の裡に存す。暗示は卽ちこれ幻想に非らずや。這般幽玄の運用を象徴と名づく。一の心狀を示むが爲、徐に物象を喚起し、或は之を逆まに、一の物象を採りて、闡明數番の後これより一の心狀を脫離せしむる事これなり。――

とも云つた。然し以上が象徴詩であるとすれば、新らしくこれを提唱するまでもなく、古來の詩歌は皆幻想の暗示でなくてはならないのである。そこでこれを史家に尋ねて見ると日夏耿之介氏は左のやうに云つてゐる。

――詩歌の象徴性はむかしから存在するが、近代象徴主義の詩歌は正しく明治三十年代からの發芽であつて、それ以前からの存在ではない。その兩者をしば〳〵混同するものがあるのは象徴的なる詩歌と象徴主義的なる詩歌とを混同した爲に外ならぬ。――近代象徴主義の特質は同じ象徴ながら情調象徴を特に根本として、神經の世界を重視し、その思想は主として頹唐的であつた。（同氏『日本象徴詩の研究』）

ところでこゝに情調象徴と呼ばれたものは何であるかといふと、詩人の意識心理に喚起された幻想であつて、あらゆる藝術を人々の幻想――白晝夢――の具象化であるとすれば、これだけでは古來の詩歌と近代象徴詩を峻別する理由とはならない。情調なるものは意識心理のみによつて成り立つものではなく、無意識に抑壓された尨大なる觀念群が、意識の機關を潜つて言葉といふ表徴を借りて出現したものであるからである。こゝでは象徴詩の批判をするのが目的ではないので大略にとゞめるが、いはゆる象徴なるものが無意識を假定せずしては解明すべからざるものであることは、上田敏が象徴は同一の心狀を讀者に與ふるものにあらざることを述べ、

――例へば『鷺の歌』を誦するに當て讀者は種々の解釋を試むべき自由を有す。此詩を廣く人生に擬して解せむか、曰く、凡俗の大衆は眼低し、法利賽の徒の徒に虛僞の生を營みて、醜辱汚穢の沼に網うつ、名や財や、はた樂欲を漁ぐむとすなり。唯、漂渺たる理想の白鷺は羽風徐に羽撃きて、久方の天を飛び、影は落ちて、骨蓬の白く淸らにも漂ふ水の面に映りぬ。之を捉へむとしてえせず、此世のものならざればなりと。されどこれ只一の解釋たるに過ぎず、或は意を狹くして詩に一身の運を寄するも可ならむ。肉體の欲に饜きて、とこしへに精神の愛に飢えたる放縱生活の悲愁こゝに湛へられ、或は空想の泡沫に歸するを哀みて、眞理の捉へ難きに憧るゝ哲人の愁思ひほのめかさる――

など云つてゐる如く、論者自らその解釋に對する權利を放棄したのであるが、こゝに彼らが云つてゐる『鷺の歌』とはヴルハアレンの詩であまねく人の知るところのものであるが、こゝに引用しておく方が論旨を進める上で便利であらう。

ほのぐらき黄金隱沼（こがねこもりぬ）
骨蓬（かうほね）の白く咲けるに、
靜かなる鷺の羽風は
徐（おもむろ）に影を落しぬ。

水の面に影は漂ひ
廣ごりて、ころもに似たり
天（あめ）なるや、鳥の通路（かよひぢ）
羽ばたきの音もたえだえ。
漁子（すなどり）のいと賢しらに
淸らなる網をうてども
空翔ける奇しき翼の
おとなひをゆめだにしらず。
また知らず日に夜をつぎて
溝のうち泥土の底
鬱憂の網に待つもの
久方の光りに飛ぶを

卽ち上田敏がこゝで云つてゐる理想の白鷺とか、眞理の捉へ難きに憧るゝ哲人の貌とかは解釋者の自由だといふのであるが、これを一篇の藝術として味はふ時、それの解釋はむろん讀者の自由でなければならないが、一度これを作者の無意識に根をおく幻想の具象化と見る時、又更に多くの象徵詩人の詩を讀む時、その解釋は論者がいふやうに純眞なる人間性といふやうなものを抽出することは出來なくなつて來、象徵詩人や評論家が眞理や理想の具象化であるといふのは、無意識を意識によつて解釋せんとする理窟づけにほかならないと斷定せられるのである。したがつてこれら詩人や評論家の象徵と、我々のそれとの差異は、實に人間そのものゝ認識史と聯關するところなくては解しがたいものとなる。

　高橋鐵氏は本誌昨年一月號所揭「象徵構成の心理機制」において、象徵派の詩人が湖沼池泉海灣等をしば〳〵詠つてゐる事を指摘し、それが抑壓された表象の聯合が意識的表面に浮んだものであることを論じられたのは同感である。象徵詩家は確かに似而非なる意識的象徵を以てして象徵一般を論じ去らうとしたのであるが、この湖泉池泉海灣の詠出は、これから述べようとする芭蕉にも顯著に見られる傾向なので、特に讀者の注意を喚起するため、冗漫をいとはずこゝに記した次第である。

　藝術的空想の奔放な働きを、意識と無意識の共作用であるとなしたのはフォルケルトであつて、島村民藏氏もその『藝術學汎論』に於てこれを肯定し、藝術家と、夢みる人、氣狂ひ、催眠術に罹つた人とを、それの均衡、不均衡による相違であるとなした。この見解は前の象徵詩家たちが無意識を全然認め

なかつたに反し一歩を進めてゐる。然しながら意識の過重評價と反對に無意識の貶下によつて、折角のその說も結局のところ、藝術家の藝術的偉大、他の凡俗と異る大腦皮質の作用を力說するだけのものにとゞまり、今日の我々のいふところは著しく異つたものである。したがつてその象徴の說も、意識心理を技巧的に表出するといふだけの見解にとゞまつてゐる。

夢と幻想とが同じ無意識の觀念群から發するものなることは最早定說であつて、たゞそれの內容が異るのは、睡眠中と覺醒時における無意識と前意識の作用であるとされてゐる。だから無意識においては天才も氣狂ひもない譯であるが、それの表出に於て異るのは、自我の檢閱の作用であり、そこに象徴なるものの可能になる理由がある。卽ち藝術家なるものはその無意識に發した幻想を意識的に組織し、それをそれぞれの表現法則によつて具象化することを體得した人の謂である。從つて我々が一の藝術作品に接して樂しみ得るといふことは、無意識が如何に意識化し、それが藝術的に昇華されて行つたかの過程が、同じやうな經驗をもつ心象を刺戟し、我々の幻想を藝術家が實現して吳れたことに滿足するものなのである。同じ象徴と云つても、その無意識心理の認識如何によつて、その見解は斯くも異つたものにならねばならなくなつたのである。だから芭蕉の句が象徴的であると指摘されたその象徴の語義は、全然歪められたものであつて、それだけの指摘で安心してゐる譯には行かないのである。

所謂象徴詩の迷蒙は、人間に不可能な純粹性を求めてゐるところにあると思ふ。しかし何ゆゑに象徴詩家が湖沼海濱をしば〳〵詠ずるかを考へたならば、また芭蕉を初め古來多くの詩人たちがどのやうに湖沼海濱を母胎とし、女性として象徴したかを考へたならば、その純粹性は脆くも潰え去るべきものなのは明らかである。

藝術は藝術家の白晝夢の具象化であり、神話傳說は民族のそれであることはいふまでもないが、これらを偶然に成立したナンセンスと見るものは、藝術も傳說も語ることは出來ない。神話傳說で白鳥は何を象徴してゐるか、また夢で飛行が何を意味するか、それは夢に對して研究の巨步を進め、また進めつゝあるところの精神分析のみの知るところであり、したがつてしば〳〵偶然の扮裝をしてゐる芭蕉の作品から、偶然ならぬ機制(メカニズム)を發見せんとすることも分析の學徒の義務であると考へられる。そこで私達は所謂象徴の理論から離れて眞理への途を進まねばならないのである。從來のものを捨てゝ他に安心して硏究を進め得る道、それは尨大なる無意識觀念群を肯定する精神分析の道以外にあり得ない。

## 芭蕉の所謂象徴的な作品

以上に述べたやうな譯で、芭蕉の作品で象徴的だと云はれたものも、眞正の象徴ではなく、隱喩的なものや、一斑を描いて全貌を知る底の手法を誤つて象徴となしたものにほかな

らないといへるのである。ではどのやうな作品がそれに該當するかといへば、

伊勢山田

何の木の花とは知らず匂ひかな
淋しさや花のあたりのあすならふ
樫の木の花にかまはぬ姿かな
鶯や竹の子藪に老を啼く
菊の香や奈良には古き佛達

などがまづ擧げられるだらう。「何の木」の句に就ては既に前々號で述べたが、これか西行の「何ごとのおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるゝ」と同じ感情を、極度に壓縮して詠出したもので、何の木の花とも知れぬ淡い嗅感によつて伊勢大廟の神々しい境地を現はさうとしたものである。「あすならふ」の句は、一に「日は花に暮て淋しや」となつてゐるが、これは奈良方面の旅中での作であるが、花のあたりの淋しい翌檜こそ芭蕉そのものゝ姿であつたらうと感じられる。『陸奥衞』には「あすは檜とかや谷の老木の云へる事あり、昨日は夢と過ぎて翌は未だ來らず、生前の樂しみの外に翌は翌はと云ひ暮して終に賢者の誚をうけぬ」といふ前書があるが、この文によると自嘲に近い彼の心境を見ることが出來る。「樫の木」の句は、三井秋風の鳴瀧の別莊での作であつて、古來いろ〳〵八釜しく解釋の論議が闘はされた句であるが、花にかまはぬ樫の木の姿を秋風に對してそれを擬へて挨拶したものであらう。「鶯」の句は、老鶯に假托して自己の老境に入つたことを詠んだものなのに論なく、「菊の香」の句は、奈良の古い佛達を菊の香にとり合せ、何か崇厳な感じを表はさうとしたものらしく、これと同じやうなものに

菊の香や奈良は幾代の男ぶり

といふのがある。これは業平朝臣が奈良の生れであつたのを思ひ起しての作だと云はれてゐるが、同じ時の句だからどちらかを後に推敲して治定したものと考へられる。「幾代の男ぶり」の方は、「佛達」より象徴が完成されてゐず、俳人間の評價も面白くない作とされてゐる。

さて以上の芭蕉の象徴は、象徴といふよりも譬喩的であつて、かゝる表現を彼が採つたのは、俳句の形が小さく、平面描寫的なものはその形に盛りきれず、極度の壓縮を必要としたところに生じたものである。そして彼をしてかゝる手法を擇ばしめたものは、貞徳・談林における言語の浪費であつてそれは恰も象徴詩が言語の濫費への反動として起つたのと同じである。*

*「さきの『高踏派』の詩人は、物の全般を採りて之を示したり。かかるが故に、其詩、幽妙を虧き、人をして宛然自ら創作する如き享樂無からしむ。それ物象を明示するは詩興四分の三を沒却するものなり――（マラルメの所說の上田敏の譯）

蘿の葉の……（何とやらん跡は忘れたり。尾張の人の句なり）

――先師（芭蕉）曰く、發句は斯くの如く、くま〴〵まで云ひ盡

すものにあらずとなり。（『去來抄』）とを對比すれば、彼らの庶幾するところはわかる。

然しながらこれらは形の壓縮から來た感情の凝縮がしぜん間接的表現になつたものにすぎず、我々のいふ象徴でないことはいふまでもないし、又象徴詩家の象徴でもないのである。或る人は彼の此の種の手法を象徴的寫實主義と名づけてゐたが、これは適當な名稱だと思ふ。この象徴的寫實主義は中世的な幽玄の思想と、近代的な寫實の精神との折衷としてあらはれたもので、芭蕉がこのやうな折衷主義的態度を持したことは、いふまでもなく彼が指導者としてその門下に君臨し、且つその多くの門下の意向を顧慮しての用意である。卽ち一概に寫實的にもなれず、また自然詠歎的にもなれず、發句では自然を多く素材としながら、連句では近代的な民庶の求むる情緒を展開し、その手法も象徴にして寫實、寫實にして象徴を採用したのである。所謂芭蕉の象徴とは斯くの如きものであるが、私はこれらを一まづ片づけておいて、眞の意味の象徴、卽ち芭蕉の無意識の心理を次項で見て行くことにする。

## 天（自然・父）の象徴

芭蕉の象徴の中で最初に置かれるものは「天」であらう。この「天」はいふまでもなく彼が主君、父、師、崇拜者を自我にとり入れた理想我の投出であるが、又儒教的な教養による既成概念によるところも多いと思はれる。しかしてこの「天」の思想は、最初儒教的であり、老年になるにしたがつて次第にそれが道教的なものに變つて行つたことは既に述べた。

元來儒教的な「天」は、その唱道者孔子によつても、二つの態度に表現されてゐるやうである。一は他に對してこれは天のなすところであると押しつける場合と、も一つは、天なり命なりと自ら歎息するやうな場合とである。この二つの作用は、孔子自らの社會的位置と、その思想が王族を代表してゐることによつて形成されたものと思はれるが、芭蕉の書いたものによつて推測される「天」も、この二つの方面をもつやうである。

芭蕉は『野ざらし紀行』の旅中、富士川で捨子が泣きながら救助を求めてゐるのに對し「父は汝を悒むにあらじ、母は汝をうとむにあらじ、唯だ是れ天にして汝が性（さが）の拙なきを泣け」と言つて通りすぎた。この時の「天」は前述の前者であり、彼自らが「天」の代表者となつて捨子に臨む態度である。これに反し、『奥の細道』の行脚で、伊達の飯塚（坂）の貧家に泊つた時のこと、蚤蚊にせゝられて眠れず、あまつさへ頭上へ雨が洩りかゝり、持病さへ起つたが、翌朝は氣分がすぐれなかつたにもかゝはらず、馬を借りて出立し「遙かなる行末をかゝへて、斯かる病ひ覺束なしと云へど、羇旅邊土の行脚捨身無上の觀念、道路に死なん是れ天の命なり」と觀念して、氣力を取り直したといふ。こゝでの「天の命」はその後

者に該當する。そこに儒教的天の思想の顯現が見られるのである。

芭蕉の天は、今日我々が考へるやうなそれではなくして、その背後に造物者がゐると觀ての天である。この造物者を彼は造化と名づけてゐる。『笈の小文』で「山野海濱の美景に造化の工(たくみ)を見云々」といひ『奥の細道』の松島のところで「千早ふる神の昔大山祇のなせるにや、造化の天工何れの人か筆を揮ひ詞を盡さん云々」と云つてゐる如く、あらゆるものを司る絶對至上のものらしい。然しながら斯くは云つても、それが自己を離れて別に存在するものではなく、理想自我の別名であることは分析學上最早論のないところであるが、これは一般に認められてゐるものゝ如く、小宮豐隆氏も左のやうに云はれてゐる。

――芭蕉からいへば、造化とは自然を通してそれ自らを顯現する、神的な、人間以上の、存在である。もしくは人間の理想的な存在である。＊(同氏『芭蕉の研究』圏點小宮氏)

＊然しこのあとで小宮氏が「その自然は、人間を脅かし、人間を惱まし、人間を懼れさせ」る自然ではなく「人間を調和する自然であつた。」と云はれてゐることは當らないと思ふ。芭蕉が自然に戰いたことは、先に引用した伊達飯坂の記事によつてもわかる。

造化といふものが芭蕉にとつて斯ういふ意味とすれば、彼が『笈の小文』で「造化にしたがひ造化にかへれとなり」と云つてゐることもわかり、「松のこと松にならへ、竹のことは竹にならへ」(『赤冊子』)といふ意味もわかる。卽ち芭蕉にとつて天は畏怖し且つそれにも拘らず親しき父であり、風景は母であるのであるから、それと自らを同一化し、それの感情を詠はうといふのも極めて當然であるといはねばならぬ。芭蕉が生涯を通じてこの「天」の懲罰におのゝきつゝも、それを甘受せんとする行動をなし、罪障感をあり／＼とその言動にあらはしてゐるのは「天」の畏怖すべき一面の受容であるが、一方に彼はまたこの「天」に歸することを希求し「天」を思慕する心理を抱いてゐる。天を畏怖しつゝもなほこれを思慕する心理は愛憎相反(アンビヴァレンツ)であつて、誰もが父に對して抱いてゐる二面觀と同じであり、精神分析を學ぶものにとつて今更らしく說明を要せぬことであるが、芭蕉が「天」に對してこの二つの心理を持つてゐたことは、彼の書きのこしたものに明らかに見られるが、この父たる「天」に畏怖する心を彼は「さびしをり」と名づけた。『赤冊子』によれば、

冬空のあれになりたる北風
旅の馳走に有明し置

の付句に對して「馳走の字さび有、あれになりたると心のしほりに旅亭のさびを付て寄るなり」といふ評を筆者土芳はしてゐるが、この評は大體芭蕉の評であると見て差支へなく既に前々號で云つたやうに、この句は芭蕉の自我が超自我に脅かされつゝあつた表現なのであり、人間に對して暴威を逞

ましようとする自然（冬空）は、父への畏怖が象徴化されたものにほかならないのである。又

あら海や佐渡に横たふ天の川

に就ても同じことが云へると思ふ。この句は人口にあまねく膾炙されてゐる『奥の細道』中の作であるが、『奥の細道』にはこの句の成つた心境は少しも記してをらず、『銀河序』といふものに

――日既に海に沈みて月ほの暗く、銀河半天にかゝりて星きら〳〵冴えたるに、沖の方より波の音しば〳〵運びて、魂削るが如く、腸ちぎれて漫ろに悲び來れば、草の枕も定まらず、墨の袂何故とは無くて絞るばかりになん侍る。

とあるが、この文は凡そ當時の芦蕉の心境をあらはしてゐるものゝ如くである。海や湖沼が女性を象徴するやうに、この時の銀河を半天にかけた天こそは父そのものゝ象徴にほかならなかつたと同時に、波の音を運んで來る海に於ては彼は母をよびさまして來たのである。だから彼は「魂けづるが如く――墨の袂何ゆゑとはなくしてしぼるばかり」であつたのである。

以上は「天」に對する畏怖の一面であるが、一方芭蕉はこの「天」を親しむべき又思慕すべきものとして象徴してゐる。卽ち、

臍　峠

雲雀より上に休らふ峠かな

の句では、自己の身體が大空に囀る雲雀より上に憩うてゐることに歡喜してゐるのであるが、雲雀とか峠とかは道具にすぎず、彼が天に少しでも近く位置してゐることを歡喜してゐるものであることは、蓋し註するまでもないであらう。こゝでの「天」は前の畏怖すべきそれとは反對に、怡樂の念をもつて天を觀、それを表現してゐるのである。

臍峠（ほぞたふげ）は吉野龍門の附近にあつて、參謀本部の地圖には細峠と出てゐる。然しこの峠が龍在峠と並行してゐるその地形からしてその語源はホド峠の意味であらうと考へられる。（もとは二つの峠の凹地の名だつたのが、高所の名になつたものであらう）柳田國男氏によればホドは卽ち秀處の意で、人體の最も注意すべき所の稱であり、陰所を指すものに外ならずフツ、ホツ、フドなどは皆人體の陰所の形を負つて出來た名であると云はれてゐる。（同氏『地名の研究』）芭蕉はたとへ以上のやうな名の起因を知らなかつたにしても、臍峠とは知つてをり、それが「臍の緒に泣く」それと同じ意味で、彼にとつて明らかに母の象徴であることゝの大地をふみしめて、父である天に近づくことは、彼が父母の愛撫の下に月日を送つた幼時時代再の現であり、また大地である母に自らを同一化し天なる父と交會する象徴でもあつたのである。

同じやうなことは

六月や峯に雲おく嵐山

の句についても云へると思ふ。これは嵯峨の落柿舎での卽目

吟であるが、『赤冊子』には「雲置嵐山」といふ句作骨折たる處なりといへり」とある。この句でも嵐山は母であり、天は父であるが、彼は自らを雲に同化し（雲に自らを同化することとは東西の詩人がしば〳〵試みたところである。）以て母との愛情を象徴化したものである。しかしてこの天は同時に故郷の象徴であり、芭蕉にとつて魂の歸るところであることは、一般の人の無意識心理と異るところはないので、天をうやまひこれを畏怖することはやがて天に自らを歸らしめようといふ理想となる。「造化にしたがひ、造化にかへれとなり」（『笈の小文』）といふ言葉の意味は、かゝる彼の無意識の理想を意識化したものとして注意さるべきであらう。

## 母（池水・湖沼・海濱）の象徴

斯く天に魂の解放するところを見出し、雲に自らを同一化する心理は、やがてその天を自由に翔けるものへの思慕となつてあらはれる。芭蕉の作品には素材としてよく鶴をとりあげてゐるが、この鶴こそは彼にとつて純潔なものゝ象徴であり、それを彼は崇高なものゝ極點にまで高めてゐる。卽ち

石川北鯤生のおとうと山店子、我つれ〴〵なぐさめんとて、芹の飯煮させてふかゞはまで持來る。青泥坊庭の芹にやあらむと其世の侘も今更におぼゆ

我ためか鶴はみのこす芹の飯

こゝで山店を鶴に譬へたのは意識的にはお世辭であらうが、然し芭蕉が鶴を崇高なものとしてゐたことはわかると思ふ。又

梅白しきのふや鶴をぬすまれし

は、三井秋風の鳴瀧の山莊での吟であるが、彼は秋風を林和靖にたとへ、この山莊に鶴が居ないのは昨日あたりぬすまれたのであらうといふ意味を敍したのであるが、こゝでも彼は鶴を氣高いものに表現してゐるのである。その他

汐越や鶴はぎぬれて海涼し

花咲いて七日鶴見る麓かな

繪讃

鶴鳴くや其聲に芭蕉破れぬべし

鶴の巣に嵐の外のさくらかな

五月雨に鶴の足みじかくなれり

僧専吟餞別の詞

鶴の毛の黒き衣や花の雲

等があり、連句では

鶌はたちまち下女にあらはれ　信童

老鶴の隱居樣への御使に　桃青

或は

荒れ〳〵て末は海ゆく野分かな　猿雖

鶴のかしらをあぐる粟の穗　翁

等、其他である。

ところで芭蕉に純潔・崇高なものとして意識された鶴は、無意識では如何なるものであらうか？　これには芭蕉ばかりでなく廣く一般に鶴を以て何が象徴されてゐるかを一應述べなければならない。それにはまづ古今の傳説に、鶴がどのやうなものに表現されてゐるかを見る必要があると思ふ。

白鳥の純潔は處女性を象徴するものであるといふことが定說である。支那の傳説では、月世界の廣寒宮には、素娥が眞白な鸞に乘つて舞ふてゐるといひ、日本の羽衣傳説の支那的表現である田崑崙の物語では、水浴の乙女が崑崙に發見されて白鶴に化して飛び去つてゐる。日本の傳説でも『常陸風土記』には、鹿島郡白鳥郷のところに、伊久米天皇の御時、白鳥天より下つて童女となりて石を積んで池を造るといふ記事が見えるが、皆白鳥が處女の純潔を象徴してゐることを知るに足るものである。

芭蕉においてもこの心理機制は同じであつて、彼が漫然と純潔・崇高と考へてゐるものは處女性のそれであり、母の處女時代への回顧であることは「我が顏の母に似たるもゆかしくて」の付句で斷定することが可能である。

芭蕉が「白」を純潔の象徴としたことは曾て倉橋久雄氏も本誌で云はれたが、私も同感である。それには

石山の石より白し秋の風

水仙や白き障子のともうつり

其匂ひ桃より白し水仙花

白菊の目に立てゝみる塵もなし

その他がある。水仙、菊、梅、さては霜、雪をまで彼は純潔無垢なものに見てゐる。しかし倉橋久雄氏も既に本誌上で云はれてゐるやうに、芭蕉にとつて白は死の象徴でもあつて、

いざさらば雪見に轉ぶところ迄

といふ句は、純潔無垢なる雪に埋もれて轉ぶ（卽ち死ぬ）といふ彼の願望をあらはしてゐる。この場合「いざさらば」が留別を意味してゐることはいふまでもなからう。これを要約すれば、純潔の極みは死であるといふ彼の無意識心理の痕跡を辿ることが出來、又その贖罪感の痕跡をも見出すことが出來る。大阪の花屋での彼の臨終のさまを思ひ起す時、彼が常々死の願望をもつてゐたことがわかり、またその願望がこの句の成つたもとであることの理解も可能である。そして斯く迄に死を願望したといふことが彼の罪障感によることはいふの必要を見ないであらう。

死の願望はこれだけにとゞまらない。芭蕉には投身願望があつたことが既に分析的に明らかにされ、大槻氏その他によつて指摘されてゐる。卽ち

古池や蛙とびこむ水の音

清瀧や浪にちり込む青松葉

鶯の笠落したる椿かな

落ちざまに水こぼしたり花椿

西　河

ほろ〳〵と山吹ちるか瀧の音
四方より花吹き入れて鳰の湖

等がそれである。これらが偶然とは考へられない程多いのは、彼の無意識心理を示してあまりがある。この種の句の蛙、青松葉、椿、花、山吹は彼自らがこれらのものに同一化し、これらをして自らの行爲を代行せしめたものにほかならぬ。

又一方からこの種の句を見る時、明らかにこれらは飛行を意味してゐるもので、飛行が性行爲の象徴であることは、精神分析上あまねく認められてゐるが、また性行爲が同時に死へと繫がるものであると云ふても、分析を學ぶものは驚きもしないであらう。卽ち芭蕉がこゝに用ゐてゐる古池や鳰の湖や淸瀧川やは女性一般の象徴であり、本源的には母の懷へ歸ること、死、再生願望等を示すものでなくてはならない。

芭蕉が胎內復歸の願望をもつてゐたことは、『奧の細道』の行脚中、しば〳〵岩窟を訪ふこと（日光裏見の瀧、佛頂山居の跡、黑塚の岩屋其他）湖沼海濱をさすらふこと（かげ沼、あさか沼、松島、象潟その他）によつて知ることが出來る。

——二十餘丁を登つて瀧あり。岩洞の頂上より飛流して、百尺千岩の碧潭に落ちたり。岩窟に身をひそめ入つて、瀧の裏よりみれば、裏見の瀧と申し傳へはべる

暫らくは瀧に籠るや夏の初

——檜皮の宿をはなれて安積山あり。道より近し。このあたり沼多し。かつみ刈るころもやゝ近うなれば、いづれの草を花かつみとは云ふぞと人々に尋ね侍れども、更に知る人なし。沼を尋ね人に問ひ、かつみ〳〵と尋ねありきて、日は山の端にかゝりぬ——

前者に瀧（飛行）とコムプレクスされた窟の胎內空想と、後者に「あさか山影さへ見ゆる山の井の淺くは人を思ふものかは」と詠んで投身した采女の美しい傳說と、そこに生え出づる花かつみとがコムプレクスされ、その傳說からしてまた母や壽貞の華やかなりし世への思慕が見られるのである。＊胎內空想は彼にとつて死であり、永遠の母たる大地に歸すべき願望であつたことは、「造化にしたがひ、造化にかへれ」といふ言葉のうちにそれが證せられる。彼が死を決して恐れなかつたのみならず、「首途に死なんこれ天命なり」の覺悟を以て、むしろ死を願望する如き言動をしてゐるのも、それによつて罪障感の終焉と大地復歸の願望とが果されるからである。

＊前々號拙稿及び前號參照

風景がしば〳〵親熟感を起すことは分析學では既に定說となつてゐる。先に述べたやうに、芭蕉が風景を求めて漂泊の生活をするやうになつたことは母の死と密接な關係があり、このことは芭蕉の漂泊生活の因て起るところを明らかにしてゐるものである。されば彼はその到るところで風景への異常なる關心を示す文字をつらねてゐる。

そも〳〵ことふりたれど、松島は扶桑第一の好風にして

凡そ洞庭西湖を恥ぢず、東南より海を入れて、江の中三里、浙江の潮をたゝふ。島々の數をつくして、欹つものは天を指し、ふすものは波に匍匐ふ。あるは二重にかさなり、三重にたゝみて、左にわかれ、右につらなる。負へるあり、抱けるあり、兒孫愛する如く。松の綠こまやかに、枝葉汐風に吹きたはめて、屈曲おのづから撓めたるが如し。其氣色窅然として美人の顏を粧ふ。千里ふる神のむかし大山づみのなせるにや、造化天工、いづれの人か筆をふるひ詞をつくさむ。(『奧の細道』)

この好風景の中に在つて彼が「江上に歸りて宿を求むれば窓を開き二階をつくりて、風雲の中に旅寢するこそあやしきまで妙なる心地はせらるれ――予は口をとぢて眠らんとしていねられず」といふやうな狀態だつたこともさこそと肯かれる。かゝる異常なる亢奮のうちに彼は松島をかねて心にかけつゝ、そこで一句をも得ることが出來なかつたのであるが、然しこゝに連らねられた文字によつて、彼の此の心理を見ることは容易であらう。卽ちこゝで島々を兒孫にたとへ、風光によつて美人を想起してゐることは、決して單なる思ひつきではなかつたのである。

同じやうなことは象潟のところにも見られる。

江山水陸風光數を盡して、今象潟に方寸を責む。酒田の湊より東北の方、山を越え、磯を傳ひ、いさごをふみて其間十里、日影やゝかたぶく頃、汐風眞砂を吹き上げ、雨朦朧として鳥海の山にかくる。闇中に模索して、雨も亦奇なりとせば、雨後の晴色又賴もしと、蜑の苫屋に膝を容れて雨の晴を待つ。其朝天能く霽て、朝日花やかにさし出づる程に、象潟に舟を浮ぶ。――此寺（干滿珠寺）の方丈に坐して簾を捲けば、風光一眼に盡きて、南に鳥海天をさゝへ、其影うつりて江にあり、西はむや／＼の關路をかぎり、東に堤をきづきて、秋田にかよふ道遙に、海北にかまへて、浪打入るゝ處を汐こしと云ふ。江の縱橫一里ばかり俤松島にかよひて、又異り、松島は笑ふが如く、象潟はうらむが如し。寂しさに悲しみを加へて、地勢魂をなやますに似たり。

象潟や雨に西施がねぶの花

汐越や鶴はぎぬれて海涼し

こゝでも芭蕉は象潟の風光を冷徹に見る前に、その感激に沒頭してしまつてゐることは松島の場合と同じである。＊芭蕉がこゝで用ゐた「雨も亦奇なり」とか「雨後の晴色もまた賴もし」とかは、蘇東坡の「西湖」の詩の

水光瀲灔晴偏妙　山色朦朧雨亦奇

若把西湖比西子　淡粧濃抹雨相宜

から出てをり「西施のねぶの花」といふ句もそれから出てゐるのであるが、さういふ典據を抽出してみる時、芭蕉はたゞ徒らに風光に感激してゐるばかりであることがわかり、その亢奮はそれらの風光に母の俤を見てゐるからである。さう

して彼はその罪障感や母に對する思慕からして、この風光を冷徹に見るに堪へなかつたものであらう。「地勢魂をなやます」とはまさに僞らざる告白であつたといはねばならず、この魂をなやますものこそ、此の行脚の初めに彼が「道祖神のまねき」とか「神の物に憑き」とか記してゐるところのものであると見られる。そこでこゝでの前掲「鶴はぎ濡れて」の句の「鶴」は先にも述べたやうに處女性の象徵であり、彼が處女時代の母を求めてゐるのであるといふことが確められその鶴の脛をうつ潮に彼自らが同一化してゐることが分る。

*こゝの二句は、共に固有名詞を初五に置いて趣を呼び出してゐるのであるが、共に燃燒の足りない句である。芭蕉が如何に地勢に惱まされてゐたかゞわかる。

芭蕉が母方の桃地姓の「桃」に執着し、華桃園とか桃青とか、乃至はその門下に桃の字を與へたことは前號に述べたが、斯うした一聯の彼の行動には、母への思慕が濃厚に感じられるのであり、鄉土史家菊山氏が彼の漂泊生活を「母の愛」に因ると云はれたのに贊成せざるを得ない者である。「我が顏の母に似たる」を床しと感じた芭蕉には、母と自らとを一つのものとして、それらの愛撫に身を委した時代への定着が見られるのであり、彼の風光の執着は、この心理を理解せずしては不可解なものとなるのである。

また一方これらの文を通じて感じられることは、芭蕉の被愛撫心理である。松島で彼は島々を兒孫愛するが如しといひ、象潟では、母の象徵である鶴に戲れる海波を詠じてゐる等にそれが見られるが、これらは幼兒的な一聯の句と共に彼の幼兒期への願望を見るに足るものであり、同時にマゾヒストとして、女性にも掀弄せられることを喜ぶ性質であつたことを推知することが出來、壽貞が彼より年上の女性であつたか、又は母として彼に臨む強い性格であつたかゞ問題にされなければならない。彼が男性として主動的に、また時として女性らしく受動的にその性愛を轉變せしめたこと(前號參照)も、性格上から來るものと認められるのであるが、その動機は以上の分析によつてほゞ明らかになつたことゝ思ふ。

次に芭蕉は梅をも女性の象徵としてゐる。梅が一般の無意識に女性を象徵するものであることは、既に古く支那の羅浮の夢の傳說によつて明らかである。卽ち隋の趙師雄なる人が松林酒肆の旁舍で淡粧素服の美人に會ひ、共に酒家に赴いて飲酒し、師雄は醉うて臥したが、覺めてみれば美人はなく自らは大梅樹下に在つたといふのであるが、以て古への人が梅をどのやうに見てゐたかゞわかる。芭蕉の梅を詠んだ句は少くないのであるが、今はその女性に關するものゝみを擧げてみるならば

梅 柳 さ ぞ 若 衆 かな女かな

などは誰にでもわかるものであるが、それだけ露骨で象徵に入つてゐない。

暖簾の奥も の 床 し 北 の 梅

誰でも知つてゐる園女に初めて會つた時の句で、梅が園女を譬へたものなることは云ふまでもない。が、この句も眞の象徴に入つてゐるとは考へられない。此のやうに誰にでも肯けるものは表現が露骨であるからで、それだけ象徴には遠いものが多いのである。そこで

　梅が香にのつと日の出る山路かな

といふ有名な句について見て見よう。前の二句によつて梅が女性を象徴してゐるといふ假定が成立すれば、この句の梅も女性（母）の象徴であり、山路は多く母の懷ろ（胎內空想）を象徴することが多いから（この多くの事例は大槻憲二氏の「デジャギウの藝術『精神分析雜稿』にある）この句は芭蕉のデジャギウの表現と見て差支へなく、梅は母、そして女性の象徴であることが確められるのである。卽ち梅が香に日がうらゝかにのぼりつゝある山路の情景は表であつて、胎內空想がその裏なのであるか、この裏と表の表現は譬喩とか諷刺とかいふ意識的なものではなく、意識的には芭蕉は山路の情景を敍したものであらうが、たま〳〵それが無意識では胎內空想の表現となつたものである。なほこれらの外に芭蕉には

　下戸をにくめる雪の夜の亭　　荷兮
　早咲の梅を我身にたとへたり　　翁

などの作品もあり、この付合では彼は梅を自らの象徴としてゐるのであるが、これは彼の兩面的性愛の發露であらうけれども、極めて稀な例である。

　ところで梅の言語的意義はどうであらうか、梅は一般には支那音の梅（メー）に「ウ」を附したものと見られてゐるが、私考によれば、梅はその實を多く生ずるを以ておのづから母、女性を象徴してゐるものと思へるのである。曾て大槻憲二氏は『中央演劇』所揭の拙稿「貝と人生」に對する評言の中で、海が英語の子宮（ウーム）と同じであり、海の漢字が三水に毎で母といふ字が入つてゐるのと何か關係があるのではないかと云はれてゐるが、（『精神分析』十三年一月號）これが關係ありとすれば、梅は木へんに毎で、母といふ字が組み合はしてあり、發音もウミとウメであつて「生み」と「生め」との差違こそあれ共に出產を意味するものであるから、梅が母の、そして一般女性の象徴であつたことは昔からであり、芭蕉の心內にも、古來の無意識象徴が蘇つて來て、しぜんにそれを以て母を、而して女性一般を象徴することになつたものと考へて差支へないであらう。芭蕉が桃靑と號したことを各務支考は『十論爲辨抄』で桃は桃地のそれであり、靑は梅子熟せざるの意を以て名づけたのであると云つてゐるが、これは桃と梅をとりちがへた說であると一般から一蹴されてゐる。しかしよく考へてみると、支考が云つたこの言葉も、やはり同じ無意識が芭蕉の靑の色彩を好んだことゝ、女性象徴の梅とをコンプレクスさせたもので、斯う考へると偶然とも見える言葉の中にも、

――（八〇頁下段へ續く）――

# 意識の誕生（ロレンス）

The Birth of Consciousness —D. H. Lawrence— (1923)

岩倉具榮譯

「意識とは何であるか」とか「知識とは何であるか」とかを定義しようと試みるのは無用である。定義しなくして分りきつてゐることをわざ〳〵心配する者はなからう。併し吾々がどうしても知らねばならぬことで、而もなか〳〵分らぬことがある。それは凡ゆる機能的生物の內部に保全せられ、而も進歩的に存在してゐる原始的意識の性質如何と云ふことである。頭腦は理想的意識の座である。理想的意識は意識の死滅する端、人造絹絲に過ぎない。意識の牙城は大腦にあるのではない。意識は吾々の生命、全生命の汁液である。

吾々はヒトデやイラクサを見てそれ自身に特有な固有の意識があるやうに思はざるを得ない。果してさうならば、我々は直ちに頭腦の理念的城廓からぬけ出して汁液意識の流れに飛び込むことになる。併し一足とびに餘りに遠くまで飛んで行くのは止めよう。吾々は無脊椎動物と原形質にまで下つて意識の深淵を單に一とびすることは控へよう。用心して人間の阪を這ひ下らう。或ひは又むしろ、人間意識のカルバリー山麓近くの何處からか出發して見よう。子宮內の幼兒を考へよう。胎兒には意識があるか。胎兒は獨立的の進歩的の自己發展を營み行く以上、意識があるに違ひない。この意識は理念的ではあるわけはなく、大腦的であり得ないことは明らかだ。何故なら、それは如何なる腦の形跡も生じない前から存在してゐるからだ。而も、それはそれ自身の單一の目的と進歩とを持つ、完全な個々の意識である。神經さへもがまだ形成されてゐないのに、それは何處に中樞を得ち、何處で作用してゐるのか。現に、それはしつかり又しつつこく作用してゐるではないか。巧智な蜘蛛の様に、それ自身の運動の爲の網として神經と頭腦をさへつむぐのではないか。

最初の人間意識をつむぐ蜘蛛は何であるか――といふよりも、この意識は何處に存在し何處でつむぐのか、その中心は何處であるか。小さな胎兒にさへ意識の中心があるに違ひな

い以上、それは極く初めからあつたに違ひない。卵細胞の最初の融合核にあつたに違ひない。そして若しもこの至上の核を觀察することが出來るやうなら、吾々は確かに、個人の長い、計り知れない、凡ゆる歴史を通じてそれが中心にして至上、生ける無意識の源泉と手掛りとして、つまり起源として今尙殘つてゐるのを認めるに違ひない。姙娠の最初の瞬間に於る如く、個人の生命の終りに至る迄、最初の核は創造產出の中心、意識と有機的發展との兩方の急所たることに變りはないのである。

では、發達した胎兒の何處に吾々はこの創造=產出的急所を求めるであらうか。それは頭腦又は心臟にあると吾々は豫想するであらうか。吾々自身の主觀的知識は、——さうしてこれは科學の證明し得るところであるが——その急所がどうも胎內にゐる兒の臍の下に存するらしいことを吾々に告げる。受胎せられた卵細胞の最初の核そのものである至上の中心は確に、凡ゆる胎生動物の臍の下に存する。その處で、それは初めから、外部に活動してゐる宇宙に對して神祕的な關係を保ちつゝ存在してゐる。その處でそれは、完全に兩親の身體と關聯しつゝ存在してゐる。その處でそれは、それ自身獨特の獨立性を保ちつゝ活動し、創造的血液の凡ての流れをそれ自身に引寄せ、そして、兩親の血流の間に紡ぎ營み、それ自らの身的擴充を徐々に創造し、體現して行くのである。あらゆる時に胎兒の生命の急所と偉大な外部宇宙との間には完全な連絡があり、その連絡に基き占星家は、その學問を打立てたのであつた。それは、心的意識が凡ゆる知識を自らの中に僭取する以前であつた。

胎兒は個性(パーソナリティー)としての意識は持つてゐない。併しそれなら、その起源に於て理念的でないなら、個性(パーソナリティー)とは何であるか。胎兒は、併し乍ら根本的には、個(インディヴィヂュアリティー)として意識がある。活動的の急所、核の中心からして、胎兒はその活動に於て單獨的であり、それ自身として完全なものである。この中心に於てそれは、よつて以て兩者が變形される周圍の宇宙から完全にそれ自身を區別する。この中心から個性全體が生じ、そしてこの中心の上に宇宙全體が、種々な關係に依つて接木せられてゐる。何故なら、法則と物質とから成る固定した宇宙、全コスモスさへ、個々の生物の創造的生命の急所、中心に座をとり更新を見出すのでなければ、磨滅し分散するであらう。

そしてこの中心は最初の受胎せられた核に絕對的の位置を持つてゐる以上、それは發達した胎兒と、成熟した人間に於いてもやはり位置してゐるに違ひない。そして生れない幼兒に於てはこの位置はどこであらうか。燃える樣な臍の口の下である。成熟した人間では何處にあらうか。矢張臍の奥である。至上の本能感情の中心と同じく、それは神經組織の太陽叢內に存在する。

吾々は別に學者らしい術語を使はうとは思はない。併し凡ゆる哺乳動物に於て至上の、構成的な意識及び活動の中心は腹の中央前部、臍の下、太陽叢と呼ばれる大きな神經組織の中心に存在すると主張すれば、正しい考へを持つてゐる科學者ならば、これを自明の事と認めるであらう。どうして吾々は知つてゐるのか。吾々は、それを感じるのである。宛も飢や愛や憎しみを感ずる如くに感じるのである。一度吾々が自分らの何であるかを知るならば、科學は進んで吾々の知識を分析し、その眞理又はその否眞理を指示し得るのである。

吾々の總ては皆、生れたばかりの赤兒、或ひは少くともまだ小さい幼兒を取扱ふことの何であるかを知つてゐる。吾々は圓い小さな腹、圓い柔かな小さい頭に手をおくことが何であるかを知つてゐる。吾々は何處に生命があり、何處に髓質があるかを知つてゐる。吾々は目の見えない犬の兒、目の見えない小猫が這つてゐるのを見たのである。彼等は奇妙な小さい聲で鳴く。その聲は何處から來るのか。それは心の叫びであらうか。腹話者に於る如く、それは胃から出て來る。そこに目ざめてゐる中心がある。かくも奇妙に何とも名狀し難い様に動きつゝ、大きな腹の中心、人間の前意識心に直接働きかける之等幼き者の叫びの中には、最初の意識、聞える無意識の語るものがある。

そこの臍の所で、最初の破裂、最初の勃發が繼續的に起る。そこに開口の傷痕がある。個としての吾々の苦痛にして同時に豪華なる傷痕がある。こゝに宇宙に於る吾々の孤立の記號吾々の自由な、完全な單獨としての傷痕と封印がある。こゝから臍の蓮花が咲き出づる。こゝから臍の神祕的觀照が生ずる。下部の最初の心の中に轉落するものは上部の心である。意識に於いて最後のものが最初のものに戻り行くのである。

母はその事を哲學者よりもよく知つてゐる。吾が兒を遂にそれ自身の獨立な、自由な存在として分離させた破裂を、母は知つてゐる。彼女は臍と云ふ奇妙な、感じ易いばらの花を知つてゐる。如何にそれが意識にふるへるか、凡ゆるその苦しみ、古い關係への慾求、單なる有機的の獨立と個性の自由に對する、凡ゆるその悦びと、欣喜雀躍とを、彼女は知つてゐる。

新しく生れた子供の力強い、心的中心は、共感的な組織を持つ偉大なる太陽叢である。この中心から子供は再び母に引寄せられる。新しい傷を癒し、元のやうに一つになりたいと叫ぶのである。この中心に導かれて、盲目的に又豫期するものゝ如く、小さい口は母の乳房を求めて行く目の見えない、心を持たない小さな口は、どうして乳房を見出すことが出來ようか。併しそれは眼も心も要らないのである。腹の偉大なる最初の心から、殆ど磁石の推進力の様な先在の知慧を以てそれは眞直に動いて行く、宛かもその直接的支配の中心が太陽叢にある生々した磁力によつてその小さい口が母の胸に引き寄せられ推し進められたかの様に――。

多少とも、この胸を求めるといふことは兩親の身體との元の聯合を、回復させる。それは元の一致、元の有機的連結への不思議な沈降歸着――生前狀態への回復である。併し同時にそれは新しい個性の食料を吸收する深い、貪慾な滿足である。それは新しい、自發的な力の行使に於る、深い滿足である。子供は今や自分自身の個的中心から離れて行動し、而も近くの宇宙、兩親の身體を支配せんと努める。

それ故溫い生命の流れは再び兩親から、分離された子供の痛んでゐる腹へ流れ込む。生命は之等の破裂、分離、激變なくしては進步することが出來ない。苦痛は生きた現實で、單なる死せる現實ではない。何故吾々は生命の苦痛に對して勇氣を持つてゐないのか。若しも吾々が古い心理說から離れることが出來たら、若しも吾々が吾々自身の無意識的の智慧を知ることが出來たら、吾々はあり餘る勇氣を持つやうになるであらう。吾々は心的に餘りに敎化され過ぎてゐる。

最初の意識の大きな磁力的又は力學的な中心は、太陽叢に力强く作用する。こゝで子供は凡ゆる知識以上に知る。子供は目を以ては見ない、子供は知覺することは出來ない。況んや考慮することは出來ない。何物も子供は理解することは出來ない。目は不思議な、原形質的、未成の暗黑である。而も腹から子供は知る。吾々を驚かし厭な感じのする直接的知識を以て知る。母も亦、腹の內部から子供を知る――その頭によつては決して、決して分らないやうなことを知る。そこには何等の思想も、何等の辯舌もなく、只直接的な、腹部のゴボ〱クー〱云ふ音があるばかりである。母の太陽叢の情熱的な神經中心から直接的な、何とも云へない交流と交通とが出て來る。それは子供の腹の動悸打つ神經中樞と接觸する單なる流出である。知識、母子間に交換された何とも云ひ難い知識、それは表現され得る前に物質化により永遠性を與へられると薄弱にならざるを得ない。

それは母と子の各々の偉大な神經中樞間に巡回して流れる美しい、溫和な、流動する、創造的の電氣の樣なものである。宇宙の電氣は分離する力である。併しこの美しい兩極化せる活力は創造的である。それは二個の今や分離された存在中の情熱的無意識の兩極の間に循環的に流れて行く。それは最初の基礎的な意識を夫々の內に建設する。その意識は、凡ゆる吾々の意識の聖い、萬物を含む主流である。

併し之が凡てゞはない。母と子の間の流れは凡てが甘味な一致ではない。そこには同時に、絕えず擴大され行く間隙がある。驚くべき豐かな交流があると同時に、絕えず增加する破裂がある。吾々は全人生を通じて之等が愛と創造の二つの同時的活動であることを知つてゐたいものである。何故ならその目的、その決勝點は、各單獨の、それ自身獨自の個性の完成であるが、それは愛する者同志の間の完全な調和(御互の最後の明白な單獨性に基く調和)がなければ成就しない。その一方の單獨性は他方の對極的な單獨性によつて一方の中

に平均を得るのである。

子供はさうである。母とのその驚くべき合致に於て子供は同時に單獨の、分離された、獨立の存在に遊離する。合致といふ一つの過程は、純粹の分離といふ他の過程なくしては進行することが出來ない。初めの內は子供は古い源に固着してゐる。ねばりつき、そして附着する。統一、或ひは少くとも合致の、共感中樞のみが目ざめて居る様に思はれる。子供は分離といふ不思議な孤立感を以て嘆き、古い結合を求めて嘆く。喜びと平和を以て、子供は殆ど子宮に歸るかの如く、乳房に歸る。

併し歸りきりになるわけではない。乳房を吸ふことに於てさへ子供は新しい自己と力とを見出す。それ自身の新しい、獨立の力を。子供は急に自らを引込めて待つてゐる。子供は何事かを聞いたのであらうか。否、併しもう一つの中心がパッと目ざめたのである。子供は固くなつて引込む。何であらう、風だらうか。胃が痛むのか。全然さうではない。絕叫のあるものに耳を傾けて御覽なさい、目が見ることが出來るよりも深いものを、自我の最初の叫びを、耳は聞くことが出來る。確立された孤立の叫びを聞くことが出來る。結合からの叛逆、合一からの叛逆の叫びを聞くことが出來る。そこには母への烈しい反對の動き、凡ゆるものに反對する動きがある。そこには、凡ゆるものに對する強情な、惡質の拒否、颶風の様な氣質がある。それから何があるであらうか。子宮が意味する様な此の如き恐ろしい一致の後では、怒りと分離の嵐が起るのは不思議ではない。子供は古い子宮から離れて叫び、盲目的な發作に依つて自由の中へ、分離された、否定的な獨立の中へと已れを蹴込んで行く。

この様にある以上は、爭ひがなければならない。何故なら獨立がなければならないからだ。かくて母も亦怒る。多分子供が外部のものに惡い感じを與へる程ではなくても、子供は母の氣にさわる。幼兒の叫びほどに、この結合に對する盲目的な拒否の叫びほど直接に、偉大な基礎的神經中樞に作用するものはない。それは激怒そのものゝ摩擦である。若し空氣が充電し過ぎたら萬人がその影響を受けるが丁度その様に、凡ゆる人々は感電してゐる。恐らく母は初めから諒解してゐるために、或ひは彼女は子供と直接同極にあるために感動することがより少いのだらう。而も、彼女も亦、ある程度までは怒るに違ひないことは已むを得ない。

周圍の宇宙との粘着から離れんとすることは新しい有機體にとつては盲目的な、殆ど機械的な努力である。子供は直接母にも向つて行く。併し子供は凡ゆる人に影響して行く。相互感應の大きな中心は、狂的な、ある時には堪え難い摩擦を以て振動する。如何なる中心であらうか。今度は偉大な共感叢ではなくて、それと相互感應する自動的神經節である。脊髓組織の偉大な神經節、腰部神經節は、一人の人間の至上的心理活動の太陽叢に消極的極性を與へる。子供がむつかつて泣

き叫ぶ時には、特に、摩擦的な拒絶の波を腰部神經節から烈しく送り出す。小さい背中は一度固くなると驚くべき力を持つてゐる。腰部神經節に於て無意識は今や破裂、分離の活動となつて恐ろしい勢で振動する。極性を與へられた母と子は、初めに影響し合ふ。屢々母は子供を我物と思つて大いに確信してゐるので、殆ど動かされない。併し子供はあくまで續けて、遂に摩擦的感應が母の中に起き、怒りが生じ、稻妻の樣なひらめき、破裂が起るまでやめない。その時、嵐は消える。分離といふ純粋な行動が結果する。各自はもつともつと完成され、分離され、それ自身の單獨の個性へと純化して行く。

さて、このやうにして、幼兒の至上の意識に於る二重性は生じ來る。温いばら色の腹面では合致の喜びに北曾笑み、背面の方では小さくこわばつてゐる。子供はあと足を蹴立てゝ獨立へと進む。自分の脊骨をかたくして秘かな孤立した、犯し難い存在の力を護る。今や子供は侵害を許さない。今や彼は新しい誇り、新しい自信の中に目ざめる。敵對的自由の感覺が起きて來る。くすぶつた古い執着は無慈悲に融かされてしまふ。かくて、腰部神經節から、火の樣な性質の幼兒はその新しい盲目的な意志を確立する。

そして子供が戰ふにつれて母も戰ふ。ある時は母はその强情な子供を自分の下に留めておかうとして戰ひ、また或る時は牝馬がその餘りに赤ん坊じみた仔馬を蹴飛ばす樣に、子供を押出してやらうとして戰ふ。それは行動へと閃めき出づる無意識の大きな自發的中心である。母の深い腰部神經節からそれに呼應する子供の新しく眼ざめた中心へとひらめき通る光は早い消極的な流れとなつて進み、母子双方を純粋の個性に分立せしめる。力がその反對極からの呼應を受けてゐる間は凡てが具合いゝ。力がひらめいても呼應がない時、荒廢がある。反撥の偉大な中心が抑へられ弱くなつてゐる母は、たとひ授乳する時でも、その背中が何となく賴りないものである。若し共感的の合致が建設されてゐるばかりであつたら、どんなに子供はうんざりする事であらう。

人生のそも〳〵の出發から、動力的な意識の極性はさう云ふ風なのだ！　二つの意識の流れの直接の流れと閃きとは、個々の人間を生み出す作用をする。甘美なる混合、相反の鋭い撃突。そしてこの極性なくしては、直接的、自發的、正直な交合の二重の環流なくしては、創造的發展の可能性がない。之を離れては人生の希望もない。愛と怒り、固執と反撥、攝取と排泄、これ等二つの間に環流する至上の無意識の脈搏、「理想的」行爲を發明して何になるか。無意識の道は如何にして定めるか。最良の考へを以てしても、吾々と關係ある者の生命の流れを致命的に亂すことなくしては、吾々自身の無意識の道を定めるために進むことが出來ないことを、今や吾々は認めざるを得ないではないか。若し一極の流れを亂せば他の極が亂されざるを得ない。こゝに人生に對する新しい道德的展望がある。（完）――（七五頁參照）――

時評

# ユダヤ禍論と黄禍論・追補

大槻憲二

## 一、齋藤茂吉氏獨墺比較論の批判

齋藤茂吉氏は昨年十二月中東朝「槍騎兵」欄で『獨的と墺的』の題下に、次のやうに論じてゐた。「今回の日獨文化協定によつて、日本帝國の隅々までドイツ文化といふことが、念頭に置かれるやうになつたとおもふが、同系統の言葉でもドイツとオースタリーとでは文化の傾向が幾分づつ違つてゐた。例へば、私の身に近い例で云ふと、神經學、腦髓病理學の方面でも、ドイツ、ミユンヘンのニッスル學派と、オースタリー、ウインのオウベルシユタイネル學派とでは各々その特色が瞭然としてゐた。ミユンヘン學派は、問題が部分的でも觀察も記載も細かく論文がくどく長い。ウイン學派は問題が大觀的でも、記載が簡潔で從つて論文が短い。これは載せる雜誌の經濟的關係のみに依ると云ふわけではなかつた。」

つまり同じくドイツ語に依る文化とは云へ、そこに地理的環境に依つて、その文化の內容に實質上の變化があると云ふことを述べてゐるのである、これは申すまでもないことで、同じ事はまた、英米兩國の文化關係に就いても云へるであらう。併し一度見地を廣げ、獨墺文化とフランス又はイタリー文化と比較して見ると、獨墺文化には、同じドイツ語を用ゐてゐるだけに多分の共通點を發見し得るであらうと思ふ。オースタリー文化はやゝフランス文化風なところを多分に持つ

---

ABHUB

### アブフウブ

他の學問がアブフウブ（屑）として棄てたものゝ中から、分析は眞理の黃金を探し出す。

---

### 妄想の意味

不老泉院主

精神病者の妄想の一種に「化身妄想」と名付けられるものがある。これは自分の身體全部或は一部が肉體以外の他のものに、木、石、土などに、變つたと考へるのを云ふ。

私はまださう云ふ妄想を有する患者を實際に分析處置した經驗はないが、この妄想は我等にギリシヤ神話中のアポロに追はれたダフネの話を想起せしめる。ダフネは河神ペニウスの娘で頗る美女であつた。アポロは彼女を見染めてこれを追蒐け、今少しで捕へると云ふ瞬間にダフネは木に變つてしまつたと云ふ。この話はイタリー十七世紀の彫刻家ヂォ

てゐるとは云へ、ドイツ文化とフランス文化との何れに近いかと云へば、勿論、ドイツ文化の方に近いと云へるであらうと思ふ。

なほ齋藤氏は續けてかく論じてゐる。「フロイドの精神分析學はパリのシャルコーに淵源するけれども、つまりはオーストリーのウインに根を据えるべき運命の學說であつた。卽ちこの學說は同じ言葉であるドイツの學界に迎へられずに、瑞西のユンク、ブロイレルにあたりを經て遠く米國へ飛んだものである。」云々と。

フロイドの精神分析學がオーストリー的でありウイン的であると云ふことは、（好意的にせよ、惡意的にせよ）夙に云はれたことで、現にフロイドはその著書の中でこの批評に對して自分の感想を述べてゐるほどである。これがもし齋藤氏の云ふやうにドイツに迎へられなかつたと假定して、それはドイツ的でなかつたためであるとのみは如何にして結論し得るのであるか。それではそれが瑞西や米國に迎へられたのは如何にして說明するのか。これは多分、齋藤氏がドイツを崇拜し、米國を輕蔑してゐると云ふ無意識感情と精神分析學への反感とがこのやうな結論を容易に導き出させたのだと云ふ、分析的な推定も可能でないとは云へない。或はドイツ人が文化的に衰頹期に入つたので（私は實はさう考へてゐるのだが）新興科學への人材が輩出しなかつたためであると云ふ結論だとて必ずしも不可能であると云ふ理由は見出し得ない。現に、ウインに於ける多士濟々は云はないにしても、ハンガリーにはフェレンチー、クラインの如き分析學界の巨星が出で、英國にはジョーンズ、グラヴァー出で、フランスにはアランディ、ラフォルグ、ボナパルト出で、米國にはホワイト、ブリル、アレキサンダ等が出てゐるではないか。米國に於いて特に盛んであると云ふべき理由を發見し得ないが、もしさうだとするならば、米國が比較的傳統の重壓少く文化的に自由な國であるから氣輕に明朗にこの新興科學を受容れたためであると云ふ考へ方だとて決して不自

グンニ・ロレンツォ・ベルニニの有名な作（ローマにあり）があるので、私はよく記憶してゐる。その彫刻はダフネが今や立樹に變化しようとする瞬間を寫し、脚の方は既に樹幹となり、手の先や髮の端は葉となりつゝあり、背後にせまつたアポロは失望と驚駭のあまりに一旦ダフネを抑へた手を離してたぢろひでゐるところが寫されてある。

このダフネが立樹への變化は彼女が少女らしい恐怖のあまりの逃避願望を意味してゐることは何人にも容易に理解出來る。精神病者の化身妄想にもかう云ふ機制のものが少くないと思はれるが、その機制は必ずしもその種のものには限るまい。そこには罪障感に基くものや、何かその部分に於ける感覺の記憶の抑壓に基くものや種々であらうと思ふ。また

### 獸化妄想

と名付けられるものもある。これは自分が犬や狐などの獸畜になつたと考へる妄想である。これも全身がさうなつたと考へるものや一部分がさうなつたと考へるものやいろ〳〵種別あるべきは化身妄想の場合と同じであらう。かう云ふ妄想の話は、我々にギリシャ神話中のサチールなどを聯想させるであらう。

然ではない。

## 二、我國現下の分析學界

わが國はどうかと云ふと、この國の官學派精神病學界はドイツのクラフト・エーピングの傳統で固まつてゐて、新たな學風を容れる餘地がなく、今やその古い殼の中で中味は漸次にくさりつゝあると云ふのが我等民間學徒の眼に映ずる正直な姿である。私の如きも官學界に生れ育ち、官學的職場に祿を食んでゐたら勿論精神分析學などは唱へない。非常に感心してゐても感心したとは云はないだらう。それは凡そ祿を給せられてゐる以上、自分で自分の首を絞めるやうな馬鹿げた言說を吐かない方が常識健全と申すべきで、それはひとり精神病學界についてのみ云ふべきではなく、社會學や經濟學の方面に就いてだつて同じことは云へるのであつて、それ故に私は本誌本欄でも今まで屢々官學徒にしてもし眞に本音を吐きたいと思ふならば、官を辭せよと勸めて來たのだ。

わが國に於いて現在この學問が盛んになつてゐるかどうか、また今後ますます榮えるか衰へるかは、私にも未だ判然としたことは云へない。何しろ精神分析と云ふ學問は非常に特殊な性質を具へた學問であるから、たゞ頭が普通の意味でいゝ(意識論理的である)と云ふだけではこの學問に適するとは云へないのである。頭は勿論意識論理的に人一倍よくなくてはならないが、その上に藝術家的な直觀力と創造力と想像力とが豊かでなければならない。天才などはさうザラにあるものではないが、フロイド的な或はフェレンチ的な天才者でなければならない。云はゞフロイド的な或はフェレンチ的な天才者でなければならない。その國に分析者として天才者が生れたらその時その國の分析學は盛んになるが、それが死んだら衰へて了ふだらう。普通の學問のやうにたゞ建築物を建て文獻を集め、器械を整へたゞけで、また醫者と病人の頭數だけで盛衰を定め難いや

また本誌本號の寫眞版挿圖に掲げてあるヒステリー患者の畫を聯想させるではないか。これらの畫には下半が獸畜になつた人物が描いてある。ギリシャ神話の牧神サチールは下半身山羊の半神半獸である。このやうな奇怪な生物を想像したことは、これを想像した民族の自己投出であることは、分析を學ばれた人々の恐らく何人も否定し得ざるところであらう。彼等はまづ自分自身の内に獸畜を感じたに違ひない。おゝ自分は何と云ふ獸的な心を持つてゐるのであらう! と今日の我々の内の健康なものでもさう考へる。その考へは純粹な觀念として我々の頭腦の中に浮ぶが、我等の心理の知性的な部分が何かの原因によつてやゝ衰へると、即ち精神生活が全的に退行すると、抽象的觀念は具象的影像として浮び上つて來る。その影像は我等の精神の病理性の深淺度に應じて區々であるが、非常に深い度に於ける精神病理性の場合には、我々自身の肉體の一部が或は全體が獸畜に化身してゐると妄想すべきことは極めて自然であらう。

### 處女姙娠妄想

處女にして姙娠したいと妄想するものが精神病者の内にあることは不思議でない。恐ら

うな、内容的な性質の學問であるからだ。

端的に云へば、精神分析學は日本人には適當した學問である筈だと私は思つてゐるのだ。何となれば、精神分析學は東洋的な學問だからである。今までの西洋の學問とは根本的性質を異にしてゐるので、西洋人には一寸受容れにくかつたのだが、東洋人には非常に受容れられ易いやうに出來てゐる。外面はドイツ的な、或はオースタリー的な嚴めしい論理性（意識性）を具へてゐるが、内面には東洋的な直觀性（エス性）を具へてゐる。西洋文明は自我の文明であり、東洋文明はエスの文明であり、今までは自我の文明が榮えたが、今後はエスの文明の時代に入るとは私の從來からの文明觀であるが、そのエス的文明性に於いて精神分析學は現代の佛教であると私は信じてゐる。佛教をこれほど完全に消化した日本人がそれの現代化した新しい形の精神分析學を受容し得ない筈はないと信じてゐる。少くとも、精神分析學は日本人の手に入つてから、フロイドの創始當時よりは甚だしく佛教的になつたと少くとも私個人は信じてゐる。

## 三、齋藤氏の論理の病理性

論は大分岐路に入つたやうであるが、始めの意圖は齋藤氏の論理の無意識感情基礎を指摘せんとするにあつた。精神分析學が墺的であつて獨的でなかつたと云ふことが、如何にして同時に瑞西的であり米國的であつたと云ふ事實（これは客觀的事實ではないのだが、齋藤氏の感情に適當した願望なのだ）の説明になるのか、他の契機を豫想せずしてはその説明はつくまい。然るに齋藤氏がこのやうに簡單に結論を下して怪しまないところに、齋藤氏の無意識感情を豫想せざるを得ないと云ふ結論が必然的に導き出されて來ると云ふにあるのである。

併しながら私は必ずしも齋藤氏個人を問題にするものではないのだ。固よりこ

く嫉娠は全部の女（彼女がもし純粹に女らしい本能を持合せてゐるならば）の强烈な願望であらうから。

或る處女なる精神病者は自分の身體の内に蛇がゐるとか爺がゐるとか、股間から鍋、枕壜、豁を入れられたとか、いろんな訴へを院長に向つてする。その都度その院長は「塵箱と間違へられたんですか」とか、（狐、蛇、犬がゐると訴へた時には）「まるで動物園ですね」とか、（牛が澤山這入つてゐると訴へた時には）（「それでは牛乳屋が出來ますね」とか、ひやかしたやうな漫才的半疊を入れるのを例としてゐるやうであるが　これは患者の言ふ通り「戲談ぢやありません、苦しくてたまりません」と我等第三者と雖も病人のために憤慨したくなる。

### 嫉妬妄想

近親姦願望が抑壓せられて嫉妬妄想となつてゐるものも、精神病者の間には相當に多いやうである。母親が父の歿後自分に度々或る要求を迫る。併し自分は人間としてそんな馬鹿げた事は出來ないから拒絶し續けて來たら母は弟にその要求を移し、或る日外出から歸つた時に、母子同衾してゐるところを見たと

の精神病院長の精神病理（分析せられざる一切の人に存するのだから、必ずしも齋藤氏を精神病者呼ばはりをすると早合點して貰つては困る。現に右に證明して來たやうに意識論理を無意識感情で推進して氣付かぬ如きは立派な精神病理でないか）を抉剔することも興味あり意味あることではあるが、只今はその場合でない。私は齋藤氏を一材料として、日本人全般のドイツ病をいさゝか診斷警告せんとしたに過ぎない。ドイツ人の症候を模倣して得々たる如き滑稽な悲慘な日本人が自ら甚だ少くないと云ふことを警告するための序説に過ぎなかつたのだ。

## 四、日本人の他國盲拜病

さう云つたからとて、私は必ずしもドイツに反感を抱くものでは決してないのだ。私の青年時代は寧ろドイツ崇拜病者に近かつた。それほどの情熱がなかつたならば、あの難解なドイツ語をともかくもマスターして、あの難解なフロイド全集を五ケ年の歳月を費して殆ど單身飜譯するやうな力は私にはなかつたかも知れない。今の私は、私の青年時代の狂的なドイツ病が圖らずも役立つて、フロイドを原ドイツ文から直接譯する（私以前の譯者は殆ど英譯から重譯してゐる）ことの出來たことを大きな喜びとしてゐる。それほどフロイドのドイツ文は美しく魅力的である。ドイツ語の讀めないものにはフロイドは分らないとまで云はれたのは偶然でない。それ位であるから、私はドイツ及びドイツ文化に對して決して反感を持たず、寧ろありあまる好意を持ち、殊にドイツ語の魅力は他の如何なる言葉のそれよりも私にとつては大きいのだ。併しながら今の私は、分析の力によつてそのドイツ病からは完全に卒業し得てゐるつもりでゐる。世の多くのドイツ病患者たちは、ドイツに同一化し、それを模倣し、その爲すところを鵜呑みにし、その是とするところを我もまた我としての何らの理由なくして是とし、その非と

---

主張するものがあつたと、或る病院長は報告してゐる。

これが完全に妄想であることは確證せられたのであるが、妄想だとすると如何にしてこのやうな妄想が生ずるかと云ふと、それは彼が近親姦願望を抑壓するが故に、その願望は母親の願望として妄想せられ、更に自分が半ば弟にも同一化してこれにその行爲を移し、半ばそれに競爭者として嫉妬を覺えると云ふことになるやうである。

### 無限動力機發明妄想

無限動力機の發展は西洋の中世に多くの學者の頭を絞つて遂に失敗終つたものであるが、これが今日日本の精神病者の間にも時々發現するらしい。流石に正常者の間にはさう云ふ人々はなくなつたやうである。して見ると、昔の學者は一種精神病的傾向が近代人よりも多かつたと云ふやうな大雜束な蓋然說だとて立てられないこともないかも知れない。

それ自身の力で無限に動く機械を發明して見ても、これと云ふ利益があるわけではなからうに、さう云ふ一見無用なことにエネルギーを浪費することは、その人のコムプレクスに盲動させられてゐるのだと云ふ解釋は可能

するところを、彼我の立場の相違を考慮することなくして、頭から非としたりするのである。かう云ふ單純さ人のよさ、お弟子根性、家來根性が一體に日本人の（日本主義者の得意になつて主張する日本精神の）長所でもあり、短所でもあるのである。分析的に云へば、幼兒的で、轉嫁的であるから、超自我が容易に對象に乘移つて了ひ、所謂惚れ込み狀態となつてしまふ。この惚れ込み狀態はこれが國內的にのみ現象してゐる間は無難であり、國家と國民との間の心理關係に於いては理想狀態であらうが、國際關係と云ふものが他方に存在してゐて、この惚れ込み狀態が必然的に國際關係の方に移動して行くことを如何ともすることは出來ないから、その時我等は非常な危險を感ぜざるを得ない。現に或る種の人々にとつては、わが國の當局者よりも、ドイツのヒトラーの方が賴みになるかのやうな錯覺を持ち、これを崇拜し、盲拜し、絕對的信賴（子が親に對する如き信賴）を寄せてゐる者があると云ふ事である。私はまさかと思つてゐたが、どうもそれは眞實であるらしく思はざるを得ないやうな現象を、時々目擊するのである。例へば、七月廿八日夕刊を見てゐると、廿六日英下院に於いて東京會談を中心とする日英並びに英支關係につき質疑應答の行はれたことが報道せられてあつたが、その內にベン議員がバトラー次官に對して「〇〇より支那に對して莫大なる軍需品が輸出されたといふが事實如何」と質問し、次官これに答へて「その通りである」と云つてゐるところがあつたが、新聞記者が何故にこの國の名を伏字にしたか、それは伏字にすることを或る方面から要求せられてゐるからである。何のためにさう云ふことが要求せられるか。それはかう云ふ事を明らさまに國民に知らせては或る方面の人々に都合が惡いからである。おゝ、併し、何とその知らされざる國民は氣の毒なものではないだらうか。日本精神と云ふものはそれほど無智の上に築かれねばならないものなのであらうか。無智の上に築かれた軟弱な土壘に據

であらう。ではそのコムプレクスとは何であるか。それに自分の生命の有限を知れる人間が、何かな無限生命の象徵を生んでそれに依つて自分の永生の錯覺的願望を充足させようとしたものであらうと察せられる。

　西洋中世に流行した一つのものに鍊金術があつた。これは他の金屬を陶冶することに依つて純金を化學的に人工的に製造して見たいと云ふ願ひの表れであつた。この鍊金術と無限動力機とは好一對の妄想的具現であらう。金はこの前「金錢心理」研究號で結論せられたやうに、リビドー象徵であるとするならば、鍊金術に熱心な人々は自分のリビドーの純一性に根本的に疑念を持つてゐた人々ではなかつたかと思はれる。

## 自己客觀の病理

　ドイツのユーモア小話に、或る學者が外出先から夕方に歸つて來て、わが家の門扉を叩くと、下婢が「先生は只今御不在です」と內側から聲をかけた。それを聞いた學者先生は「さうですか、それでは明日また出直します」と云つて去つて行つたと云ふのがある。

　これは何事にも主觀を交へず客觀ばかりを念とする學者を諷したものとして見る時は頗

つて、ドイツの聲色を眞似、ドイツのヂェスチュアを模倣することが日本精神なのであらうか。私はドイツと提携することが惡いと云つてゐるのではない。提携は崇拜ではない。その關係は相互的であり對等的であらねばならぬ。相互的であり對等的であると云ふことは、自分の立場は忘れず、提携の必要がなくなつたら何時でも訣別すると云ふ用意あることを意味してゐる。提携してゐる間でも、彼は現に右に紹介した如く「敵性」を發揮するほどの賴りない相手ではないか。我もまた常に「敵性」を發揮するだけの用意の覺悟とがなければ釣合がとれない。彼は半ば友好、半ば敵性のアムビバレンツ的態度、我は全的崇拜摸拜の臣下的態度では、やがて彼のためにどんなにひどい目に會はされないとは限らないではないか。

## 五、獨逸のユダヤ排斥の心理的動機

論は再び岐路に入つて來たやうだが、元に戻さう。我等は現今わが國に流行してゐるユダヤ禍論の心理的根據を批判するのが當初の目的であつた。ユダヤ禍論流行の動機の中にはドイツへの模倣、忠順さがその一半を占めてゐると認めたが故に、その見當違ひの忠順や模倣を警めたのが、私の右の縷述の目的であつた。

次に我等はドイツのユダヤ排撃の心理的動機を分析して見せることに依つて一層この警告の徹底を期せねばならぬ。ドイツ人がユダヤ人を排斥するのは、ユダヤ人が何かイケない民族であるからだと人々は簡單に考へ込んでしまつてゐる。一體、個人にしろ、民族にしろ、特に本質上惡い人間と云ふものがあるのであらうか。我等、分析學徒はさう云ふものゝ存在を信じない。惡いと云へば御互様でみんなよろしくない一面を確かに備へてはゐるが、それでも善い面も必ず他方に具へてゐるのが、あらゆる人間心理の現實であることは、分析學を學ばれたる諸

る意味深長なものがあるやうに思へる。無論客觀は殊に學者にとつては必要であるが、併しそれは「觀察者」としての範圍内のことであつて「行動者」としては主觀がなければ、その人の行動は常に現實上破綻を來たさゞるを得ない。これに對してまた主觀にばかり執してゐる詩人を戲畫化したユーモア小話も出來てい ゝ筈だし、何處かにあつたと思ふが、今私は思ひ出さない。

### 幼兒死亡率

わが國の乳幼兒死亡率は西洋文明國のそれに比して約一倍多いと云ふことで、只今問題になつてゐるやうであるが、そこには原因として衞生思想の低いことや物質生活の缺乏なども數へ上げ得るであらうが、なほそれ以外に、家庭に於いて乳幼兒等が彼等を繞る大人たちの愛憎關係の交戰渦中で引き裂かれて死ぬのが甚だ多いと云ふことは私は特に警告しておきたいと思ふ。息子の愛情を嫁に奪はれた姑は孫を自分の方に引きつけようとして無暗に甘やかし、甘やかすには物を無暗に喰はせるより外に手のなくなつてゐる姑は（母親ならば母乳を呑ませると云ふ最も端的で有力なる手段を持つてゐるが）衞生思想の缺如と

君の齊しく承認せられるところである。併し同じ人間でも環境のいゝのと悪いのとでは確かに善惡の度は違ふ。ユダヤ人のやうに鄕土を失つた人間が劣等感と復讐慾とに於いて、他の民族よりも熾烈であらうと云ふことは想像出來るが、その代りその劣等感や復讐感を昇華させようと云ふ努力も亦他民族以上に熾烈であらうと云ふことも、これまた極めて容易に想像し得るところである。鄕土を失つたユダヤ人が政治や軍備に於いては無力であり、經濟と學藝との方面に於いてその劣等感を解消し、復讐慾を昇華させるやうになつてゐることは、我等分析學徒の明確に認識し得るところである。併しユダヤと云つてもいろ〳〵の人間があるから或る種のユダヤ人は立派な才能と懸命の努力に依つて經濟や學藝に秀拔な業績を擧げ得てゐるであらうが、さう云ふ能力に乏しい大多數のユダヤ人は劣等感甚だしく復讐慾根深くして、近隣に居られては甚だ迷惑な存在であらうと云ふことは我等には容易に想像し得られるところである。

　そのやうにとかく一通りも二通りも癖のあるユダヤ人が、大戰後の沒落したドイツ民族の間に入り込んで十分にその魔手を振ひ、經濟と學藝界を牛耳つたであらうと云ふことは、これまた如何にもありさうなことである。現にそのやうになつたのだ。で、彼等の内にはドイツ民族を亡ぼしてこの國土を自分のものにしようと云ふやうな妄想を抱いたものも、或はあつたかも知れないやうな氣がする。そのやうな態度に對して、ドイツ民族が如何に反應し反撥したかは、我等にも想像出來る。それ故に、現在のドイツ民族のユダヤ人に對する迫害心理の中には、敗北者としての復讐の感情が這入つてゐることを忘れてはならない。でなければあのやうに殘虐なことをするには及ばないのだ。最近、ドイツから歸朝した人の話では、ユダヤ系ドイツ音樂家メンデルスゾーンの銅像はひき下されてしまつたと云ふ事である。かう云ふことは敗北者心理のさせる仕業であると思ふ。我等は

相俟つて無暗やたらに物を喰はせる。そんなに喰はせては毒だと嫁が注意すると「祖母ちやんの與へるものに毒は這入つてゐない」と毒を含んだ言葉で應酬するので、嫁は家内の平和維持のために默つてしまふ。その内に子供は病氣にかゝつて死ぬと云ふやうな實例をあまりに多く私は周圍に見聞する。

## 理經濟の恐慌

ドイツの笑話に、次のやうなのがある。或る町で鍛冶屋が人を殺したに對して、判官はその鍛冶屋に死刑の宣告を下したところ、町の人々は、この町には鍛冶屋は一人しか居ないのに、その鍛冶屋に死刑を宣せられては我々は困る、仕立屋なら二人居るからその方で間に合はせておいてくれと嘆願したと云ふのがある。たゞの理窟から云へば、誠に馬鹿氣た話のやうだが、爲政者の命令と民衆の要求とが時に撞着すべきことを端的に表現したものとして誠に面いに笑話であると思ふ。これに類したことが現實社會に、いろ〳〵なカモフラーヂの下に横行することは誰でも知つてゐるが、殊にこれを純粹に心理現象として見て、爲政者や裁判官を超自我の象徴とし、民衆をエスの代表として見るとき、實にこの笑

メンデルスゾーンの音樂やハイネの文學に十分にドイツ的なものを感じ得て喜んでゐたのに、かうして一々ドイツ文化中からユダヤ人の寄與を抹殺するときは殘りは誠に貧弱なものとなりはせぬか。民族文化の誇は、他民族が來り會してその國獨特のものに寄與して行く、その包括性と融和力とにあるのでなければならない。それは齋藤茂吉氏が、フロイドの精神分析學にオーストリー性を認めたのと同じだ。我等もフロイドの立派なドイツ文を讀んで、如何にドイツ文化の豐富になつたかをドイツ文化のために喜んでゐたのだ。少くとも我等は、法隆寺や奈良朝以前の文化に朝鮮人の寄與が如何に多くても、みな日本美術としてこれを誇り得るではないか。また現に相當の程度まで日本化してゐることを認識し得るではないか。我等はこれ等が鮮人の手になつたものだとして燒拂ふであらうか。何人もそんな馬鹿氣たことを考へてはゐない。それは日本が未だ敗北者として悲憤の涙を流したことがないからだ。日本人がドイツ人のユダヤ人排斥の尻馬に乘るとすれば、それは勝利者が敗北者の眞似をすることに等しい。不合理と滑稽、これより甚だしきはない。

ドイツ人のユダヤ排撃心理の中には以上の他になほ二つの重大な契機があると私は見てゐる。その一つは、ヒトラー自身がドイツ人ではなく、オーストリー人であつて、つまり、自分の生國より大きい隣國の元首となつたものが（卽ち換言すれば、エディポス的な父克服を完成したものが）國民全般の憎惡が自分に及ぶことを本能的に恐れて、これを近隣國に轉嫁しようとの心理的トリックであると思ふ。これは延島英一氏に暗示せられて氣付いたことであるが、一體に近隣小國から出て隣接大國を征服して元首となつた者（例へば、ヒトラー以外にはコルシカ人としてフランス皇帝となつたナポレオンジョヂルヂア人としてロシアの事實上の元首となつたスターリンの如き）は、國民の憎惡の自分に及ぶことを防禦す

話の如きことが如何に屢々現實に於いて起き得るものであるかを、我々萬人は直ちに承認しないわけに行かないのである。

例へば、八ツ當りの心理の如きは、これに類する一つである。人々は上役に叱られたときに、云ひ返すことが出來ない。併し憎惡は何としても發散せられねばならない。その時その憎惡は本來の對象（上役）から逸脫して罪も關係もない下役や民衆の頭上に爆發することになる。これでとにかく、憎惡と云ふ心理過程による心理經濟のパニック（恐慌）狀態は救濟せられたことになるのだ。裁判所の宣告にも實に屢々かう云ふ無意識的な誤審のあることは、本誌「心理經濟研究號」に數々の實例で證明してある通りだ。

## 現實のお面

奧本島田

自己分析のみならず、總て科學は何と云つても或る程度までは當面の快樂を放棄することを豫想するものだから、これを長い間續けてゐると、時にいや氣がさしてくることがある。もう止めやうと思つてもさてやめて見る

るためにか、種々なトリックを用ゐる。それはまづ自分の出身國民を決して自分の身邊にはおかぬことである。スターリンの如きは殊に顯著で、ヂョルヂア人を目の敵のやうに虐待し計畫的に殺戮してゐる。

次には國民の攻擊慾を常に近隣國にさし向けておくために非常な努力をする。ヒトラーがまづユダヤ人と云ふ最も防禦力の弱いものに對して、國民的憎惡をさし向け、次に防禦力の少いオーストリ、チ　コ、それからダンチヒと、目まぐるしく、强迫的に攻擊慾をさし向けつゝめるのは、他にも種々な動機もあるとは云へ、ヒトラー個人に就いて云ふならば、自分に向ふべき國民的憎惡を他にそらせておくための技法であり、トリックであると云ふことが出來ると思ふ。その國民生えぬきの獨裁者ムッソリーニが「ファシズムは輸出物ではない」とて、始めの內は近隣諸國に干涉しようとはしなかつたことゝ、スターリンがレーニンによつて「スターリンはロシア人以上に大ロシア主義者だ」と評せられたのを比較して見ると、思ひ半ばに過ぐるものがあらう。

ドイツのユダヤ排擊の心理の中には、殊に血の純潔を保たうとの主張の中には返つて逆にユダヤ人への模倣心理が働いてゐると云ふことを知らねばならないのだ。血の純潔を保たうとする、意慾に於いては、ユダヤ人はドイツ人の大先輩であつて、ユダヤ人は如何なる環境にあつてもなるべく自民族同志の血は操守する傾向（勿論、多少の例外はあるが）が强いのである。恐らくはユダヤ敎の「選民」思想以來の傳統的ナルチスムスの故であらう。

日本人は昔から單純で人がよくて、臣下精神が徹底してゐるから、これが國內的に發露した場合には誠に具合がよいのであるが、そのまゝ屢々國外的にも發露することになるので、その時は誠に始末が惡い。さう云ふ實例が昔に見られた場合は、以前にも擧げたことはあるが、山崎闇齋がその門弟たちの孔孟へのお弟子

とまた不安になつて止まらない。この邊の心理機制は、肉付面の傳說と似たところがあるやうだ。肉付面の傳說によれば、お面を取るには宗敎家のところへ行つて濟度してもらはねばならないさうである。だが、分析といふお面はどうしてとるか、今更宗敎へも走れないし、サテ！どうしやうか？　このあたりから先づ盲目となつて行く。

驚いたことには吾々は現實原則への順應主義といふお面をかぶつてしまつてゐる。そのお面は重苦しくて仕方がない。これを取り去つて元の快樂的な胎內願望へ逃込みたくなる。その大きな願望を充足しやうとするのが佛敎である。全く夢みたやうなことである。

吾々はやはり快樂主義まる出しの素面では世渡りは出來ないのだ。死ぬまでは重苦しくとも現實主義のお面はかぶつてゐなければいけないのだ。それを重苦しく感じるのはやはり自己分析の至らぬせいだらう。（册子七ノ八短文「肉付面の傳說」を讀みて）

## 『意識の誕生』について

**〔編輯者曰〕**　少し神祕的、直觀的で、つまり思考の方法は文學的で科學的とは云ひにくい

根性、臣下精神に一大痛棒を食はした話の如きがそれである。孔孟軍を揃へてわが國を襲うて來たらば汝等はどうするかと尋ねたところ、お弟子根性に萎縮してゐる門下たちは返答が出來なかつた。彼等の軍を敗り孔孟を引捕へることだ、それが孔孟の敎への精神だと闇齋は喝破して彼等の度膽をぬいた。

現在の我等はドイツやヒトラーに對する事正にこの通りの心構へでなければならない。ドイツは盟邦ではある。これと提携することは大いに結構だが、それは相互の利害が共通する限りに於いてだと云ふことを十分に覺悟してかゝつた方がいゝ。現に彼等がその態度なのだ。彼等が過去に我等を「黃禍論」でいやがらせた事や、三國干渉で苦汁をなめさせたことは時効にかゝつたとして忘れてもよい。たゞ忘れてならないのは、まづヒトラーが『わが鬪爭』の中でわが日本を極力罵倒してゐる事だ。次に○○に對して○○を提供して英國的な「敵性」を無遠慮に發揮してゐる事だ。また、かのヒトラー・ユーゲントの青年たちは、日本見學の印象記の中で、わが國民を冷侮する言辭を無遠慮に吐きちらしてゐる事だ。さう云ふ國民を無條件に崇拝し、それに忠順を誓ふことが日本主義だと云ふならば、私の信ずる日本主義とはいさゝか選を異にすると云ふことを、こゝに明白に斷つておきたい。

♣

我等はドイツ的偏見を以つてユダヤ人問題に對することだけは早く卒業しよう。併しドイツ的偏見追從の故ではなく、何か適當な國民的憎惡の對象を外部に見付けなくては、それが國內に欝積して階級鬪爭になつたりして困るから、その意味でユダヤ人排斥などは手頃だと云ふなら、私も別に云ふことはない。それが火星人ででもあれば一層無難だらうが、實力のある民族を國民的憎惡のはけ口の對象に選んであとでその怨みを買ひ、他日復讐せられるやうなことになつては恐ろしいから、と云ふ理由で用心深い臆病根性から、ユダヤ人を選んだのだと云ふなら、それも誠に賢明な策だと苦笑するより外はない。たゞ併し、それはあくまで政治的な意味であると云ふことだけは我等學藝の徒だけでも十分に承知しておきたいものだと思ふのだ。

如何なる民族の文化業績にてもあれ、これが我等の生活を裨益するならば、公平に率直に攝取し利用することこそ「廣く知識を世界に求める」日本人らしい寛宏な態度であると云ふことを悟らねばならぬ。（完）

---

が、併し思考の形式は科學的である。それは筆者自身も始めの方に斷つて、これに科學的根據を供するものは純粹科學者の任であると云つてゐる。とにかく、精神分析の所謂胎內空想、出產外傷、母子定着、愛憎並存などを彼獨自の觀念で考へ、彼獨自の言葉で述べてゐるところは面白い。太陽神經叢說はわが國古來の臍下丹田說と比較して面白い。とにかく小說家にしてこれだけの論文の書ける人は日本にはゐない。その點で少くともわが文壇を裨益するところは大であらう。文藝欄に編入した所以である。

# 或る精神病院の裏

XYZ

精神科・神經科・腦脊髓科、○○院、院長醫學博士○○○○——かうした精神病院の廣告を觀ると、讀者はその內でどんな立派な治療醫學が行はれてゐると想像するであらうが、實際はさうした想像や信賴を裏切る樣な事實が行はれてゐないとは保證し難い樣である。以下に書くところは神經衰弱で半ケ月程某病院に入院してゐた知人A君の報告によるものである。A君はその病院名を發表しないで欲しいと言はれたのであるが、他の病院に迷惑の掛からぬ樣にするためには、A君の氣持に反し、又その病院にはお氣の毒ながら、A君が入院してゐた病院は東京市T區所在、醫學博士I氏經營のH院である事を記して置かねばならないのは筆者の甚だ殘念とするところである。

H病院の日課は患者に食事を運ぶ事と時々入浴や散髮を命ずる事、及び一週一度の診察、それだけである相だ。しかもその診療たる千變一律に膝蓋反射の有無を調べる以外には何もやらないのである。そして每日供給される藥品は恐らく胃の藥らしいとA君は苦笑して居た。かうした處置は誰しもそれが診療所としての治療的處置か或は患者の保管所としてのそれか、その判斷に苦しむであらう。

×

A君の報告によつて驚く可き事實を知つた。それは看護人卽ち食事運搬夫が患者をサディズムの對象として虐待する事である。患者が惡戯をするとか、或は看護人の命令に服從しないとかの理由によつて、彼等は數人で四方八方から、患者の頭を毆る蹴るして散々に虐待する。その際に患者は「濟みません」と謝るか、或は無言で唯だ單に動物的な悲鳴を擧げてゐる。そして虐待された患者はそれをケロリと忘れた如く、怨みに持つ樣な樣子は更にないとA君は言ふ。精神症の患者としてはそれが當然であらう。昔から言はれて居るが如く「賢人と愚人、天才と狂人、惡人と善人」は甚だ類似し一定の條件の下では相互に移りゆく對照をなしてゐる。A君も寢てゐる時に看護人が食事を運んで來たが、その時起きて居なかつたと言ふ理由で不意に頭を足蹴にされた相である。A君はその看護人を毆りつけてやりたい衝動に驅られた相であるが、精神病の疑ひの下に入院してゐたA君にとつて、それがどんな恐ろしい結果となつて報いられるかを考へて我慢した相である。かうした虐待は彼等の全部がするのでは勿論ないのであらうし、又院長のI氏が奬勵してゐるのでもあるまい。しかしかうした行爲は院長の患者に對する態度の反映で

あると判斷されても仕方がないであらう。

精神症者は生ける屍であり、精神的には單に自然物として動物的慣性で墓穴に運ばれてゆく人間にしか過ぎない。（有效な治療手段が發見されない限り）從つて斯かる病院は正に患者の有料倉庫であり保管所であると言つてもよい。そして患者が治療不可能な生ける屍であり、人間の形相をした自然物であるとするならば、精神病院としての治療的施設の中で一體誰が治療される可きなのであらうか。A君はこの病院の特徴を擧げて、患者の動物的狂笑、狂語、醫者の病名附與と膝蓋反射の檢査、一部看護人のサディズム的患者虐待、胃の藥、非榮養的な食事、蚤と虱の大群、無料患者の內職的手仕事、それらであると言つてゐる。

×

それからA君の報告によると、或る患者達は强迫的に前方轉廻（でんぐりかへし）をやつてゐる相であるが、それは出產象徵の强迫的反復であるまいか。A君の話によると患者の或者は强迫的に堂々廻りを反復してゐる相である。これはお百度めぐりと同じ反復强迫行爲であらうが、堂々廻りは、少少皮肉ながら、院長も患者に負けずにやる相である。所謂回診する行列がそれである。卽ち院長が醫員とそんな場合にだけ姿を現す看護婦に隨伴せられて、エー、ホーとばかりに行列を作つて病院の中を靜々とねり步くのだ相である。醫學上どんな功德があるのであらうか。まさか院長の顏で治すつもりでもあるまい。患者は妄想によつて廻り、院長は醫學の名利にかけて堂々廻りするのか。

さて精神病院がかうした內情であるとすれば、患者こそ病院の懷を肥やすばかりで何等の治療的利德も受けずに甚だ迷惑なわけである。從つて、精神科の患者もかうした病院へ入院するより寧ろ何處かの高原の肺結核療養所へ入院した方が效果が却つて擧るかもしれないと云ふ感じさへして來る。

千葉のN診療所に入院してゐた患者からも右に類した話を聽いたことがあるが、云ふ人が精神病院に入るやうな人だからまさかと思つてゐたが、かうしてまた別の病院に就いても同じやうな報告をきくとすると全國にかうした病院は相當の數に上るやうなので、一寸警告を與へておく必要があると思つて認めて見た。（完）

——（五九頁下段より續く）——

いろ〱眞理發見の鍵があるので、これらをこと〲く無稽なことゝして斥けてしまふことが、結局何ものをも理解することは不可能にしてしまふのではないかと思はれる。

要するに月、白鳥（鶴）梅、窟、湖沼海濱等が芭蕉にとつても母、女性の象徵であり、或は胎內空想の一部分であつたことは、他の多くの人と異ならなかつたといふことは、確かである。（未完）

# 精神分析學入門講話（九）

ジグムント・フロイド（K・O・生譯）

反復的、複合的行り損ひは、確にこの種のもの丶最高の精華である。行り損ひに意味があると云ふことを證明するだけのことであるならば、我等は始めからその事だけに局限して來たであらう。何となれば、行り損ひに意味のある事それ自身は鈍い觀察眼にも見落すことの出來ぬものであり、如何に批評的な判斷を下してもそれに對抗することは分つてゐるからである。行り損ひが繰返し出現すると云ふことは、如何にそれが頑強なもので、決して偶然に起つたのではなく、豫定に根差すものであることを暴露してゐるのである。最後に、各種の行り損ひに交互が混淆するところを見ると、その行り損ひの最も重要なもの本質的なもの丶何であるかゞ、我等にも分るのである。その行り損ひの形式やそれの用ゐる手段でなくて、それがさまざまの方途で到達せらるべき意圖の何であるかゞ分るのである。そこで私は諸君に反復忘却の一例を紹介するであらう。アーネスト・ジョーンズは嘗てどう云ふ動機からか分らないが、或る手紙を幾日もの間、机上に放置

かう云ふ實例ならまだいくらでも擧げることは出來るが、只今はそれを控へておかう。拙著『日常生活の精神分析』※（一九〇一年初版）には、以上の他に、行り損ひの研究のための豐富な判決例が擧げてある。それ等の實例は總て同じ結論に導く。卽ち、行り損ひには何かの意味があるらしく、またそれ等の意味を人々は行り損ひの行はれた附帶事情に依つて看破したり確證したりするものであるらしいとの結論に導くのである。今日は簡單乍ら話しすることにしたい。何となれば實はかう云ふ現象の研究から始めることは精神分析學への入門の準備になると云ふ利益があるからである。たゞ私はこ丶で二群の觀察を述べて見たいと思ふ。つまり反復的、複合的行り損ひとは如何なるものかを云ふこと丶、我等の解釋がその後の出來事に依つて確證せられたこと丶に就いてゞある。

註　※この書の中にはブリル、ジョーンズ、ステルケ、等の觀察が包含せられてゐる。大槻憲二譯初版は昭和五年十月に刊行せられた。

しておいた。遂には決心してそれを投凾したが、併し配達不能で戻されて來た何となれば、彼は相手の住所を書くのを忘れてゐたからである。そこで彼はその住所を書き入れてポストへ持つて行つたが、今度は切手が貼つてなかつた。そこで今や彼は本來この手紙を出したくないのだと云ふことを承認せざるを得なかつた。

今一つの實例は、勘違ひと置忘れとが一つになつてゐるものである。或る夫人は自分の義兄にあたる、さる有名な藝術家と共にローマに旅行した。その兄はローマ在住のドイツ人たちから非常に歡迎を受け、種々の贈物を貰つたが、中にも由緒のある昔の金メタルを贈られた。夫人は義兄がその美事なメタルをあまり大して珍重するらしくもないのを不快に思つてゐた。やがて姉が來たので入代りに、夫人は家へ歸つて來たが、歸つて來て荷物を開いて見るとそのメタルが、どうしたわけかそこに這入つてゐた。彼女は直ちにその旨を義兄に報じ、明日それをローマに送ると云つてやつた。ところがその翌日になると、そのメタルはどこへうまく置き忘れたものか、どうしても見付からず、送り返すことが出來ない。その時、夫人にはやうやく分り初めた、自分がどうしてこのやうに放心してゐるのかと云ふわけが。つまりそのメタルを自分のものにしておきたいのだと云ふことが……。（ライトラーの報告）

私は既に前に、間違ひと忘却とが結びついてゐる實例を報告したことがあつた。卽ち或る人が最初には媾曳を忘却し、二度目には確に忘れないやうにと誓言しておいて、約束したのとは違つた時間に出て行つたと云ふ話を……。それと全く類似した例を、一友は自分の經驗の中から私に話してきかせた。その友は科學にも文藝にも興味を持つてゐる男であつた。彼曰く「私は二三年前に或る文學會の委員の一人に選ばれることを承諾した。それにその會に關係を持つてゐれば、いつかは自分の戯曲を上演するに役に立つと思つたからである。で、あまり面白くはなかつたが、毎金曜日に催される例會には缺かさず出席してゐた。二三ヶ月前にFにある劇場で上演の確報に接した。その時以來、その會の集りに出席するのをきまつて忘れるやうになつて來た。私はこの事に就いて貴方の書かれてゐるものを見た時に、私は自分の忘却を恥ぢて、も早他人に用事がなくなると出入りしなくなると云ふのはあまりに卑しい事だと自分を責め、次の金曜日には確に忘れないやうにしやうと決心した。私は幾度もこの計畫を想起し、遂にこれを實行して會場の戸口に立つた。驚いたことに扉は閉まつてゐた。集會は既に終つてゐた。つまり私は日を取違へたのだ。それは既に土曜日であつた！」と。

似たやうな觀察を集めるのは面白いことではあるが、併し私は先へ行かねばならない。我々の解釋が果して當つてゐるかどうか、その當否を未來の確證に待つやうな場合に就いて諸君の一瞥を乞ひたいと思ふ。

そのやうな實例の主要條件は、端的に云へば、現在に於ける心理的狀勢は我等に分つてをらず、或は未確定のものであると云ふことである。その時、我々はその解釋にはたゞ推定としての價値しかおくことが出來ず、我々自身もそれをあまり重視する氣にならないのである。併しその後になつていろ〳〵の事が起きて、それに依つて我々の當時の解釋が既に正しかつたことを知るやうになるのである。嘗て私は或る新婚の夫婦の許に客に行き、その時新婦が笑ひながら彼女の最近の經驗を話してゐるのを聽いたことがある。彼女は新婚旅行から歸つて來た翌日に、夫が用事に出かけた間に彼女はたつた一人の妹を訪れて以前のやうに一緒に買物に出かけた。突然、その新婦は街の向ふ側に一人の紳士を見かけた。で、彼女は妹の方を一寸突いて云つた。アラ御覽なさい、あそこにLさんが行くわよと。彼女はこの紳士が二三週前から彼女の夫になつてゐることを忘れてゐた。この話を聽いて、私はぞつとしたが、併しそれから先の事は立入つて詮鑿しなかつた。この夫婦が幾年かの後に破鏡の嘆を見るやうになつた時に、私は始めて右の小話を思ひ出したのであつた。

メーダーも、或る婦人が結婚の前日に晴着を試しに着て見るのをすつかり忘れてゐて、夕方遲くなつてやつと思ひ出し仕立屋さんを大變まごつかせたと云ふ話を報告してゐる。彼はなほその女が結婚後間もなく夫と別れたことはこの忘却と關係があると云つてゐる。――私は今では夫と別れてゐる或る女を知つてゐるが、彼女は財産管理の文書に自分の娘時代の姓名を屢々署してゐた。その後幾年も經つて彼女は實際その娘時代の姓に戾ることになつた。――私はその他、新婚旅行中に結婚の指輪を紛失した婦人がたを知つてゐる。果してその結婚生活中にその偶然の出來事に意味のあつたことが分つて來た。なほも一つ、結果はそんなにひどくないが、美事な實例がある。ドイツの有る有名な科學者が結婚式の時間を忘れ、敎會へ行かずに實驗室へ行つてしまつたので、結婚は破談になつたと云はれてゐる。彼はそのやうにして結婚を思ひ止まつたのだから非常に賢かつたのだ。現に彼は高齡に至るまで結婚せずに死んでしまつた。

多分諸君はまた思ひつかれることであらう、これ等の實例に於いて行り損ひは古代人の豫言や前兆の代りになるものであると云ふことを……。また現に、豫言の或る部分は行り損ひに外ならないのである。例へば、誰かゞ躓いたり轉んだりする場合の如きである。他の部分はともかく客觀的出來事としての性格を帶びてをり、主觀的行爲の性格は帶びてゐない。併し、ある出來事に遭遇してそれが前者の群に屬するか後者の群に屬するかを決定するのが如何にむつかしいかは、諸君の信じないところであらう。行爲は常に受働的經驗と云ふ假面をかぶることを屢々心得てゐるのである。

長き人生の越し方の途を顧望することの出來るみな人は、人々の交際に於いて些細な行り損ひを見た時、それを豫言と

して解釋し、本人のまた秘かなる意圖の前兆として評價することの勇氣と決意とを持つてゐるならば、無用の失望やいやな思ひをせずとも濟んだであらうと思ふやうになることであらう。併し、大抵の人々はそれを敢てすることが出來ないのだ。と云ふと、科學の逆路を通つてまたもや迷信に墮するのかと云ふ人があるかも知れないが、併し總ての前兆が中るわけではないのだ。我々の理論から云つても、豫兆が必ずしもその通りになるには及ばないと云ふことは、理解せられるであらう。（第三章終）

## 精神分析學語彙（三九）

一、不安（前號より續き）――不安用意狀態は不安經驗のたゞ或る部分を豫めとつてゐるだけであつて、期待せられてゐる危險への警戒として作用する。この信號に依つて生じ來る反應が危險に對して效果がなくなると、その時不安狀態が擡頭して來る。卽ち、傷害への期待が高度の緊張亢奮と同じやうな狀態を生ずる。それを不安の中に飛込んで支配することは、心理裝置には出來ない。出產と云ふ最初の不安經驗に於いては、それは分娩と云ふ飛込みに依つてなされるけれども……。心理裝置に支配しきれなかつた刺戟は心理裝置の中に侵入して來る。何となれば、それは刺戟に堪へる力以上のものだからである。そのやうにして侵入して來た刺戟を我々は外傷的侵入と名付ける。不安は如何なる場合にも、何らかの外傷的刺戟侵入の威赫的危險に對する反應である。何となれば、神經症的不安もまたそのやうな危險に對する反應であるからである。現實的不安との區別は奈邊に存するかと云ふに、それは危險が一つの內的（本能的）危險であつて、而もそのやうなものとして認識せられないところにある。神經症的不安は次の三つの形で擡頭する。

（一）內容不定な一般的不安として或は期待の不安として、自由に浮動し新に生じ來れる期待と結びついて移行してゐる。この種の不安は不安神經症に於いて特質的である。その時リビドーは直接的に不安に變化せしめられてゐる。この不安は無意識の內容は持つてゐない。その中には外傷的障碍の結果としての原始不安が或る程度まで新たに作られてゐる。

（二）恐怖症に於ける一定の觀念內容と結びついてゐる。そこには外的危險に對する關係がなほ認められるけれども、併しその危險は無暗に誇張せられてある。例へば、鐵道の不安、臨場の不安、橋上の不安など。かゝる場合の不安は自分の本能に對する不安で、リビドー的又は攻擊的性質のものであらう。この本能的不安は外的對象に投出せられ、それによつて不安が避けられると云ふ利益がある。但しその恐れたる對象が避けられ得る場合に限るのである。勿論、そのやうに不安が投出せられゝば自我はその自由の一部分を失ふのである。幼兒の不安は常に恐怖症的不安の型によつて出來上つてゐる。

（三）ヒステリーに於いて、又は發作が自由に起きる如き型の神經症に於いて擡頭する。或は症候を伴つて起ることもあるが、併しその場合に外的危險が目に見えてゐると云ふやうな根據はないのである。その無意識原因に於いては、第二の中で擧げてお

いた如き種類の不安がそれに符合する。たゞこの方では外的對象にそれを投出すると云ふ如きことが首尾よく行つてゐないだけである。

不安と症候との關係は極めて密接なものである。不安ヒステリー（恐怖症）に於いては症候は不安回避の役に立つ。强迫神經症的症候に於いては、外的影響力に依つて症候を阻止すると、堪へ難い不安を勃發せしめるやうになる。症候はこのやうに不安の代りになつてゐるのである。不安拘束、又は不安回避の役に立つてゐるのである。不安の生ずる心理的個所、卽ち不安個所（アングストステッテ）は自我である。で、外傷的侵入のために源始不安が新たに生ずるのは自我の內に於いてゞあらう。自我は不安を信號不安として構成し、それに依つて快不快原則に訴へつゝ本能的危險の脅威を回避するのである。

この不安信號に依つて危險なる本能の代表から纏綿は引揚げられ、かくて代表的本能は抑壓を受けるやうになる。その人の自我が獨立を失ひ何かに依屬してゐることは不安の種類如何を見れば分る。現實的不安は外界への依屬の度に正比例し、神經症的不安はエスへの依屬度に正比例し、良心の不安（社會的不安）は超自我への依屬度に正比例する。本能に對する不安に於いては、危險の脅威は禁ぜられたる行爲に對する懲罰に存するのである。つまり去勢と愛情喪失（兩親的な者から愛想をつかされること）に存するのである。これ等二つは幼兒期には現實的不安として恐れられる。神經症的不安と現實的不安とはこのやうに本來、現實的不安、又は現實的と考へられてゐる不安に對する二樣の反應であるから、從つて相互に關係し合つてゐる。（未完）

## 前號正誌正誤表

| 頁 | 行 | 誤 | 正 |
|---|---|---|---|
| 一八 | 一〇 | 受を以て | 愛を以て |
| 同 | 一四 | 實に | 實は |
| 二五 | 一三 | 先來 | 元來 |
| 五三上 | 二〇 | 報ひ | 報い |
| 五四 | 一 | 愛慾苦 | 愛慾苦觀 |
| 六二上 | 一六 | ユダヤ人は | ユダヤ人に |
| 六三上 | 一一 | 在る人 | 或る人 |
| 同 | 一七 | 頃目 | 頃日 |
| 六六上 | 八 | 斷呼 | 斷乎 |
| 六七下 | 五 | 鬼の | 鬼を |
| 七〇上 | 一一 | 紋り | 絞り |
| 同下 | 五 | 石燈 | 石磴 |
| 七一下 | 二 | 赤名 | 赤目 |
| 七二中 | 四 | 瀧に水 | 瀧水に |
| 同下 | 六 | 千本 | 千木 |
| 七三下 | 一一 | 桶の山 | 樋の山 |
| 同 | 一二 | 殘して | 約して |
| 同 | 一五 | 宜長 | 宣長 |
| 七四下 | 一五 | 見返し | 見直し |
| 八二下 | 一〇 | berei | bereit |
| 表紙四 | 二八 | Träunme | Träume |

## 内外彙報

### アランディ博士近信

本研究所大槻氏から近業『冷感症とその治療』並びに第七卷第七號（アランディ原著、延島氏譯「夢の分析入門」第一章所載）を送られたところ、六月十九日付で左記の如き返事があつた。フランス文故、延島氏に乞うて譯して次に紹介しておく。

署名のところには片假名で「アランデイ」と書いてあり、「他の章」以下の數字は漢字で書いてあつた。なかなかユーモラスなところがあつて、親しみ深い人である。

ヒッチマン、ベルグラー兩氏の書の貴譯及び拙著『夢の例解』の飜譯掲載の『精神分析』をお送り下されたことは深謝に堪えません。

拙著の他の章（二、三、四、五、六章）の譯文をもお送り下さるなら、小生は非常に嬉しく存じます。小生は殘念ながら日本語が分りませぬ（幾つかの字の格好を知つてゐるのを除けば）が、しかし譯文を揃へて手許に持てるのが樂しいのです。それに小生の著作が飜譯されたことは小生の名譽であり、小生はそれを非常な誇りとしてゐるのです。

もしあなた方の方で、何かフランス語に飜譯を御希望の論文があれば、小生はそれを依頼できる友人を二人（殊に東洋語學校の日本語教授）持つて居ります。

末文ながら再び感謝します。同志よ、小生の深い愛情を信じて下さい。敬具。アランディ

### フロイド教授重態？

八月十日の東京日日新聞は左記のやうな報道を掲げてゐたが、東京朝日と都とには掲げてなかつたからどこまで眞實であるかどうか分らない。この前にもかう云ふデマがとんで、見舞狀をやつたらアナ・フロイド孃から父君の健在を報告して來たことがあつたが、今度は老齡でもあり、異郷に移つて心身を勞したことであらうから、眞實かとも思はれる。（讀賣にも出たらしく、それで知つたと云ふ愛知縣の特別誌友榊原純治郎氏、及び北海道の石栗榮次郎氏から見舞ひを頂き、御眞情に感激しました。）

【ロンドン發同盟】精神分析學の創始者ジグムント・フロイド博士は昨年三月の獨墺合併の結果、ウインを追はれ八十三歳の高齡でロンドンに移り住み、ハンプステツド・スクエア街にわび住居をしてゐたが、その後健康勝れず七月末から衰弱甚だしく今月に入つて重態に陷つた。

### 英文『國際分析學雜誌』第二册

一、「人格喪失感狀態に於ける現實感」オーベルンドルフ（ニウヨーク）
一、「解釋の標準」スザン・イザークス（ロンドン）
一、「崇物症者の自我發達に就いて」ペイン（ロンドン）
一、「男性的性格形成に於ける女性的ペニス空想の役割」サンドル・ローランド（ニウヨーク）
一、分析學界論文短評抄——
一、新刊批評——

『メニンガー診療所報』第三册

一、「脳の腫脹の分類」カーノハン。
一、「精神病患者の醫療的試驗に對する反應」ノーマン・ライダー。
一、「米國に於ける精神分析應用の學校」ダグラス・オア。
一、「筋肉發育停止の型」クランク。
一、新刊批評――

## 國內關係時事

▼大阪の武田長兵衞商店から出てゐる『ホームグラフ』と題する雜誌に「興味ある潜水夫の心理」と題して、深海底に沈降した水夫の心理が退行して無意識狀態に陥るもので、「英國海軍では深海で働く水夫を選ぶのに精神分析の方法を用ゐてゐる」と報告してゐる。（特別誌友長谷川良雄氏報告）

▼大槻氏文筆近業一束――
一、全能感的性格に就いて――「人生創造」八月號。
一、青年の憂鬱症――「通俗醫學」八月號。
一、スターリンの精神分析――「科學知識」八月號。

▼長谷川誠也氏「跛行の心理」――『科學ペン』七月號。

▼木村廉吉氏「精神分析學界近況」――『科學ペン』八月號。

▼宮田戌子氏「南畫家の性格の型」――『南畫鑑賞』七月號。

▼福澤一郎氏は獨立美術協會を脱退後、同志と共に美術文化協會を設立、機關誌『美術文化』を八月一日創刊せられた。編輯兼發行者は淺井淸隆氏であるが、協會の所在は福澤氏方である。

▼本誌前號（册子）及び前々號の內容に就いては、それ〴〵の廣告面を參照ありたし。

## 本研究所研究會例會

七月例會は十七日夜、萬世橋畔アメリカン・ベーカリで催された。食前、司會者から前號雜誌所較の「語彙」に就いての解說があつた。その內に癲癇への言及があつたので、暫く癲癇に就いての論に花が咲いた。この病氣の發作のある時に頭に草履を載せると發作が納まると云はれてゐるのはどうしてであらうかと云ふ質問が高橋鐵氏から提出せられたが、もしそのやうな効果があるとすれば、それはそのやうな侮辱が本人の超自我の自我苛責を必要とせぬやうになるので、發作は一時的に納まるのではないであらうかと大槻氏は答へられた。この解釋は癲癇が超自我の苛責に淵源するとの假定を豫想するのである。

その他、長尾忠氏は四歳と十歳との女兒の性的遊戲の實驗談を、宮崎正路氏は或るヒステリー患者の被害妄想を、小野田幸雄氏は或る男の被害妄想の話を述べられた。宮崎氏はまた「笑ひのサディスムス」に就いて種々の實例を擧げて論ぜられたが、實例の解釋に就いて倉橋久雄氏の批評などあつて會場は賑つた。

出席者は右言及諸氏の他に、田中虎男、須佐淸平、黑澤敬次、塚崎茂明、山口滋、大槻岐美の諸氏であつた。

## 研究所だより

▼早坂長一郎氏は兵庫縣立精神病院光風寮に在勤中のところ、西宮市廣田山病院長として轉勤せられ、自宅を西宮市千歳町一二一に移された。

▼狩野三郎氏は南支に轉戰中のところ、六月十九日歸還を命ぜられて目下奈良縣の郷里に落着いてゐられる。

▼特別誌友青木昭氏（文献維持委員野村泰氏紹介）は六月廿一日長逝せられた。御悔み申上げます。

▼私は七月十五日に研究會員山口滋君と二人で富士五湖めぐりをし山中湖畔に一泊し、翌十六日は徒歩で籠坂峠を越えて、御殿場から汽車で歸京しました。五湖めぐりとは云へ、雲助的運ちやんにごま化され四湖しか見ず、本栖湖を逸したのは殘念でした。併し有名な風穴にも這入つて千古の氷柱を見たり、西湖附近では樹海の壯觀に氣宇を大にしたりしました。山中湖畔では夕食後に大出山と云ふ綠色の山に二人で登りましたが、奈良の三笠山のやうな形をしてゐて遠望もとても美しいが、登つて見ると富士と山中湖と相呼應する樣を一望の內に收めていゝ眺めでした。

翌日は籠坂峠を越えて須走に辿り着いた時は相當疲れてゐました。須走の淺間神社で朱印を貰つたり、こま狗その他を分析的に觀察したりして（こま狗は口を開いてゐる方が雌で、その證據に仔狗をつれてゐると山口君が指摘しました）またトボ〳〵二里ばかり歩きました。その途中で、山口君は路傍の子供からモグラモチを五錢で買ひとつて（都會育ちの君はこの小動物を初めて見たのださうです）ボストンバッグの中へほり込みましたが、御殿場で汽車の中へ這入つてバッグを開いて見たら死んでしまつて、一緒につめてこんであつた服の上着には小便らしい斑點がついてゐました。山口君についてはいろいろな珍談もありますが、可哀さうだから公表は遠慮しておきます。（大槻生）

## 相談

# 夫婦生活と愛玩物

問――私は丸ノ內の某會社に勤める一サラリーマンです。每日山なす事務に追はれて、物見遊山するでもない小生にとつては、休日と朝夕の植木いぢりが唯一の樂みです。「處で妻のさうしたものに無理解と云ふか、無關心と云ふか私の樂みを目茶目茶に荒して呉れます。仕事の都合上旅行もせねばなりません。そんな場合よく後事を託してゆくのですが、あれ程小生が大事にしてゐるのを知つてゐ乍ら、申譯に水をやつて呉れるのがよい方で大概の場合忘れてゐて歸つて來るとひからびてゐるといふ哀れさです。口惜しくて腹がたち、むつとして喧嘩もしてしまふ樣な有樣で、最後はどうせ私よりお花の方が大事なのでせうと、變にひねくれるのです。家族は三つの子供が一人と女中一人ですからさして忙しいといふ程ではありません。貰ひ物の熱帶魚を夏から秋にかけて無事に育てゝ來たのでこの冬を越させたいと珍重してゐたのですが、少し溫めてやつて呉れと云ひおいて行つたのを、してやるは感心だつたのですが、電氣をかけた儘忘れて、何分にも小さい容器の事、中の水が熱しすぎて一匹殘らず死んで居りました。その口惜しさ、妻には親切が足りないのです。命ぜられたからすればよいといふだけの事、そこには小さい命に對する何等の心やりもないのです。考へて見ますとこんな母に子供を預けておく事も不安になつて來ます。勿論大事な子供ですから、大事にはしませうが、自然科學に對する無智はやがて伸びるべき子供

の若芽もつむ事になるのではないかと慄然とします。大人の事、再教育と改まるのは變ですが、私の家庭ばかりの嘆きと諦めて居りましたが、友人にも澤山そんな例がありますので、同様の悩みをもたれる世の男性も多い事と敢て御指導を仰ぐ次第です。（澁谷、信夫）

**答**――全く仰言る通り、さう云ふ悩みを持つ男子は多いやうです。併し貴君自身の心理に就いても分析反省して御覧になる必要があると思ひます。土臺、貴君自身が若い男子としては母性的過ぎるのではないでせうか。女は若い時分にはたとひ肉體上母親となつてゐても、母性本能はまだ十分に眼覺めてゐないのは自然です。たとひ幾多眼覺めてゐたとしても、そのなけなしの母性本能は自分の子供に依つて十分以上に滿足させてゐるのですから、その上マスコットをまで慾張る必要はないのでせう。その餘裕がないのでせう。貴君の命令で仕方なく、お務め的に小動物の世話などしますが、本來自分自身の慾求からすることではありませんから、そこに身が這入らないのは已むを得ない次第で、どうしても、失敗し勝ちになります。これでも、少し年をとつて、子供はそれ〴〵一人前にか、或は少くとも半人前くらゐに生長し、母親としての世話を要しないやうになると、今度は何か小動物の世話を貴君以上になさるやうになりませう。但しその時は、小動物の世話をしてくれるかも知れない代りに若き燕（これも小動物に違ひありません）の世話もしたがるやうになるでせうから、心配はいつまで經つてもとかく人生には絶えないものです。

一體、文明人はいろ〳〵に本能を抑壓せられるので、その本能生活は歪められて來ることは已むを得ません。歪めねば生きられないやうに出來てゐるのです。貴君は若い男子のくせに、いやに老人的で盆栽いぢりをしたり、また妙に母性的で小動物の世話をしたり、さうしてそれを自然科學など〻云ふ尤らしい名目で自己是認又は自己買被りをしてゐられますが、根を洗へば貴君の變態心理（と云ふのも酷ですが）であるかも知れないと云ふ點を自省して見ることもあながち無用ではありますまい。

奥さんとしては、貴君がそのやうに母性的（女性的）になると云ふことが、既に一の癪の種で、なほその上に、そのやうにリビドーを愛玩物の上に纏綿せられることは、それまた當然自分の方にふり向けられるリビドーの不足を來すことを意味する點で、二重の不平なのでせう。だから「どうせ私よりお花の方が……」と云ふ言葉は實に端的に奥さんの本音を出してゐます。その心を抑へて花や小魚の世話をして見ようと云ふ努力を拂はれるだけでも感心なので、も少し圖々しく（併し正直に）なつたら、てんで振向いても見なくなるかも知れませんね。併しまアそれだけ貴君に惚れてゐられる事を意味しないわけでもないやうだから、誠に芽出たい話とお羨み申す外はないやうです。（記者）

▼狩野三郎氏は南支に轉戰中のところ、六月十九日歸還を命ぜられて目下奈良縣の郷里に落着いてゐられる。

▼特別誌友靑木昭氏（文献維持委員野村泰氏紹介）は六月廿一日長逝せられた。御悔み申上げます。

▼私は七月十五日に研究會員山口滋君と二人で富士五湖めぐりをし山中湖畔に一泊し、翌十六日は徒歩で籠坂峠を越えて、御殿場から汽車で歸京しました。五湖めぐりとは云へ、雲助的運ちやんにごま化され四湖しか見ず、本栖湖を逸したのは殘念でした。併し有名な風穴にも這入つて千古の氷柱を見たり、西湖附近では樹海の壯觀に氣宇を大にしたりしました。山中湖畔では夕食後に大出山と云ふ綠色の山に二人で登りましたが、奈良の三笠山のやうな形をしてゐて遠望もとても美しいが、登つて見ると富士と山中湖と相呼應する樣を一望の內に收めてい丶眺めでした。

翌日は籠坂峠を越えて須走に辿り着いた時は相當疲れてゐました。須走の淺間神社で朱印を貰つたり、こま狗その他を分析的に觀察したりして（こま狗は口を開いてゐる方が雌で、その證據に仔狗をつれてゐると山口君が指摘しました）またトボ〱二里ばかり歩きました。その途中で、山口君は路傍の子供からモグラモチを五錢で買ひとつて（都會育ちの君はこの小動物を初めて見たのださうです）ボストンバッグの中へほり込みましたが、御殿場で汽車の中へ這入つてバッグを開いて見たら死んでしまつて、一緒につめてこんであつた服の上着には小便らしい斑點がついてゐました。山口君についてはいろいろな珍談もありますが、可哀さうだから公表は遠慮しておきます。（大槻生）

## 相談

### 夫婦生活と愛玩物

問――私は丸ノ內の某會社に勤める一サラリーマンです。毎日山なす事務に追はれて、物見遊山するでもない小生にとつては、休日と朝夕の植木いぢりが唯一の樂みです。處で妻のさうしたものに無理解と云ふか、無關心と云ふか私の樂みを目茶目茶に荒して吳れます。仕事の都合上旅行もせねばなりません。そんな場合よく後事を託してゆくのですが、あれ程小生が大事にしてゐるのを知つてゐ乍ら、申譯に水をやつて吳れるのがよい方で大概の場合忘れてゐて歸つて來るとひからびてゐるといふ哀れさです。口惜しくて腹がたち、むつとして喧嘩もしてしまふ樣な有樣で、最後はどうせ私よりお花の方が大事なのでせうと、變にひねくれるのです。家族は三つの子供が一人と女中一人ですからさして忙しいといふ程ではありません。

貰ひ物の熱帶魚を夏から秋にかけて無事に育て丶來たのでこの冬を越させたいと珍重してゐたのですが、少し溫めてやつて吳れと云ひおいて行つたのを、してやるは感心だつたのですが、電氣をかけた儘忘れて、何分にも小さい容器の事、中の水が熱しすぎて一匹殘らず死んで居りました。その口惜しさ、妻には親切が足りないのです。命ぜられたからすればよいといふだけの事、そこには小さい命に對する何等の心やりもないのです。考へて見ますとこんな母に子供を預けておく事も不安になつて來ます。勿論大事な子供ですから、大事にはしませうが、自然科學に對する無智はやがて伸びるべき子供

の若芽もつむ事になるのではないかと慄然とします。大人の事、再教育と改まるのは變ですが、私の家庭ばかりの嘆きと諦めて居りましたが、友人にも澤山そんな例がありますので、同樣の惱みをもたれる世の男性も多い事と敢て御指導を仰ぐ次第です。（澁谷、信夫）

**答**――全く仰言る通り、さう云ふ惱みを持つ男子は多いやうです。併し貴君自身の心理に就いても分析反省して御覽になる必要があると思ひます。土臺、貴君自身が若い男子としては母性的過ぎるのではないでせうか。女は若い時分にはたとひ肉體上母親となつてゐても、母性本能はまだ十分に眼覺めてゐないのは自然です。たとひ幾多眼覺めてゐたとしても、そのなけなしの母性本能は自分の子供に依つて十分以上に滿足させてゐるのですから、その上マスコットをまで慾張る必要はないのでせう。その餘裕がないのでせう。貴君の命令で仕方なく、お務め的に小動物の世話などしますが、本來自分自身の慾求からすることではありませんから、そこに身が這入らないのは已むを得ない次第で、どうしても、失敗し勝ちになります。これでも、少し年をとつて、子供はそれ〴〵一人前にか、或は少くとも半人前くらゐに生長し、母親としての世話を要しないやうになると、今度は何か小動物の世話を貴君以上になさるやうになりませう。但しその時は、小動物の世話をしてくれるかも知れない代りに若き燕（これも小動物に違ひありません）の世話もしたがるやうになるでせうから、心配はいつまで經つてもとかく人生には絶えないものです。

一體、文明人はいろ〳〵に本能を抑壓せられるので、その本能生活は歪められて來ることは已むを得ません。歪めねば生きられないやうに出來てゐるのです。貴君は若い男子のくせに、いやに老人的で盆栽いぢりをしたり、また妙に母性的で小動物の世話をしたり、さうしてそれを自然科學など〻云ふ尤らしい名目で自己是認又は自己買被りをしてゐられますが、根を洗へば貴君の變態心理（と云ふのも酷ですが）であるかも知れないと云ふ點を自省して見ることもあながち無用ではありますまい。

奥さんとしては、貴君がそのやうに母性的（女性的）になると云ふことが、既に一の癪の種で、なほその上に、そのやうにリビドーを愛玩物の上に纏綿せられることは、それまた當然自分の方にふり向けられるリビドーの不足を來すことを意味する點で、二重の不平なのでせう。だから「どうせ私よりお花の方が……」と云ふ言葉は實に端的に奥さんの本音を出してゐます。その心を抑へて花や小魚の世話をして見ようと云ふ努力を拂はれるだけでも感心なので、も少し圖々しく（併し正直に）なつたら、てんで振向いても見なくなるかも知れませんね。併しまアそれだけ貴君に惚れてゐられる事を意味しないわけでもないやうだから、誠に芽出たい話とお羨み申す外はないやうです。（記者）

# 第二章　夢の力學

夢の材料がいろ〳〵に纒るのは論理によるのでもなく、事實の客觀性によるのでもなく、將たまた現實の可能性によるのでもなく（それが夢の材料が往々荒唐極る特徴を帶びる所以である）て、その材料の本能感情的な調子と、材料に附隨する感情の濃淡の度によるのである。この纒り方は、知性の點から見ると極めて不可解であり、それが永い間、夢の理解を妨げてゐたのであつた。

本能感情性は、好惡を以つて表現される。夢が從つて本能感情法則に支配され、積極的な感情的意義を表はさぬすべての要素、すなはち愉快でない要素や嫌厭すべき要素を排除し、他の要素をハッキリ浮き上らせる傾向を持つのは當然である。從つてまた夢が、夢見る人の深い、本能的または無意識的な欲望に從つて展開するといふことも當然である。

夢のこの特徴は、民俗的に昔から知られてゐた。ハンガリーには、「豚の夢は團栗、鵞鳥の夢は玉蜀黍」といふ諺がある。これに類することとは、古代のヒエロフイレス、シセロ、アルテミドレス、パラセルセスなどの述作に見られ、また近代のプルキニエ、ノヴァリス、ブルダッハ、シェルナー、イヴ・ドラージュなどの著作にも述べられてゐる。しかるにフロイドが、夢は願望の直接的または象徴的實現を表すといふ推論を發表すると、それは轟々たる反對に際會したのである。

子供の夢では、大抵の場合、願望が極めて率直に表明されて現はれる。從つて夢は、子供が眠る前に完全に成就できなかつた望みを實現してゐるのである。

**第九例**　五歲になる女子。寢る前に母親に連れられてお茶の會に行つたが、そこで砂糖菓子を欲しいだけ食べられなかつた。夢――自分はお菓子屋であつた。

**第十例**　六歲の男子。汽車に乘つて機關車に非常な興味を喚られた。

夢――自分は機關士で本物の汽車を動かしてゐた。

成人でも、缺乏に惱んでゐる時などには、同じように願望が率直に現はれる。ノルデンスキョルト探險隊が極地で進退谷る狀態に陷つた時、隊員は贅を盡した御馳走の夢だの「煙草の山」や、大きな郵便物の包の夢だのを見たのである。

私の扱つたチフス恢復期の、まだ食事を禁ぜられてゐる一女性患者は、一週間にわたり絕えず宴會を催したり、献立を調へたりする夢ばかり見續けてゐた。ある不能な一老男性は、オリンピック競技で、自分が力技の勝利者となつた夢を見た。職業上の過失で免職になりかゝつてゐるある女性事務員は、自分が增給される夢を見た。子宮摘出の手術を受けたある女性は、自分が孵卵器に鷄卵を入れてゐる夢を見た。またある女性は、月經が遲れたのに不安を感じて、衣服に血の染みが附いた夢を見た。月經閉止期に達したある女性は、自分のアパートに全部新しい育兒室が作られ、その床に赤い石板が敷かれてゐる夢を見た。ある老女性は、その七十歲の誕生日に、自分が少女時代に過した寄宿舍に歸り、昔のようにそこの全少女の歡迎を受けた夢を見たのである。

願望の滿足は、努力を避けて睡眠を續けるのが目的の、いはゆる都合の夢には明白に現はれる。

**第十一例**　朝早く起きて、旅行に出かけなければならない男性。この男性は、自分が眼を醒まさねばならぬ時間に、自分が停車場へ行つて、汽車に乘る夢を見てゐたのである。

この樣式で、起きて出發するといふ無意識の傾向は、想像上の實現で中和され、夢を見てゐる人は睡眠を續けることができるのである。

これが卽ち都合の夢である。

夢は現實の反對として解釋せねばならぬといふ民俗的傳說は、願望が現實を訂正し、往々それと對立するといふことがあるからである。事實宗教であれ、道德であれ、政治であれ、人間が自分の望むところを表明し、それを信ぜんと努める時はいつも夢におけると同じく現實を欺いてゐるのである。

夢の中に表明される願望は、確かに本能から生ずる最も深いものであるか、または覺醒時の意識が注意したがらぬ最も壓縮されたものであるのが常である。

それは往々素朴に冷笑的なことがある。

**第十二例**　ある男性。

夢――自分は父親と兄を順々に殺し、それから母親と妻を殺した。

聯想――自分はそれを憎惡の感なしにやつた。それは劇的ではなかつた。それに自分は殺すのにどういふ方法でしたか知らなかつた。

解釋――行爲が明白でないこと、憎惡が存在しないことなどは、この殺人が、純然たる象徴的なものであることを示してゐる。實際に於ては、この夢の本人の男性は自分の父親コムプレクス、兄に對する怨恨、母親代償たる妻に對する自分の愛着の幼兒的態度に氣がつき、そのコムプレクスを除き、自分を父親イマゴオ並びに母親イマゴオに結びつけてゐる無意識の本能感情的紐帶を絶ちたいといふ願望を表明してゐるのである。

だが大抵の場合には、無意識の願望は夢の中に移るに當つて、いろ〳〵な緩和を蒙るのである。それは比喩だの、象徴だのゝ下に身をかくす。

**第十三例**　ある若い男性、金の問題で困つてゐる。老齢の伯母があり、死ねばその遺産が彼の手に入るのだが、その伯母が長い旅行に出て、彼に餞別を呉れた夢を見た。

この長い旅行といふことに、早く死ねばよいといふ望がかくされてゐることは明白である。

**第十四例**　夫婦の義務について極めて嚴格な男性。この男性がある日、あるシャツ店の若い女店員に心を動かし、それを抑制したのであるが、就寢してから自分が穿物をさがし、若い美しい女性がそれを自分に穿かせて呉れた夢を見た。これは眠る前に見た女店員を思ひ出し、自分の足に穿めるといふ形式だが、それは足といふ性的象徴と結びつき、足が牛靴に押し込まれ

たのである。この場景が何を考へさせたかと聞かれると、この男性は「自分の足に合つた穿物を見つける」（恰度いゝ物に出會すの意を持つ慣用句）といふ言葉が心に浮んだと答へた。それは正に彼の妻が、もはやこの理想を完全に果してゐない事實を示すものなのである。

事實、願望といふものは單純なものではない。人間はいろ〳〵な矛盾した傾向から成立つて居り、理性と感情、意志と本能、意識と無意識などの間に分割され（夢はたゞ我々をその一方から他方へ移すことができるに過ぎぬ）てゐるのみならず、また教育と社會生活の必要が、我々の本能そのものゝ中に第二次的、補償的な傾向を生ましめ、それが無意識の最深部に於て、我々の天性の第一次的傾向と葛藤を起すのである。要するに我々は、本能感情的にいつて、もう飲む氣を持たぬ醉漢か、もう罪を重ねる氣のない娼婦に似た境涯の中に常にあるのであり、我々の持つ願望で、多かれ少かれ反對の傾向に重複されてゐないものはない。

かゝる狀態にあつて、我々は自分の人格の結合を保つために、決定、選擇、または冒險（シャルル・ボーヅアンの言葉を藉れば）の機能、本能感情的であると共に精神的である一つの綜合機能を必要とするのであるが、それは優勢な要素に出口を與へるため、あらゆる劣勢な要素に對して關所を設ける役を果すのである。それは精神的な一種の分泌物または抗毒素である。フロイドはそれを名づけて檢閱といつてゐる。

それは次のような形式で活動する。

一、原始的な願望が明確な形態で表明されるが、檢閱がそれに滿足を與へず、表象に苦痛が伴ふといふ形式でそれを堰き止める場合である。

**第十五例**（その實例） 氣隨な母親にひどく壓迫され、母親が死なねば自分は自由になれぬと感じてゐる若い女性。夢で母親が死に瀕してゐるのを見、同時に自分が母親を助けるためにできる限りのことをしてゐるのを見たが、苦痛の感と共に眼が醒めた。

二、原始的願望が象徴の下に粉飾され、夢の本人の明白な意識がそれを理解できず、または理解したがらない場合。これが最も多い場合なのである。

**第十六例**（その實例）　自分に言寄るある男性に正に身を委かせんとしてゐる女性。妹がこの男性のことを男らしさが足りぬとあてこすつた。自分は見かけこそ少し貧弱だが、彼は決して男らしさが足りぬとはいへぬと考へてゐた。夢でこの男性が五馬力のシトロエン自動車に乘つてゐるところを見る。妹がその場にゐて、それを嘲る。すると男性がボタンを押すと共に、車がロールロイスのように延び、とても立派な幌をつけたものに變つた。

三、夢が極めて早く、眼の醒める途端に忘れられる。事實夢の精神的現實は、具體的生活の客觀的現實とは嵌りが惡いから、常に忘却の中に消滅する傾向が大きいのである。

四、原始的な願望が檢閲されると、一つの變型を經て、夢がその反對を表すことがある。夢の本人は、罪惡の代りに自分が善事を行つてゐるように表はれる。

**第十七例**（その實例）　五歳の時、母親が弟を生み、それに乳房を與へたのを見て大幻滅を感じた若い女性。永年をこの嫉妬との葛藤に過し、遂に弟を愛し得るに至つた。だがある日輕い感情の行き違ひが生じ、それが昔の怨恨を覺醒させた後で、彼女は次の夢を見た。「母親が何か弟の氣に入らぬことをいつたので、弟は食卓を離れ、家から飛び出して行つた。自分は弟を追ひかけて追ひつき、弟を慰め、母親と仲直りさせるために家へ連れ歸つた。」

この夢は、自分より愛され、自分より勢力のある母親に優りたいといふ願望を表はしてゐる。それは弟が母親に追はれ、捨てられゝばいゝといふ昔の願望を顚倒してゐるのである。

かやうに夢の中に願望をさがすに當つては、その顯在內容と潛在內容とを區別することがいつも重要である。この相違は一

般に夢の諸要素を、その本能感情的意味及それに伴ふ記憶の點から注意して分析せねば明かにならない。

**第十八例**　極く氣の小さい青年で、友達に株の取引で大儲けをした男が一人ゐる。自分も株の取引に手を染め、少しやつて見たが、まだ自信を得るに至らない。

夢——自分は株屋の友達のところにゐた。自分は彼を訪れた專門家の間で、貴重なダイヤモンドの賣買される場面にゐた。彼等は七百萬とか、八百萬とかいふ金額の話をしてゐた。

解釋——この夢を理解するには、夢の本人が少し前に、あるダイヤモンド商が巧妙な詐僞にかゝつた話を聞いて心を打たれたことを知つて置かねばならない。そのダイヤモンドは、七百萬か八百萬フランの代價のものだつたのである。從つてこの夢は「自分の友達（それから友達を訪れる人々）が、その取引の犧牲になればよい」といふ意味を表してゐる。それは嫉妬から出た望みであり、大金を扱へないことに對する慰藉なのである。

夢の顯在內容と潛在內容との相違は、しばしば夢の不愉快な特徵を說明する。デバッカーは、それを一八八一年に明確な願望と、強度な葛藤を持つ幼兒に於て確認した。サラー・ウィード及フロレンス・ハーラムは、一八九五年、それを成年者の夢に關する統計で立證した（苦痛な夢の五八％）。

しかしこの不愉快な特徵から、願望の方向に沿ふ夢の解釋を否定する議論を引出すのは間違つてゐる。我々は個人に於ける矛盾した諸傾向の錯雜を考慮し、また人間をして假令そのために苦しまうとも、自分の深い憧憬を實現させねば止まぬ無意識の力としての願望を考慮せねばならぬからである。

子供の夢の願望は、晝間到達できなかつた明白な、よく知つてゐる目的を追及する。しかるに成人に於ては、かゝる形態の願望は、非常な缺乏の時でなければ夢を生まない。成人の夢の大部分は、晝間生じて直ちに排斥された願望か、または意識に現はれもしなかつた願望を表明してゐることが多いのである。

# 編輯後記

精神病研究號としてはその出現のあまりに遲かつたことを讀者諸氏は不思議に思はれるかと思ふ位です。これは併し大した問題です。なほまた次の機會に別の問題を扱つて見たいと考へてゐます。

×

山村道雄氏は東北帝大醫學部精神科教室丸井教授門下にあつて「精神病學及び精神分析學論叢」を編輯してゐられる方です。嘗て本誌に寄稿せられた古澤、木村、早坂諸氏の後輩にあたられます。御多用中御寄稿を感謝します。高橋鐵氏は久しぶりの執筆で、讀者諸氏はなつかしく思はれるでせう。

竹崎節夫氏は東京外國語學校ドイツ語科在學中の方で、時々某誌に創作も發表してゐられます。近い將來を期待してゐます。氏の譯せられた論文は次號で完結します。特輯關係のものを全部一度に載せられなかつたことは殘念ですが編輯の都合上已むを得ませんでした。譯者及び讀者にお詫びします。宮田氏の芭蕉論も次號完結します。

序ながら先號執筆の澤田雅男氏を紹介するのを忘れましたが、氏は久しい以前からの特別誌友で、千葉縣在住です。岩倉氏は今度はロレンスを譯して下さいました。ロレンスも流石になかなかいいところがあります。

×

大槻氏著『戀愛性慾の心理とその分析處置法』は七月三十日に第三版を新刷いたしました。この物資窮乏の時代に、從前と殆ど變らぬ體裁の書を出し得たことの苦辛の程を買つて下さい。但し少し値上りになり、二圓八十錢になりました。御諒承下さい。序ながら申上げておくが、三十一頁五行の「悲怖症」は「恐病症」と再版で訂正したのを第三版では訂正漏れになつてゐる。第三版を買はれた方にはよろしく御加筆を乞ふ。

フロイド全集中の第二卷「日常生活」と第九卷「分析戀愛論」とは最近第四版が出來ました。御註文を控へてゐて下さつた方々に御報告申上げます。

大槻氏著「社會生活法」(人生創造社版)は六月中に第五版が出ましたが近頃朝鮮の或る女學校で教科書に使つてゐるさうです。その旨附記して同社に澤山註文があつたさうですなるほど、卒業前の女學生に讀ませることは現實生活への準備教育としていいことだと思

ひます。（R生）

×

その後の新特別誌友諸氏を御紹介申上げます。御支援を深謝します。

▲澁谷區……簑浦新吾氏
▲千葉縣……宮本縣氏
▲世田ケ谷區……劉榮增氏
▲大阪市……廣井八重氏
▲日本橋區……丹羽義正氏
▲淀橋區……高木統他郎氏
▲名古屋市……片山智正氏
▲澁谷區……福田氏
▲豐島區……遠山喬氏
▲世田ケ谷區……森祐之氏
▲北海道……山村軍平氏
▲横濱市……鈴木重一氏
▲新潟縣……平野行一氏
▲山口市……長谷部康夫氏
▲臺中市……小田代健二氏
▲鳥取縣……妹尾正氏
▲大正市……吉田義治氏

正誌發行の度毎に、新特別誌友の御紹介をする事が出來まして、私共も心から喜んで居ります。御存知の通りこのように特殊な内容を持つ雜誌は、どうしても特別誌友に續々と加つて頂きませんと、編輯、經營共に仕事がやりにくいのでございます。近頃の物資の缺乏に耐へて此の雜誌が、愈々御覽の通り着實な成長を遂げつゝあるのも皆讀者の方々の御支持、御協力に負ふ所でございますが、何卒この上とも成る可く直接に特別誌友として購讀御申込み下さいますよう願上げます。尚、繼續誌代を御送り下さいました方々にも厚く御禮申上げます。（岐美）

×

次號正誌は『結婚と離婚』に就いて特輯して見ませう。丁度十一月號ですから、結婚季節に當ります。殊に「生めよ殖えよ」をスローガンとする我國現下の情勢に鑑み、種々の角度から、この問題を研究して見たいと思ひます。結婚風俗も分析解釋したいと思ひますその他に、編輯部では、いろ〳〵方策を練つてゐますが、今度は豫告は故意に控へておきませう。

讀者諸君の間からも、結婚についての諸々の事實を御報告下さると有難い次第であります。本誌は執筆者から一方的に働きかけるばかりでなく、編輯部を通じて執筆者と讀者とが常にその位置を交互的にして行きたいと考へてゐるものであります。

昭和十四年八月二十五日印刷
昭和十四年九月一日發行
（月刊）定價 五十錢
（外地定價） 五十五錢
東京市本郷區駒込動坂町三二七
編輯兼發行人 大槻憲二
東京市板橋區板橋町三ノ六四
印刷所 帝都印刷株式會社

定價一部 五十錢（送料共）
半年分 一圓五十錢（送料共）
一年分 三圓（送料共）

御註文規定

・本誌の御註文は一切前金に御願ひ致します。
・御送金はなるべく安全至便なる振替を御利用下され度く、振替口座東京七八八一七番へ御拂込み下さい。
・切手代用の場合は一割増に願ひます
・本誌廣告に關しては、御照會次第部員を伺はせます。

東京市本郷區駒込動坂町三二七
發行所 東京精神分析學研究所
振替口座東京七八八一七番

大賣捌所 東京堂・東海堂・大東館・北隆館・（大阪）福音社

# 合本單册「精神分析」（特輯題目及び定價）一覽表

**東京精神分析學研究所**
本郷區動坂町三二七・振替東京七八八一七番

## 第一巻・上

創刊號（昭和八年 五月）「エディポス研究號」＊
第二號（同 六月）「フロイド喜壽祝祭劇記念號」
第三號（同 七月）「教育研究號」＊
第四號（同 八月）「夢の研究號」（第一）＊
（合本としては品切）

## 第一巻・下

第五號（同 九月）「兒童心理研究號（第一）」＊
第六號（同 十月）「社會思想・犯罪心理研究號」
第七號（同 十一月）「戰爭心理研究號」
第八號（同 十二月）「夢の研究號」（第二）
（合本としては品切）

## 第二巻・上

第一號（同九年 一月）「心理療法研究號」
第二號（同 二月）「女性心理研究號」＊
第三號（同 三月）「傳說研究號」
第四號（同 四月）「文學研究號」
（合本としては品切）

## 第二巻・下

第五號（同 五月）「ドストイフェスキー研究」
（六月休刊・以下隔月刊行）
第六號（同 七・八月）「戀愛心理研究號」
第七號（同 九・十月）「性慾心理研究號」＊
第八號（同 十一・十二月）「夫婦生活研究號」
（合本としては品切）

## 第三巻

第一號（同 十年一・二月）「兒童心理研究號」（第二）
第二號（同 三・四月）「宗教心理研究號」＊
第三號（同 五・六月）「自殺・情死心理研究號」
第四號（同 七・八月）「同性愛と異性愛」
第五號（同 九・十月）「家庭問題と親子關係」
第六號（同 十一・十二月）「常態及び變態の性心理」
（合本としては品切）

## 第四巻

第一號（同十一年一・二月）「性格改造研究號」
第二號（同 三・四月）「母性と妖婦研究號」
第三號（同 五・六月）「夢と幻覺研究號」
第四號（同 七・八月）「兒童分析と教育研究號」
第五號（同 九・十月）「愛慾葛藤の諸問題」
第六號（同 十一・十二月）「道德の分析」
金三圓（送料十五錢）

## 第五巻

第一號（同十二年一・二月）「思春期の研究」
第二號（同 三・四月）「不良少年少女の心理」
第三號（同 五・六月）「生理と心理」
第四號（同 七・八月）「男性と女性」
第五號（同 九・十月）「男女性格分析」
第六號（同 十一・十二月）「幼兒心理研究」
金三圓（送料十五錢）

＊印は單册としては品切、その他は在庫す。單册代價送料共各五十錢

## 『精神分析』第六巻 合本內容

第一號(一、二月號)夢と象徵(正誌)
第二號(三月號)文藝と繪畫(正誌)
第三號(四月號)東洋醫學と分析(冊子)
第四號(五月號)處女性の問題(正誌)
第五號(六月號)斷種法と優生學(冊子)
第六號(七月號)貞操の心理(正誌)
第七號(八月號)受分析者の心得(冊子)
第八號(九月號)自己愛の研究(正誌)
第九號(十月號)分析學邦文獻(冊子)
第十號(十一月號)神經症研究(正誌)
第十一號(十二月號)分析學の勸め(冊子)

▲合本は送料共三圓五十錢▲單冊は正誌一部五十錢
冊子十錢(何れも送料共)

## 特別誌友規約

一、本研究所在外研究會員を特別誌友と稱す。

一、特別誌友は本誌の豫約購讀者として半年分(一圓五十錢)又は一年分(三圓)前納の義務を有す。

一、特別誌友は偶數月發行「冊子精神分析」の無代配布を受く。

一、特別誌友はその研究、感想、報告を、編輯部の了解を得て本誌上に發表することを得るのみならず、司會者の承諾を得て研究會、講習會に出席することを得。

一、希望者は購讀料金と共に、住所、姓名は勿論、年齡、職業その他を報告ありたし。(且つ何月號より送本すべきかを明記せらるべきこと。)

昭和十三年六月十日第三種郵便物認可
昭和十四年八月廿五日印刷納本
昭和十四年九月一日發行
每月一回一日發行

精神分析

九月號

定價五十錢・外地定價五十五錢

VII. Jahrgang, Heft 9–10. Sept.—Okt., 1939. Erscheint zweimonatlich.

# Tokio Zeitschrift für Psychoanalyse

Herausgegeben vom „Tokio Institut für Psychoanalyse"

**(Hefttitel: Die Psychose)**

## INHALT



**Preis des Einzelhefetes, 50 sen**

**Tokio Psychoanalytischer Verlag**

327. Dozakacho. Hongoku Tokio Nippon